
関西社会学会のあゆみ

第26回大会(1975年)～第50回大会(1999年)

——創立50周年を記念して——

関西社会学会 編

目 次

| | | |
|---|------|----|
| 50周年を記念して | 宝月 誠 | 1 |
| 第50回大会記念シンポジウムの記録 | | |
| 《総合シンポジウム 社会学の応用可能性——社会学に何ができるのか——》 | | |
| 第1報告 社会学とジェンダーポリティックス | 伊藤公雄 | 5 |
| 第2報告 環境からみた社会学の応用可能性 | 鳥越皓之 | 24 |
| 第3報告 青少年対策と青少年（問題）の変質 | 徳岡秀雄 | 38 |
| 《ミニシンポジウム》 | | |
| 第1部会 社会学は「役に立つ」か？ ——犯罪・社会問題の経験的研究を通して考える—— | 鮎川 潤 | 48 |
| 第2部会 ディシプリンとしての社会学 ——そのアイデンティティとキャパシティ—— | 大野道邦 | 56 |
| 第3部会 臨床のことばと学(術)のことば | 大村英昭 | 64 |
| 第4部会 知の考現学としての可能性 | 高坂健次 | 72 |
| 第26回～第50回大会の記録 | | |
| 第26回大会 (1975年 関西学院大学) | | 83 |
| 第27回大会 (1976年 追手門学院大学) | | 87 |

| | | |
|--------|-----------------|-----|
| 第28回大会 | (1977年 大阪市立大学) | 90 |
| 第29回大会 | (1978年 佛教大学) | 94 |
| 第30回大会 | (1979年 富山大学) | 98 |
| 第31回大会 | (1980年 大谷大学) | 103 |
| 第32回大会 | (1981年 甲南女子大学) | 108 |
| 第33回大会 | (1982年 愛知大学) | 113 |
| 第34回大会 | (1983年 京都大学) | 118 |
| 第35回大会 | (1984年 奈良女子大学) | 123 |
| 第36回大会 | (1985年 金沢大学) | 128 |
| 第37回大会 | (1986年 同志社大学) | 133 |
| 第38回大会 | (1987年 愛知県立大学) | 138 |
| 第39回大会 | (1988年 立命館大学) | 143 |
| 第40回大会 | (1989年 龍谷大学) | 148 |
| 第41回大会 | (1990年 関西学院大学) | 153 |
| 第42回大会 | (1991年 神戸大学) | 158 |
| 第43回大会 | (1992年 奈良大学) | 163 |
| 第44回大会 | (1993年 椋山女学園大学) | 169 |
| 第45回大会 | (1994年 大阪大学) | 174 |
| 第46回大会 | (1995年 大阪府立大学) | 179 |
| 第47回大会 | (1996年 吉備国際大学) | 182 |
| 第48回大会 | (1997年 金城学院大学) | 188 |
| 第49回大会 | (1998年 甲南大学) | 192 |
| 第50回大会 | (1999年 関西大学) | 201 |

編集あとがき

211



50周年を記念して

関西社会学会会長 宝月 誠

関西社会学会も50周年の記念すべき大会を無事に終え、新たな飛躍に向けて一步踏み出したところです。このめでたい節目を祝して、50回大会ではさまざまなテーマのシンポジウムを開催致しました。20世紀の関西社会学会の総括と21世紀への展望を込めて行われたものですが、お陰様でいずれのシンポジウムも盛会でした。

本冊子はそのときの報告の要旨と26回大会から50回大会までの各年の研究報告の題目と報告者をまとめて編集したものです。25回大会までの研究報告題目は「関西社会学会のあゆみ」として、ご存じの方も方も多いことと思いますが、25回大会のときに先輩たちのご尽力で編集・出版されております。今回の冊子は基本的にそれを継承したものです。両方の冊子をお目通し頂ければ、関西社会学会の50年のあゆみを一望できることと思います。21世紀にはこうした活字メディアではなくて、電子メディアでの情報の蓄積・伝達も一般化することを考えれば、こうした冊子もおそらく最後のものになるのかもしれませんが。活字文化の20世紀の遺産として、この半世紀の記録は将来、貴重な資料として活用されることを願っております。

さて、学会の半世紀を振り返ってみたとき、まずその会員数の増大に驚かされます。ごく少数の大先輩の先生方の内輪の研究サークル的な雰囲気の中からは立ちあげられた学会が、現在では800名を超える会員を擁するまでに成長し、地域学会であるにもかかわらず、会員は関西地域だけでなく日本各地に散らばっておられます。単にこうした量的な拡大だけではなく、大会での研究報告も活発化しており、若手の研究者や大学院生にとっては本学会での報告は、学界へのデビューを飾る最初の検舞台となっております。また、中堅以上の研究者層にとりましても、シンポジウムや研究発表はその時代の社会学の関心や動向を知る上で貴重な機会を提供し、また旧知の人との親好を暖めさらに新しい知己を得る交流の場としても機能してきたことと思います。

本冊子に収められております四半世紀分の研究報告のテーマを通覧されますならば、そこからいろいろな意味を読み取ることが可能かと思えます。理論の分野ではデュルケームやヴェーバーの古典への関心はある程度持続されておりますが、機能主義から現象学的社会学やミクロ社会学へ、さらにはハーバーマス、フーコー、ルーマン、ブルデューなどの

流行といった具合に、理論の関心はめまぐるしく変化しております。経験的な分野では、さすがにその時代の問題（e.g. 災害や地域社会問題）を反映したテーマが含まれておりますが、近年は趣味に近いテーマとか自らの生活経験に関連したイシューなど実に多様なものが取り上げられる傾向を示しています。文化社会学的な事柄への関心や社会史、さらに一昔前ならば研究テーマとしてはばかられたような身近かな事柄もテーマになっております。こうしたことは社会学の「成熟」の証、といえないこともないのかもしれませんが。

もちろん、こうした変化は表面的な現象にしかすぎないともいえます。そこに通底するものをどのように読み取るかは、各自によって異なってきます。ポスト・モダンに染まった人は、社会学的な「知」の累積や積み上げを素朴に信奉できないにしても、諸理論との対話・対決・交渉さらに経験的世界と理論の交流を通じて、学会も「社会的世界」と同様に生成していくものと考えることができます。ひとつの「社会的世界」としての学会がどれだけ活性化するかは、その世界に参加する人々の知的な活動だけでなく、さらに慣習・資源（特に技術）・組織などによっても左右されます。今後は会員相互の討議の強化とともにこれらの要素の点検を通じて、関西社会学会が21世紀にさらに一段と活性化し、新たな「知」を生み出すことを願っております。

なお最後に、50回大会の開催に際して、また冊子の編集に当たって、それぞれご尽力頂きました方々に厚くお礼を申し上げます。

第 50 回大会記念シンポジウムの記録



社会学とジェンダーポリティクス

伊藤公雄（大阪大学）

はじめに

1960年代の第2波フェミニズムの登場以後、国際的にも、また日本国内においても、ジェンダーに関する政治の動きが活発化している。しかし、それは多くの場合、ウィーメンズ・イシューをめぐる課題に重きを置く形で展開してきた。1975年メキシコシティで開催された国際女性（婦人）年世界会議での「世界行動計画」採択以後、1979年の女性差別撤廃条約の国連総会での採択、コペンハーゲン（80年）、ナイロビ（85年）、北京（95年）、さらには2000年ニューヨークで開催の国連特別総会2000年会議と、相次ぐ世界女性会議での「将来戦略」「行動綱領」採択など、女性差別撤廃の動きは、20世紀後半における大きな国際的政治課題としてあった（あり続けている）といえるだろう。

ここでいう女性差別とは何か。「女性差別撤廃条約」は、性差別について、以下のように簡潔に定義している。

「女性に対する差別とは、性に基づく区別、排除または制限であって、政治的、経済的、社会的、文化的、市民的その他のいかなる分野においても、女性（婚姻をしているかいないかを問わない）が、男女の平等を基礎として人権および基本的自由を認識し、享有しまたは行使することを害しまたは無効にする効果または目的を有するものとする」（第一条）。

こうした女性の人権の確立をめぐる動きと平行するなかで、女性学（ウィーメンズ・スタディーズ）もまた、大きく発展してきた。女性学は、これまでの男性を基準として選択され、定義されてきた社会的・政治的・文化的な現象を、女性という新たな視点からとらえ返すことを要求した。これまで「瑣末な問題」「周縁的な課題」として十分に光を当てられなかった女性という視点に立ったこの新たな研究スタイルは、これまで「自明」とされてきた事柄の背後にひそむ性によるヒエラルキーや、「男性支配」によって隠蔽されてきたさまざまな事柄を、新たな文脈から位置づけ直すことに成功した。その衝撃力は、人文・社会科学のみならず自然科学に対しても一種のパラダイム転換を生み出すとともに、これまでの男性中心のアカデミズムのあり方そのものを揺り動かすことにもなった。たとえば、女性学の誕生の

地であるアメリカ合州国では、1980年の段階で、全米で約3万の女性学のコースが存在したといわれるほどである。

と同時に、特に1990年代に入って以後、ウィーメンズ・イシューの政策課題としての浮上やウィーメンズ・スタディーズの発展に、共感ないし反発する形で、男性を研究対象とする研究も大きく広がろうとしている。男性というジェンダーからの歴史や社会の見直しという作業である。女性という視点は、確かに、これまでの歴史のなかで欠落して来た問題を、議論の上に上げることに成功した。それならば、これまで「人間=男」として描かれて来た歴史を、一般的な「人間」としてではなく、「男性」というジェンダーに縛られた性に焦点を絞り直すことで、新たな発見が得られるのではない。こうした発想が生まれるのは必然だっただろう。この視点は、今や、国際的にも共有されつつある。「女性性=〈女らしさ〉」という視点からの考察が、社会学、文学、歴史学、美学、政治学、思想史から自然科学史にいたる広範な分野で新たなパースペクティブを作り出したように、「男性性=〈男らしさ〉」というもうひとつのジェンダーの視点からの研究もまた、1990年を前後して、多くの研究業績を誕生させつつある（伊藤 1993、1996 など）。

実際、欧米のアカデミック・ジャーナルにある程度継続的に目を通して人なら、90年代中期以後、タイトルに masculinities という語を含む研究論文が、急増していることに気がついてははずだ。これまで人間=男性という暗黙の視点によって切り取られてきた近代諸科学は、女性学・フェミニスト研究の登場によって多くのパラダイム革新を求められることになった。その動きは、必然的に、人間一般としての男性ではなく、男性というジェンダーによって拘束された存在としての男たちについての研究という新たな視座を生み出しつつあるのだ。「メンズ・イシュー」、「メンズ・スタディーズ」の登場である。男性学・男性性研究を授業科目とする大学も登場しつつある。アメリカ合州国では、すでに1984年の段階で、全米で40の講座が開かれていたという。90年代に入ると、授業科目としての男性学は急増し、1992年には、全米で400講座までの広がりをみせている（フェミアノ、1992）。アカデミック・ジャーナルの領域においても、1998年には Sage 社から men&masculinities が出版されるなど、男性学・男性性研究の広がりが見えつつある。

また、80年代に入って以後、ゲイ・ムーブメントに代表される流れもまた、国際的な課題として登場してきた事を忘れてはならないだろう。この流れは、インターセックスの人々のかかえる課題やトランスジェンダーの人々の動きと合流し、今や、「クィア・イシュー」という形で議論されることも増えてきた。それに対応するように、「クィア・スタディーズ」

もまた発展しつつある。

こうして、当初、ウィーメンズ・イシュー中心に発展してきた性・性別をめぐる諸課題およびそれをめぐる考察の作業が、世紀の転換点において、ジェンダー・イシュー、それに対応したジェンダー・スタディーズという形で新たな広がりをもとうとしているのである。

1 ジェンダー化された社会としての近代社会

こうしたジェンダー・イシューの急浮上の背景には、明らかに、近代社会の作り出したジェンダーの枠組みのゆらぎが存在していると思われる。

近代産業社会は、男女の二項図式をそれ以前の社会以上に強調する社会、いわばジェンダー化された社会であったといえる。もちろん、前近代社会においても、明らかに男女の二項図式は存在していた。しかも、こうしたジェンダーの構図は、人々の日常意識から宗教的世界観までをふくむあらゆる世界像の内に深く根をおろしていたと考えられる。たとえば、現在でもナバホ・インディアンの人々の間では、昼＝女性、夜＝男性、黄色＝女性、白＝男性といったかたちで、世界を男女に二分割するような宇宙像が存在しているといわれる（青木、1986など参照）。もちろん、この男女の分割は、地域によって異なる。たとえば、によれば、北アフリカのカビル族では、昼は男性の領域であり、夜が女性に割り当てられている（ブルデュー、1990など参照）。同様のことは、東洋文化における、陰＝女性、陽＝男性という二分法をもつ陰陽図式にもみられる（クリステヴァ 1981 など参照）。いずれにしても、伝統社会においては、男女それぞれの役割が固定されるとともに、男女双方の相互に補完的な関係によって世界の秩序が保たれてきたのだ（そのことはおそらく、西欧社会においても同様であっただろう。男性名詞・女性名詞の存在は、明らかにその名残といえるだろう）。

近代化以前の多くの文化においても、男性優位の傾向が強いのは事実である。しかし、前近代社会では、男女の相互補完的な関係性が強調されることで、男女の役割は、安定した関係を維持することができていたともいえる。つまり、男女関係そのものが、共有された世界像の内に構造化されることで固定化され安定した状態におかれてきたのだ。そこでは、いずれか片方が欠如することは、世界の安定性を揺るがせるがゆえに、男女の役割領域が高い独立性をもって保持されていた。と同時に、生活のためには相互の協力が不可欠であり、それゆえ、男女の力関係もまた、一定の「対等性」が維持されることになったと考えられる。

しかし、近代社会の登場は、共有された世界像に支えられた安定した共同体社会（差別が

固定化・構造化されることで安定した会)を食い破り、それなりに安定していた男女の相互補完関係を崩壊させることになった。トマス・ラカーは、この変化を「ワンセックス・モデルからツーセックス・モデルへの変換」ととらえている。つまり、「人間を一種類の基本的型に属するものとして、男女の性差を種類ではなく程度の違いと考える思考枠」から、男女の生物学的性差をそれまでになく強調する方向へと、人間の認識の仕方が変化したのである。確かに、伝統社会においては、男女の二項図式は文化的・社会的に強調されていた。世界像そのものが、男女という区分けのなかで把握されていたのだ。しかし、この二項図式は、生物学的な存在としてのオス、メスの対立についてはあまり配慮がなされていなかった。むしろ、身体的には男女ともきわめて相同性が高いものとして認識されていたのだとラカーはいう。つまり「男性、あるいは女性であるということは、社会において特定の地位を占め、特定の文化的な役割を担うことであって、生物として二つの本質的に異なる性のいずれかとして存在することでは」(ラカー、1998年)なかったのだ。

近代社会の登場とともに広がった、男女の生物学的性差の強調は、当然のことながら、男性・女性をめぐる認識、男女の生活の仕方、身体技法におけるそれまでになかった変容を生み出すことになった。簡単にいえば、それまでは個々人の差として認識されていたものまでが、男女という生物学的な根拠をもとに認識されるようになったのである。この視点を、スコットやバトラーが提起したように、セックスがジェンダーを規定するのではなく、個々の多様性を男女という二項図式に強制的に分割するジェンダーの認識こそが、セックスの強調を作り出した、といいかえることもできるだろう(バトラー 1999、スコット 1992 など参照)。近代社会は、前近代社会以上に生物学的な男女の二分割に過剰に意識的な社会なのだ。そこでは、女性たちは、しばしば男性と比べて、本質的・先天的に劣る存在として認識された。同時に、この「弱き性」である女性たちは、社会の主要な担い手としてではなく、あくまで男性の庇護の元にある存在であることが求められたのである。

こうして、近代産業社会の登場は、それまで地域の特徴をもちつつ、同時に、コスモロジカルな二項対立の図式をもち続けてきた男と女の関係(イリイチ風に「バナキュラーなジェンダー」構造と呼んでもいいかもしれない)を、地球規模で同じ方向に水路づけることになったのである(イリイチ 1983)。その方向は、基本的には、男性は「生産労働=『公的』労働=有償労働」を、女性には「(家事・育児・介護など、現在・未来・過去を貫通する労働力のケア労働としての)再生産労働=『私的』労働=無償労働」という傾向をもっていた。そして、このジェンダーによる新たな分業構造は、明らかにそれまでそれなりに保持されてき

た女性の権力や発言力を弱めるとともに、男性支配を強化させることにつながったのである

しかし、「支配する性」であるはずの男性の側にとっても問題はそう簡単なことではない。それまで彼らを支えてきたコスモロジーによる安定した「男性像」はずでに失われようとしているからだ。近代社会、個人主義の社会において、男たちは、人々に共有された共同体のコスモロジーによってではなく、自分個人の力で、自分が「男」であることを証明することが要求されるようになったのだ。

男性たちはの〈男らしさ〉へのこだわりという視点をもう少し見てみよう。ロバート・コンネルは、男性たちの示す男性性が多様性をもつことを認めつつ、同時、男性たちがある共通の志向性をもっていることを「ヘゲモニックな男性性」という言葉で表現している。すなわち、男性たちは、もうひとつのジェンダーである女性に対しても、また自らより「下位」にあると認識される他の従属的な男性に対しても、支配的であることがつねに要請されるのだ（コンネル 1993）。

逆にいえば、近代社会において、男性たちは、自覚的かそうでないかにかかわらず、つねに「自分が男である」ということへの自己証明へのこだわりに縛られているともいえる。男性にとって、〈男らしさ〉はアイデンティティの重要な核なのだ。もし、他者から「男らしくない」と認識されれば、自分の存在そのものの危機感を覚える場合さえある。とはいっても、男性たちは、自分一人では、自分の〈男らしさ〉を証明できない。自分が「男である」と自己確認するには、他者（それは同性である場合もあれば、女性である場合もあるだろう）からの「お前は男だ」という承認が必要なのだ。この他者からの「男」としての承認を獲得するためにこそ、男たちは、社会的な地位を求めて競争し、美しい女たちを「所有」しようとし、権力を追い求めるのだ、ということもできるだろう（伊藤 1993、1996）。

他者の承認によって、はじめて自分の男としてのアイデンティティが確保されるということとは、実は、むずかしい問題を含んでいる。まず、自分の優越や所有や権力を証明するためには、他者を自分の称賛者として自分の側にひきつけなければならない。他者を自分の側にひきつけるためには、さまざまなかけひきが必要になる。ときには、他者の利害関心に訴えたり、また、ときには脅迫という手段を使う場合もあるだろう。

男たちは、こうしたさまざまな方法を駆使して、自分が男であることを証明するためにさまざまな「努力」をしている。ここで重要なのは、男たちが、自分の男としてのアイデンティティの確保を他者に依存しているということだ。男たちは、自分一人では、自己のアイデンティティを確保できない。つねに、外部の基準、外部の視線の承認によってしか、「男」

としての安定した自己証明ができないのだ。

外部の視線によってしか、自己証明ができないということは、大きな矛盾だ。しかし、この矛盾を埋めなければ、自分の「男」としてのアイデンティティを確保できない。そして、この他者によってしか自己の〈男らしさ〉が証明できないという矛盾が、男たちに、「男のメンツ」意識という重い鎧を身につかせ、能力以上の「無理」を強い、弱みを隠蔽させ、力を示すことを要求するのだ。

2 現代日本社会のジェンダー・イシュー

しかし、1970年代前後を画期とする近代社会のゆらぎは、近代に特有のジェンダー化された社会の構造にヒビを入れることになった。その背景には、情報産業・サービス産業の拡大にみられるような産業構造の転換や、それともなう労働の形態の変化、さらに、本格的な男女対等をかかげる新たな理念の拡大といった価値意識の転換があっただろう。

1980年代に入ると、この近代社会のゆらぎのなかで、ジェンダー・イシューは、経済先進国においてはいわゆる「新しい社会運動」の流れと連動し、国際社会における共通課題としてはっきり認識されるようになった。特に、ヨーロッパ社会においては、エコロジー政策とジェンダー政策が、新たな政策課題の中心的テーマとして浮上していることはよく知られている。

このような国際的な女性問題の広がりの中で、日本社会もまた、現在、大きな転換を迫られている。しかし、残念ながら、日本の現状は、国際的に見て「女性差別大国」といってもいほどの状況にあるのも事実である。

たとえば、男女の賃金格差である。全労働者でみた平均賃金における男女格差は、日本では、男性100に対して、女性はその半分ではない(正規職員に限定しても6割程度である)。現在、国際社会における女性の平均賃金は、男性の約4分の3前後であることを考えると、日本の賃金格差の大きさは歴然としている。さらに問題なのは、他の諸国では、近年、この格差が縮まりつつあるのに、日本の場合、ここ一五年ほど、ほとんど何も改善されていないということである。

こうした日本の女性のおかれた状況を象徴するようなデータがある。しばしば「M字型曲線」と呼ばれる、女性の労働力率のグラフである。日本の女性は、その70%以上が一度は就職するが、20代後半くらいから職を離れる人が増加する。しかし、40前後で、再び就職す

るが（といっても、年齢制限などがあるため、多くはパート労働に就く）、年をとるにつれて退職していくという、30代に谷ができるM字型のカーブを描くのである。欧米でも女性の労働力率は、かつてはこのM字を描いていた。しかし、現在では、ほとんど谷ができない形になっている。

なぜM字なのか。そこには日本のジェンダー構造の問題点が複雑にからみあっている。まず、「女性は結婚したら家に入るのが当然」という、社会慣習が根強いということがあげられる。また、日本の企業文化のなかに、女性を一人前の労働力として見ない古い意識が潜んでいることも指摘しておかなければならないだろう。「女はどうせ腰掛けだから」と、雇用しても、責任ある仕事を与えない、またジョブトレーニングもきちんとなし。結局、いわゆる一般職という名の補助的労働のなかで、やる気はどんどん衰える。そこで結婚ということになれば、退屈な労働から解放されるチャンスというわけで、退職することになる。退職すれば、「やっぱり女は腰掛けだから」ということを、逆に証明することになる（一種の自己成就的予言である）。もちろん、女性たちのやる気も問題なのだろうが、女性の能力の開発を本気で望むなら、その前に、こうした悪循環を断ち切る努力が必要だろう。

さらに、保育所等の社会サービスの遅れも、Mの谷を生む原因になっている。また、税制や年金制度も、「夫が外で働き、妻は専業主婦で家庭を守る」という生活スタイルを基準に家庭を考えているという（いわゆる103万円の壁や、被3号保険者の）問題もある。

最後に、男性の家事・育児分担の未成熟という問題がある。男性たちがもう少し、家事や育児に参加してくれれば、女性も働き続けることができるかもしれない。しかし、国際比較のデータを見ても、日本の男性の家事時間は極端に短いのである。

世間も「女は家庭」というプレッシャーをかける、子どもに何かあればみんな「母親」の責任にされる。仕事も補助的労働で自分の能力がいかせない。保育園などの社会サービスも十分ではない。さらに仕事に加えて家事というセカンド・シフトが待っている生活はたまらない。というわけで、しんどい生活のなかで、仕方なくどちらかが職を辞めるということになれば、女の方が給料は低い。また、103万円の枠の内部なら税の控除もあるし扶養家族手当ももらえる。年金も払わずにすむ。それなら辞めようということで、このM字の谷がなかなか上昇しないというわけだ。

政策決定・意思決定への女性の参加という面でも、日本が「後進国」であることは数字の上からも明らかだ。国連が毎年発表するGEM（ジェンダー・エンパワーメント測定）によれば、日本社会の女性の社会支出度は102ヶ国中38位（1998年）でしかない（表1）。し

かも、何とか 38 位になっていられるのは、専門職に占める女性の割合と女性の稼働所得割合が、世界平均を上回っているからにすぎない。GEM の他の 2 つの指標、女性の国会議員比率、女性の管理職比率を見れば、相対的には女性の社会進出が遅れている発展途上国の平均を下回るのが実情である（表 2）。

国連の規約人権委員会は、5 年毎に、各国の人権状況について勧告をおこなっている。1998 年 11 月の日本政府への勧告においては、女性に対する暴力の取り組みが遅れていること（たとえば、お隣の韓国は 1997 年に、また、台湾は 1999 年に、それぞれドメスティック・バイオレンスに対する法的措置を立法化している）、さらに、民法上の性差別（婚姻最低年齢の男女格差、女性のみでの再婚禁止期間、非嫡出子への差別など）の改善の必要性について勧告を受けている状態である。

また、OECD の調査によれば、加盟国のなかで日本の女性の働きやすさの指標は、23 ケ国中 19 位でしかない（表 3）。ちなみに、この調査は、女性の働きにくさと少子化傾向が正の相関関係にあることも明らかにしている。

現状の性別分業の克服は、現在進行中の少子化・高齢化の問題とも密接にからむ課題であることも見えてくる。少子・高齢化の進行は、労働力人口の不足を生み出すとともに、高齢者福祉を始めとする社会的負担を拡大させることは明らかである。急激に減少することが予想される生産労働人口を補うためには、高齢者の労働の継続や外国人労働力の「輸入」が必要になるだろう（2000 年 3 月、国連は、日本政府に対して、このまま人口の減少が続くなら、毎年 60 万人の外国人労働力を 50 年間に互って継続して「輸入」する必要があると警告している）。そして、それ以上に急がれるのは、女性の社会参画の促進だろう。しかし、男女の賃金格差が縮まらず、女性のみ家事・育児・介護の負担を強いる性別役割分業の仕組みが続く限り、女性の社会参加・職業参加はうまく進行しないだろう。また、女性の妊娠・出産の機能に対する社会的保護が十分に準備されず、逆に、女性の妊娠・出産の機能を口実にした就業や昇進における差別が現状のようなかたちで続く限り、少子化の流れが止まることはないだろう。

また、高齢社会は女性問題が深刻化する社会であるともいわれる。女性は、平均寿命が男性よりも長い。また、現在のジェンダー構造のなかで、介護・介助労働は、しばしば女性によって担われている。つまり、介護・介助するのも女性、されるのも女性という構図がある。

その意味で、急激に進行することが明らかな少子・高齢化に備えるためにも、日本ほどジ

エンダー政策が重要性をもつ社会はない。にもかかわらず、結果的に、21世紀を前にして、男女平等政策においては、足踏み状態が続いているのである。その背景には、性別役割を改革するためでなく、それを維持する方向で社会政策を押し進めてきた日本のジェンダー政策の問題性が控えているのだろう。

他方で、男性主導社会の担い手である男性たちもまた、世代をこえて多くの問題を抱え込み始めていることが明らかになりつつある。若い男性の間には、自立できないマザコン青年の問題や、結婚したくても結婚できない独身男性の増加の問題がある。働き盛りの男性の前には、長時間労働や出世競争のなかでの苦悩がある。その典型的な結果が、年間1万件を越えるともいわれる過労死だ。しかも、最近のリストラの波や雇用形態の流動化は、中高年男性を中心にさまざまなプレッシャーや挫折を生み出そうとしている。ここ数年急激に上昇している中高年の自殺率はその現れだろう。仕事人間から解放されて、「さて老後は妻と2人で旅行でも」などと思っていると、妻から定年離婚を言い出されて泡を食ったり（20年以上連れ添われたご夫婦の離婚は、今や離婚数全体の16~7%にまで上昇しているし、裁判所で離婚調停を行っている夫婦の7割以上は妻から言い出す離婚である）、それを乗り越えても、趣味も友人もない、妻に依存するだけの濡れ落ち葉族や、ひどい言葉だが「産業廃棄物」のような生活が待っているというわけだ。これではたまらない。

さらに、日本社会においても、近年、急速に同性愛者の運動が発展しつつあるし、インターセックスの人々も声を上げ始めようとしている。また、性同一性障害の人々の性転換が人権の問題として本格的に議論されるようになっていこうとしている。その意味で、「クィア・イシュー」を含む、広義のジェンダーの課題は、今後も大きく広がっていくことは間違いないところだろう。

3 ジェンダー・ポリティックスの展開

こうしたジェンダー・イシューに対応して、現在、ジェンダー・ポリティックスの必要性が問われている（進藤 1997）。それなら、ジェンダー・ポリティックスとは何か。簡単にいえば、「ジェンダー問題に敏感な視点にたって、ジェンダー平等を求めるポリティックスの総体」と位置付けることができるだろう。こうした課題に対応する領域は、当面、大きくわけて二つあると考えられる。ひとつは、まさに国際機関・政府や自治体レベルでの政策課題としてのジェンダー・ポリティックス（マクロ・レベルでのジェンダー・ポリティックス）

であり、また、もうひとつは、これと密接にかかわる課題としての、日常的な社会関係のなかのジェンダー・ポリティックス（ミクロ・レベルでのジェンダー・ポリティックス）である。この節では、政策課題としてのジェンダー・ポリティックスについて、主に述べてみたい。

すでに述べたように、1970年代以後、国際社会は、このジェンダー・ポリティックスを、環境問題とともに、20世紀後半登場した新たな重要なアジェンダとして取り組みを強めてきた。

ジェンダー・ポリティックスの浮上の背景には、産業構造・労働形態・労働市場の変容（生産労働中心の社会からサービス・情報を軸にした社会への移行）や、家族形態の変化（核家族・単身所帯の増加を含む家族形態の多様化）、多様な政治的・社会的・文化的なマノリテイへの差別問題の浮上に対応した人権問題への関心（なかでも「今世紀最大の人権問題」としての女性の人権へ注目）といった事情が控えているだろう。

国際社会にけるジェンダー・ポリティックスの深まりは、ジェンダー平等をめぐるいくつかの国際条約を概観するなかでも見えてくる。たとえば、ILO（国際労働機構）の国際条約だけ見ても、次のようなジェンダー平等をめざす動きがうかがわれる。同一価値労働・同一賃金（当初は同一労働への同一賃金として理解されてきたが、最近では、実質的な男女間の格差是正を求めるコンパラティブ・ワースの原則として認識されるようになった）を規定したILO100号条約（1951年採択、1967年日本政府批准）、雇用・職業訓練などにおける性・人種・宗教・思想などによる差別の除去を各国政府の義務としたILO111号条約（1958年採択、日本政府未批准）、育児や介護など家族的責任を有する男女労働者が不利益を被ることなく働き続けられる社会システムの構築をめざすILO156号条約（1981年採択、1995年日本政府批准）、さらに、パート労働者（短時間労働者）とフルタイム労働者の（時間制賃金と、社会保障を含む）均等待遇をうたったILO175号条約（1994年採択、日本政府未批准）などがあげられるだろう。

また、近年、労働における男女間の格差をめぐる議論において、無償労働（unpaid work）が、重要な課題として浮上していることもおさえおく必要があるだろう。ILOの1980年の試算によれば、（有償・無償をあわせた）世界の労働の三分の二は女性の肩に担われていたという。しかし、女性が受け取っていた賃金は世界の総賃金の5%にすぎず、女性の所有する財産は世界の総資産の1%でしかなかった。その背景には、家事・育児・介護や、ボランティアをはじめとする無償の（ないし労働の対価としては低い保証しかされていない）

活動、さらには農業・自営業など、重要な労働に関与しているにもかかわらず、女性の労働が、賃金としての見返りを確保されていない状況がある。また、この結果、さまざまな場面で、経済力をもつ男性優位の構造が再生産されることになる。

この問題の解決のために、まず、無償労働をめぐる正確な調査が必要だといわれる（経済企画庁は、専業主婦の労働について、家事・育児・介護労働の賃金換算の作業を進めている）。その上で、有償化の可能なものは有償化していくことが必要である（農水省は、家族経営協定などの締結の促進により、女性の労働に応じた農業収入の確保を進めはじめている。この方法は、自営業などにおいても今後必要な措置になるだろう。またボランティアなどの労働に応じた有償化の仕組みも問題になるだろう）。さらに、女性の肩に一方向的に担われてきた無償労働のうち、社会化が可能な部分については、それを社会全体で負担するという仕組み作りも問われている（保育所の確保や、介護保険なども、この社会化にあたるだろう）。しかし、これまで女性が担ってきた無償労働のすべてを有償化や社会化することもまた、困難であると同時に、さまざまな問題を生み出すだろう。

たとえば、1980年前後、イタリアでは、「家事労働の賃金化」要求が広がり、実際一部の自治体（ポローニャ市など）では、行政から主婦個人に「賃金」が支払われていた時期もある。しかし、財政負担などから、継続が困難になった（各国に先駆けて主婦の無償労働の見直しを進めてきたイタリアでは、2000年、主婦の家事労働での傷害に対しても、これを労働災害として認知するという法律が制定されている）。それならどうするか。有償化・社会化が困難であると考えられる領域については、男女間の格差を是正するためにも、女性がこれまで担ってきた無償労働の男女の対等な分担が保証されなければならないということになるだろう。

また、現状における格差を是正するための特別措置の実施もまた、ジェンダー・ポリティックスの新たな地平を切り開きつつある。いわゆる「ポジティブ・アクション」である。このことについて、女性差別撤廃条約は、こう書いている。「男女の事実上の平等を促進すること目的とする暫定的な特別措置をとることは、この条約に定義する差別と解してはならない」（第4条）。ヨーロッパ諸国においては、企業や行政機関におけるポジティブ・アクション（たとえば、「ゴール・アンド・タイムテーブル方式」で、男女間格差の実態把握・目標の設定と公示・目標達成のための手段の設定・実施・計画実施年における評価の公表といったプロセスで、実質的なジェンダー平等を推進するなど）を義務づける動きも目立ち始めている。

1993年の国連総会での決議以後、女性に対する暴力の規制もまた、大きな国際的アジェンダとなった。1995年の北京の会議を経て、この動きはますます強まろうとしている。こうした動きのなかで、多くの国々が、ドメスティック・バイオレンス（夫・パートナーからの女性に対する暴力）に対する法的規制に踏み込んでいる。

また、リプロダクティブ・ヘルス・ライツという課題も、1990年代のジェンダー・ポリティックスにおいては、重要な視点として論議が進められてきた。リプロダクティブ・ヘルス／ライツは、しばしば「性と生殖にかかわる健康／権利」と訳される。これまで、妊娠・出産・中絶などの性と生殖にかかわるさまざまな場面で、女性の意志を無視した男性の勝手な判断が横行するケースがあった。その結果、精神的・身体的・経済的・社会的負担は、一方的に女性にかけられることも珍しいことではなかった。こうした状況を転換し、女性が、身体的・精神的・社会的に良好な状態にあり、安全な性生活を営み、子どもをいつ何人産むか、あるいは産まないかは、当事者である女性の自己決定が重視されるべきだという議論が高まってきたのである。

労働権を含む男女両性の人権の尊重、男女両性が仕事と家庭・地域社会での活動を対等に担っていくための基盤としての労働時間の規制、男女ともに多様な選択に開かれた社会の実現、それを支える社会的安全ネットの確保……といった課題が、今、重要なテーマとして国際的に共有されようとしているのである。

さらに、組織の面でもまた放送内容の点においてもまだまだ男性主導であり続けているメディアの改編という課題や、いまだ固定的なジェンダー意識の再生産につながりかねない要素をもっている学校教育や生涯学習の場での、いわゆる「隠れたカリキュラム」の点検と積極的な男女平等教育の推進など、ジェンダー・ポリティックスは、いまや、ほとんどの政策領域における必須の課題として認識されつつある。こうした動きに対応して、いまやジェンダー・ポリティックスのメインストリーム化が叫ばれつつある。

男性をめぐるジェンダー・ポリティックスの動きも少しずつではあるが、拡大しようとしている。性差別の問題を克服するには、男性たちの意識や生活スタイルの改革が前提とされるからだ。そして、そのことは、ジェンダー化された社会のなかで、〈男らしさ〉の鎧を無理やり身につけてきた男性自身の新たな生き方にも結び付くはずだ。すでに、スウェーデンのように、政府部内に男性問題対策の委員会を設置している国もある。また、アメリカ合州国のように、ドメスティック・バイオレンスに対応するため、NPO団体を中心に、男性対象のカウンセリングや非暴力トレーニングなどの動きを強めることも必要になってくるだろう。

さらに、セクシュアル・マイノリティをめぐる諸課題もまた、ジェンダー・ポリティックスの大きな課題になろうとしている。同性愛者に対する差別の撤廃は、同性愛者嫌悪と結び付いてきた男性主導の異性愛者中心の文化や制度の見直しを迫ろうとしているからだ。同性愛者同士の結婚の社会的・法的認知の広がり、それにとまなう養子制度や遺産相続の変革などが、21世紀初頭には大きなテーマになるはずだ。さらに「性同一性障害」の人々のかかえる課題やインターセックスの人々の人権の問題など、ジェンダー・ポリティックスのかかわる領域は、ますます拡大していこう。

ここで、こうした国際社会の動向に対応した、近年の日本社会におけるジェンダー・ポリティックスの主要な動きについても、概観しておこう。1985年の女性差別撤廃条約の批准以後、日本政府もいわゆる「男女共同参画社会」（この用語の登場は90年代に入って以後のものである。また、この曖昧な用語の対外的な表現は、gender equalityときわめて簡明なものになっていることも、ここで指摘しておこう）に向かって、それなりの政策展開を行ってきた。1985年の男女雇用機会均等法の制定、1992年の男女両性がとれる育児休業法の制定（当初は無給で出発）、同年、婦人（のちに女性問題、現在は男女共同参画担当大臣）問題担当大臣設置、1994年には、女性差別撤廃条約に従って、総理府にナショナル・マシナリー（男女共同参画室）が設置され、1995年には、育児休業法一部改正（25%の有給へ）・介護休業法が制度化され、1996年には、男女共同参画2000年プランの制定、さらに、1997年均等法の改正（より強化された）・労働基準法改正（母性保護除く女子保護規定の撤廃）と続き、1999年には、「男女共同参画社会基本法」が制定された。

90年代に入ると、こうした行政レベルでの取り組みに対応する形で、草の根のジェンダー・ポリティックスもそれまで以上に広がりを見せた。こうした行政、草の根双方のジェンダー・ポリティックスの展開は、今や、これまでの日本の行政システムの限界を突き破るような新たな政策課題を提起しつつあるともいえる。たとえば、情報公開・情報提供の促進（政府も含めてジェンダー・ポリティックスの領域においては、市民への情報提供と意見聴取の仕組みがシステム化されつつある）や、NGO・NPO等市民セクターの活動の促進と行政とのパートナーシップ関係の確立（ジェンダー・ポリティックスに関連する草の根のグループと行政機関との交流の促進など）、苦情処理・監視・提言機構としてのオンブード機関設立の萌芽（川崎市、伊丹市などを先駆的事例とし、政府も検討を開始して入る）といった、新たな行政システムの確立と政治システムの構築において、ジェンダー・ポリティックスは、きわめて興味深い展開を示しつつある。

おわりに ジェンダー・ポリティックスへの社会学的介入の可能性

それでは、こうしたジェンダー・ポリティックスの展開を前に、社会学に何ができるのだろうか。筆者身、ここ 10 年程の間、社会学者として、政府や地方自治体のジェンダー・ポリティックスに、さまざまなかたちで関与してきた。その経験もふまえて、最後に、社会学が現在のジェンダー・ポリティックスの展開において、何が可能なのかということについて少し考えてみたい。

社会学からのジェンダー・ポリティックスへの関与というとき、ここでも、すでにふれたように、大きくわけて二つの方向が確認できるのではないか。ひとつは、これまで主に述べてきたマクロ・レベルでの政策課題としてのジェンダー・ポリティックスとのかかわりであり、もうひとつは、これとかかわる課題としてのミクロ・レベルのジェンダー・ポリティックス、すなわち、アイデンティティ・ポリティックスや日常的・具体的な人間関係にかかわるかかわるジェンダー・ポリティックスとのかかわりである。

まず、マクロな政策課題としてのジェンダー・ポリティックスについて述べよう。すでに述べたように、ジェンダー・ポリティックスは、教育・労働・福祉等、ある意味で、キャッチ・オール型の政策領域である。そのため、ここには、経済学、法学、教育学、医学、社会福祉学等、あらゆる政策科学が関与する。また、労働組合・経営団体から地域諸団体まで、多様な諸集団間のキャッチボールを必要とする領域でもある。こうした多様な課題への社会学的介入において、「専門」領域として社会学は、まず、社会関係（家族・地域社会・市民セクター・行政機関・諸団体・諸個人）の学という視点からの介入の方向がありうるだろう。と同時に、専門分野に閉じこもりがちな諸専門領域に対して、全体を見通しつつ、諸学・諸分野・諸集団・諸個人の「媒介」と「調整」の役割を担うのもまた、関係の学としての「社会学」者としての実践にとって重要な領域なのではないか、と個人的には考える。

と同時に、政策課題の推進にあたって、図 1 のように、調査を含む現状認識、政策立案、さらに政策評価のそれぞれの領域において、社会学という視点からの関与は、ジェンダー・ポリティックスの推進において、有効な「介入」の可能性があるだろう。

現状認識の領域において、社会学は、調査の設計・実施・分析という点で、貢献が可能だろう。また、政策立案という点においても、諸領域の調整とともに、社会学独自の視点からの理論的かつ実践的な提言をすることができるだろう。政策実施においても、諸集団間の調整

や広報活動における実践に、社会学的知見は多くの示唆をもたらさうだろう。現在、日本の行政システムにおける重要な課題である、政策の進捗状況・成果の評価システム作りやオムブド設置においても、総合的な視点からの社会学的提言は、大きな役割を果たせるはずだ。

他方で、ミクロ・レベルにおけるジェンダー・ポリティックスにおいても、社会学は、多くの可能性をもっていると思われる。日常世界のなかに構造化されたジェンダーによる支配・被支配関係の分析や、ジェンダーの再生産の構図の解明といったミクロ領域におけるジェンダー・ポリティックスの分析は、たとえば、セクシュアルハラスメントや性暴力における問題解決においても、大きな意味をもつ可能性がある（筆者自身、いくつかのセクシュアルハラスメント裁判で意見書などを書いている）。また、アイデンティティ・ポリティックスの問題や、コミュニケーション課題、さらには、セクシュアリティをめぐる問題についても、社会的な関与がもつ意義は大きいはずだ。

ジェンダー・ポリティックスとのかかわりを考えるとき、社会学は、かなりこの新たな政策課題と強い親和性をもちうるのではないだろうかと感じている。また、ジェンダー・ポリティックスとのかかわりを通じて、日本の社会学の実践的な政策との出会いも深まる可能性があるのではないだろうか。

参考文献

青木やよい 1986 『フェミニズムとエコロジー』、新評論。

P. ブルデュー 1990 『実践感覚 2』(今村仁ほか訳)、みすず書房。

J. バトラー 1999 『ジェンダー・トラブル』(竹村和子訳)、青土社。

Connell, R.W. 1995 *Masculinities, Polity*.

R. コンネル 1993 『ジェンダーと権力』(森重雄他訳)、三交社。

S. フェミアノー 1992 「男性学の起源とカリキュラムへの示唆」『日米女性ジャーナル』、11号。

伊藤公雄、1993 『〈男らしさ〉のゆくえ——男性文化の文化社会学』新曜社

——— 1996 『男性学入門』、作品社。

I. イリイチ 1983 「ヴァナキュラーなジェンダー」(丸山勝訳)、山本哲士編『経済セックス

とジェンダー』、新評論。

———— 1982 『シャドウ・ワーク』(栗原彬他訳)、岩波書店。

J. クリステヴァ 1981 『中国の女たち』(丸山静ほか訳)、せりか書房

T. ラカー 1998 『セックスの発明』(高井宏子・細谷等訳)、工作舎。

S.E. ラセット 1994 『女性を捏造した男立ち』(上野直子・富山太佳夫訳)、工作舎。

J.W. スコット 1992 『ジェンダーと歴史学』(荻野美穂訳)、平凡社。

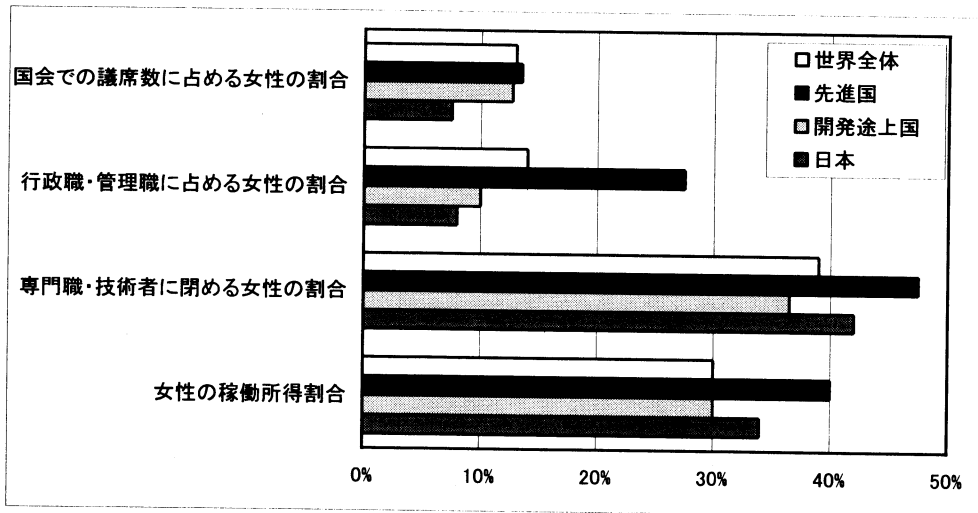
進藤久美子 1997 『ジェンダー・ポリティックス』、新評論

表1 GEMの国際比較

| GEM順位 | 国名 | GEM値 |
|-------|------------|-------|
| 1 | スウェーデン | 0.790 |
| 2 | ノルウェー | 0.790 |
| 3 | デンマーク | 0.739 |
| 4 | ニュージーランド | 0.725 |
| 5 | フィンランド | 0.725 |
| 6 | アイスランド | 0.723 |
| 7 | カナダ | 0.720 |
| 8 | ドイツ | 0.694 |
| 9 | オランダ | 0.689 |
| 10 | オーストリア | 0.686 |
| 11 | アメリカ | 0.675 |
| 12 | オーストラリア | 0.664 |
| 13 | スイス | 0.654 |
| 14 | ルクセンブルク | 0.649 |
| 15 | バハマ | 0.649 |
| 16 | スペイン | 0.617 |
| 17 | トリニダード・トバゴ | 0.608 |
| 18 | バルバドス | 0.607 |
| 19 | ベルギー | 0.600 |
| 20 | イギリス | 0.593 |
| 21 | アイルランド | 0.554 |
| 22 | ポルトガル | 0.547 |
| 23 | 南アフリカ | 0.531 |
| 24 | チェコ | 0.527 |
| 25 | キューバ | 0.523 |
| 26 | イタリア | 0.521 |
| 27 | スロバキア | 0.516 |
| 28 | コスタリカ | 0.503 |
| 29 | ポーランド | 0.494 |
| 30 | ハンガリー | 0.491 |
| 31 | フランス | 0.489 |
| 32 | イスラエル | 0.484 |
| 33 | 中国 | 0.483 |
| 34 | エルサルバドル | 0.480 |
| 35 | グアテマラ | 0.479 |
| 36 | スロベニア | 0.475 |
| 37 | メキシコ | 0.474 |
| 38 | 日本 | 0.472 |
| 39 | ガイアナ | 0.472 |
| 40 | ベリーズ | 0.471 |
| 41 | コロンビア | 0.470 |
| 42 | シンガポール | 0.467 |
| 43 | ブルガリア | 0.462 |
| 44 | パナマ | 0.460 |
| 45 | マレーシア | 0.458 |
| 46 | フィリピン | 0.458 |
| 47 | エストニア | 0.458 |
| 48 | ボツワナ | 0.457 |
| 49 | モーリシャス | 0.451 |
| 50 | レソト | 0.451 |

資料出所：UNDP（国連開発計画）

表2 GEMの構造要素の国際比較



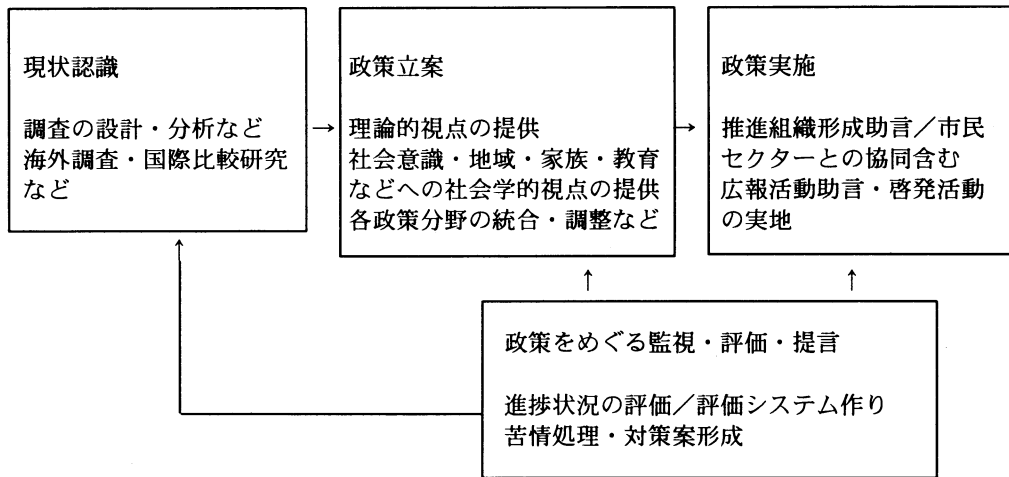
資料：UNDP (国連開発計画)「人間開発報告書 1997」

表3 「女性の働きやすさ」指標国際比較 (1995年)

| 順位 | 国名 | 指標値 | 80年順位 |
|----|----------|-------|-------|
| 1 | スウェーデン | 61.81 | 1 |
| 2 | ノルウェー | 57.89 | 4 |
| 3 | フィンランド | 56.19 | 6 |
| 4 | アメリカ | 55.30 | 2 |
| 5 | オーストラリア | 54.72 | 7 |
| 6 | カナダ | 54.34 | 5 |
| 7 | ポルトガル | 53.50 | 15 |
| 8 | フランス | 51.99 | 10 |
| 9 | イギリス | 51.92 | 8 |
| 10 | ニュージーランド | 51.14 | 9 |
| 11 | デンマーク | 49.84 | 3 |
| 12 | ドイツ | 49.42 | 11 |
| 13 | オーストリア | 47.97 | 12 |
| 14 | スイス | 46.79 | 14 |
| 15 | ベルギー | 46.69 | 22 |
| 16 | アイルランド | 46.32 | 20 |
| 17 | オランダ | 45.60 | 19 |
| 18 | メキシコ | 45.45 | 21 |
| 19 | 日本 | 44.05 | 16 |
| 20 | 韓国 | 43.43 | 17 |
| 21 | イタリア | 42.99 | 13 |
| 22 | ギリシア | 42.01 | 18 |
| 23 | スペイン | 40.65 | 23 |

注：女性の働きやすさ指標とは、就業、男女機会均等、家事分担、育児、家事に関する指標の平均値をいう。資料：経済企画庁「新国民生活指標」(平成10年)

図1 ジェンダー・ポリティックスと社会学的介入／行政組織との関連で



環境からみた社会学の応用可能性

鳥越皓之（筑波大学）

1 新しい思想の萌芽

環境社会学の役割： 自然環境や歴史（文化）環境を対象とする社会学を環境社会学と名づければ、この環境社会学は、環境問題や地域の環境計画に対して、それなりの大切な役割を担ってきた。そしてその役割は今後いっそう強まらるだろうと予想される。もちろん環境社会学といっても社会学内部のひとつの分野にすぎないから、環境社会学は社会学の他の分野からの理論や記述された事実から多くを学びつづけている。

この記念総合シンポジウムは、社会学の蓄積してきた知的資産を大切にしながら、21世紀に向かってどのような可能性があるのかを考える集まりであると理解している。とりわけ、社会科学の20世紀の総括というとき「近代化」というものがひとつの重要な課題かと思われるので、その点に留意しながら論を進めていくことにしたい。

この近代化をのりこえていくあたらしい思想の萌芽が環境社会学やその周辺でも観察される。その論理をあえて、キーワード的に表現すれば、「ローカリティ論」「人民（住民）論」「規範論（政策論、べき論）」ではないかと考えている。そしてこれら3つの総和が結果的に近代化論を乗り越える萌芽的思想を内包しているのではないかと私は思っている。

それぞれの3つについて簡単な説明をしたのち、これら3つとかかわる具体例として都市の「自然公園」と、農村の景観も残す町の「総合計画」を採り上げて理解を深めることにしたい。

ローカリティ論： 「ローカリティ論」とは、中央に比して地域や地元を大切にする近年の考え方のことである。マスコミにしばしば登場し、行政改革として現在、実際におこなわれつつあるいわゆる「地方分権論」などを想起してもらえば理解しやすいであろう。だが、この「ローカリティ論」はそのような実態的傾向だけでなく、すぐ後で述べるように、それを分析するわれわれ科学者の科学論にも影響を与えつつあるところに注目すべきであろう。

顧みれば、日本の近代130年の間に、地方・地域を大切とみなしたり、地方改良をめざした政策が全くないわけではなかった。けれども、それは中央政府の強力なリーダーシ

ップの存在を前提としたものであったといつてよい。

ところが第二次大戦後になると、それとは質的に異なつた考え方が態勢をしめるようになる。市民社会論や民主主義思想が影響力のある形で入つてきて、市民の自立（自律）を大切なものとみなす規範が社会科学の論考のなかにも、また行政施策のなかにも見られるようになってきた。この傾向は現在でも強く存在する。この市民の自立を大切にする考え方は、おのずと市民の自立の基盤である地方や地域・地元といわれるもの（すなわちローカル）を大切にする考え方を醸成することになった。

その後、1970年ぐらい、いわゆる戦後は終わったといわれる頃から、この市民社会論と大きく異なつた系譜として、地方・地域・地元の大切さを改めて指摘する考え方がでてきた。それは「地域主義」とよばれることになった（玉野井〔1977〕、杉岡・増田〔1977〕）。それは地域を単位として全体社会を再組織化をめざすことであり、論者によってアイデアに若干の差があるが、具体的にはたとえば玉野井は「地域共同体」の構築を提唱している。この地域主義は産業の優位を排し、地域の論理で産業を制御しようという考え方であり、産業の否定ではない⁽¹⁾。

この地域主義は、たしかに市民社会論や民主主義思想を下敷きにしていたかもしれないが、論理的に全く異なつている。それは、市民社会論などは一人ひとりの人間に視点を定めているのに対し、地域主義は地域というか、コミュニティというか、ある特定地域空間の社会システムの大切さを強調している点に特色がある。この延長線上に現在、地方自治体の施策として、コミュニティを機軸に地域計画をたてる考え方が形をなしてきた。

このような傾向の反映とみなしてよいだろう、現場を研究する社会学者のなかからローカリティを強調する説得的な理論が生まれはじめてきた。先にあげた地域主義は経済学者を中心にして形成された理論であるが、社会学者を中心にして形成された理論としては、鶴見和子などによる内発的発展論がそうである（鶴見・川田〔1989〕、鶴見〔1996〕）。環境社会学の分野で私どもが主唱している生活環境主義もこれらの傾向のなかにあるものといえる。

しかしながら、これらはいわば政策論レベルの社会科学のパラダイムであるのにたいし、内山節や鬼頭秀一などが言い始めたローカリティ論は、科学論そのものに影響を与える考え方である。内山はつぎのようにいつている。「思想が根源的にもつているローカル性を再評価すること、それはローカルであるがゆえに低く評価するのではなく、ローカルがゆえに深い思想としてとらえることである。このような視点にたてば、必然的に、これまで普

遍思想のように語られてきた欧米から生まれた近代・現代思想は、欧米的自然、歴史、社会風土からつくられた欧米ローカルの思想として、とらえなおすことができる。ところがその思想が、世界の普遍思想として拡がっていった結果、世界各地の風土や自然、歴史、さらに述べれば自然・人間関係や人間・人間関係との間に軋轢をもたらし、同時にその思想も、欧米ローカルの思想のなかにあった探さを失って、軽薄な思想へと転じていったのではなかったかと私たちは考えていたのである」(内山：1998,p17)。

またいう。この考え方は「文化相対主義とは異なる。文化相対主義は欧米的文化の絶対性を否定するという点では大きな前進をもたらしたが、世界には非欧米的なさまざまな文化が存在すること、それらの文化は、かつて人間たちがとらわれていた文化の歴史発展段階というような考え方とは無関係に平等であること、したがってすべての文化は相対的なものであることの確認に終っていた。ところが私たちの視点は、自分たちの文化や各地域の文化の相対性を確認することにあるのではなく、その絶対性をみつけることのほうにあったのである。それはローカルな思想の探さをとらえることでもあり、風土の違いとともに地域には絶対的な暮らしの文化が成立しうることを認めることでもあった。だからこそ、それを主体にした社会の分解を視野に収めていたのである。したがって私たちは、欧米中心の世界からアジア中心の世界へとといった考え方に同調するものでもなかった。このような考え方は、思想に中心があり、世界に中心があると考えた欧米中心主義思想を何ら解体することなく、中心点を欧米からアジアに変えただけであって、悪しき普遍思想の考えそのものである」(内山：1998,p19)。

この考え方は、内発的發展論にも、生活環境主義にも内包されているものではあったが、これらはここで引用した内山ほどには明瞭にこの点を指摘していたわけではなかった。内山は思想という言い方をしているが、このローカリテイ論は科学の普遍理論(グランド・セオリー)の価値よりも、ローカルな理論の価値を評価する考え方と結びついてくる。つまり、普遍理論よりもローカル理論を優先する考え方である。これをローカリテイ論といっておけば、環境政策はつねに個別性と向き合わねばならないので、それを社会学的に分析するときに、ローカリテイ論はかなり有効性の高い科学論である。

人民(住民)論： 地方自治体などによる具体的な地域政策を実行するとき、市民社会論は「自立した市民」というものを理念型として設定し、そのうえで施策をたてるのが望ましいという考えであった。しかしながら、このような施策を立てる場に居合わせる機会があった者なら誰も気がつくように、そこでの討議はしばしば、まだ民主主義が十分浸透

してなくて、わが市（町、村）では、欧米でみられるところの「市民」がまだまだ育っていないという不平で終始することが少なくなかった。そのような不平を言いつづけながら、第二次大戦後からみても、ほぼ半世紀が過ぎてしまったのである。

しかしながら、フランス革命とイギリス革命を経験し、封建制が払拭されて市民社会が成立したという単純な理解で西ヨーロッパを理想化するとイギリスを訪問して、現在も“封建的”貴族が広大な土地と屋敷をもっている事実面に食らってしまうだろうし（佐伯、1997, p74-79）、どこからみても“民主的”でないオジさんがソロソロいて面食らってしまうだろう。そのようなことを最近の研究や最近の情報が教えてくれるようになった。もっとも、自立とか自律、また民主的などという概念は程度をあらわすにすぎないから、人によれば、西ヨーロッパにおいては、自立度の高い市民層が存在すると反論する者もいるかもしれない。

ところで、その意見に賛同するかどうかは別にして、私は「市民的公共性」を研究したハーバマスがその必要上から市民と人民とを論じていて、それがいまここで論じている事柄を整理するときには有効であると思っている。すなわち、ハーバマスはヨーロッパにおける固有の歴史のなかから市民的公共性という類型を分析することを研究課題として『公共性の構造転換』という書物を著した。

その書物でハーバマスは市民と人民とを区別した表現をしている。その区別とはつぎのようなことである。市民とは、ひとつは商品交換をする契約から歴史的に登場してくるブルジョアジーという契約人格と、もうひとつは、サロンを形成し、そのサロンで理想的な建前論を形成した都市の教養人たちである市民階級とのこのふたつの歴史的カテゴリーの合体物である⁽²⁾。それに対し、別の多数を占める農民や下層民などの人民がいるという言葉で区別している。ただし、ハーバマスは人民については分析をまったくしていない。その理由も明白で、自分は歴史的に順次ヘゲモニーをもちはじめた市民を分析の対象にするからであると言明している。

ただこの書物の「序言」でハーバマスはいう。「ひとつの留保を書きそえておきたい。われわれの研究範囲は、市民的公共性の自由主義的モデルの構造と機能、その成立と変貌に限られている。したがってそれは、主流となった歴史的形態の特徴を対象とするものであって、その歴史的過程の中でいわば抑圧されてしまった人民的公共性という変型を度外視することになる」。ただ度外視するということは、この書物で対象にしないということであって、人民的公共性の研究は「別個の研究を必要とする」という立場である（ハーバマ

ス、1962,訳書 1973,p1-3)。

ハーバマスにとっては、人民は「主流となった歴史的形態」ではないから、そしてそれは「抑圧されてしまった……変型」であるから、軽視するわけではないが自分の分析から外したのである。ハーバマスがこの書物を上梓したのは1961年であるが、それからおよそ30年後、かれはこの書物の新版を出すにあたって「1990年新版への序言」という長い序言を執筆した。その序言でふたたびハーバマスはふたたび人民（的公共圏）を採り上げて30年前とは少しばかり違ったニュアンスの記述をしている。

すなわち、「フランス革命のジャコバン主義段階やチャーティスト運動にかんして、私は『人民的』公共圏〔公共圏は公共性とほぼ同義⁽³⁾——鳥越注〕の萌芽について述べていたが、これを歴史の経過のなかで抑圧された市民的公共圏の一変種として重視しないでいてもかまわないと思っていた。しかし、E・トンプソンの画期的な著作『イギリス労働者階級の形成』の出現に引き続いて、フランスおよびイギリスのジャコバン主義者、ロバート・オーウエンと初期社会主義者たちの実践、チャーティスト運動の活動家、さらに一九世紀前半のフランスにおける左翼人民主義者にかんする多くの研究が公にされているが、これらは地方の下層階級や都市の労働者層の政治的動員という事態を従来の見方とは異なるパースペクティヴへずらして見ているのである。ギュンター・ロッテスは、私の公共圏の概念と真っ向から対決しながら、ロンドンのジャコバン主義者を例として、一八世紀後半のイギリスの急進主義者の理論と実践を研究した。彼は、急進的な知識人の影響や近代的なコミュニケーションの諸条件のもとで、独特の組織の仕方や慣行をもつ新しい政治文化が伝統的な民衆文化のなかからどのように発展してきたかを示している。『それゆえ人民的公共圏の成立は、小市民層および下級市民層の生活連関の歴史的発展におけるある固有の段階を示すものである。それは一方で、市民的公共圏をみずからの範とする以上、市民的公共圏の一変種である。他方でそれは、市民的公共圏がもつ解放のポテンシャルを新しい社会的文脈のなかで展開するものであるという点で、市民的公共圏をしのいでいる。人民的公共圏とは、いわばその社会的諸前提が止揚された市民的公共圏なのである』〔ロッテスからの引用——鳥越注〕。文化的にも政治的にも動員されはじめた下層民を排除することによって、生成しつつある公共圏ははやくも多元化されることになる。人民的公共圏は、ヘゲモニーをとっている公共圏と並んで、またそれに制約されながら、形成されるのである」（ハーバマス、新版、1994,p5-6）。

微妙なニュアンスの違いなので、原文を長く引用したが、要は30年前とは基本的に考

えは異ならないが、ハーバマスは自分の心変わりとして「人民」研究の重要性が増したことを自覚したという表現である⁽⁴⁾。

このハーバマスが原文のドイツ語で「人民的」というとき plebejischen という平民、庶民、下層民を意味する用語を使っているが (Habermas,1965,p8)、「人民」とは、うまく適合する訳語を使ってもらえたもので、日本においても田中正造や南方熊楠などの明治の環境運動者は「人民」という用語を使っている⁽⁵⁾。たとえば「(渡良瀬川) 沿岸人民ノ栄養ヲ奪ヒ」というような用例である。この用語は民俗学の「常民」、歴史学の「庶民」に近いことばで、“教養ある”都市住民やブルジョアジーンなどを出自とする「市民」とは意味が異なる。この人民は現在のことばでいえば、住民に意味は近い。この「人民(住民)」を機軸にして政策論をたてなければ、有効性をもたないというのが人民論である⁽⁶⁾。つまり、市民論を否定するわけではないが、現在の日本においては人民論はきわめて大切であるという考えである。なお、繰り返しいっておけば、「市民」とは市民社会論的理想像であり⁽⁷⁾、「人民(住民)」とは現実に生活している大多数の人たちそのもののことである。

規範論(政策論、べき論)： ここにおける規範論は社会学理論における3つの分類、たとえば一般理論、歴史理論、規範理論の規範理論に対応しているものである⁽⁸⁾。経済学では、理論、歴史、政策と分けることもあるが、規範論はその政策に対応している。ある課題や問題をどのようなものとするのが望ましいか、あるいはするべきか、ということを規範論は分析をする。それはある対象の深刻な問題を解決したり、ある対象の福利を増進させようとする。したがって、規範論は一般法則を模索しているのではなくて、あるべき姿を模索している。計画や政策とはそのようなものである。したがって、どのようなプログラムを作成するかということが規範論の具体的課題となる。

ところで、従来のおりに、ふつうに科学的方法(客観的方法)で分析しておればよいものを、あえて規範論という表現をするのはどのような積極的な意味があるのだろうか。じつは「ローカリテイ論」や「人民論」を現場で押し進めていけば、必然的に「規範論」にならざるを得ないのであるのだが、それよりもっと積極的な意味がある。

それには二つの側面がある。ひとつは政策的分析を押し進めていく自分たち自身のモデルにすでに、いかにあるべきかという表現者の主観、つまり「べき論」が入っていることに自覚的になること。たとえば私は生活環境主義というモデルを自分のしばしば使用する有効なモデルと位置づけているが、これは「主義」とうたっているように特定の価値観がそこに入っていることを前提としている⁽⁹⁾。

もうひとつは、通常、一般理論をめざしていると思われる研究も、自覚的、無自覚的であるかは別にして、そこに研究者の規範が色濃く存在している事実を指摘することも規範論の積極的役割である。たとえば、生態学は現実にその知恵を借りようとするときには、規範論として機能しているというような事実を指摘することが大切である。生態学は客観的な装いをもっているが、生態学者は政策レベルでは、生物圏の安定状態を望ましいと判断する価値観をつねに内包している。それは生態学の論理の体系から必然的に出てくるものである。もっとも安定している極相（climax）——これは人が手を加えない原生的自然状態で実現する——をもっとものぞましいとみなし、それが現実的に不可能な場合はそれよりもやや落ちるが安定度のあるものを望ましいとみなす傾向がきわめて強い。やや落ちるが安定度のあるものというのは、たとえば、ため池や棚田があるとすると、その村ではこのため池や棚田を保全することで当該地域の生態系が安定するので、そのまま残すべきだという主張である。

もちろんこのような生態学者の考えを非難することがこの規範論の目的ではない。そこに科学の名の下に強く価値観が入っている事実を指摘することが大切なのである。当然、生活環境主義からは、その村において減反政策が進められて、農民は収穫量の多い田んぼの生産をストップさせられつつあるのに、景観がよいという理由で収穫量がきわめて悪く、労力がたいへん必要とされる棚田の保全が本当に必要かという問いが出されるかも知れない。規範論はこのような水準の討議を扱うのである。

ここに3つのキーワードの説明をしたが、これらのキーワードに代表されるあたらしい動きが具体的にどのようなになっているのかを、つぎの二つの事例の紹介で示すことにしよう。

2 住民による計画参加

行政との連携： 現在、地域社会で行われつつある計画の多くは地方自治体との連携のもとで行われている。それは市町村などの基礎的自治体の住民観の変化と多分に関係がある。ある地域計画を立てるにあたって、いわば“消費者”である住民の意向を十分に配慮しないでは、“商売”が成り立たないと実感した基礎的自治体が多くなり、住民との連携の模索をはじめたところが多くなったのが自治体側の変容である。

他方の住民側の変容としては、かつての住民運動やコミュニティづくりにおいては必ず

しも自治体との連携を必要としなくてよかったが——そしてしばしば敵対もしたが——80年代から目立つようになりはじめた「まちづくり」(地域づくり)となると、その計画のなかにハードの側面が入ってくるが多くなったので、なんらかの程度、自治体との連携を必要としてきたのである。

したがって、行政と連携している住民組織は行政依存的で住民の自立度が低く、行政となんらの関係をもっていない住民組織は住民の自立度が高いという判断は、かなり単純であるとともに、時代遅れの考え方になりつつある。もっともそれが単純にあてはまるケースを否定するものではないが。

この点については、つぎのような例を出すと分かりやすいであろう。ある中年の男性の人たちが、自分たちの住んでいる地域の川の清掃をはじめた。それはある男性が川の欄干から川の中をなんとなく見ていて、橋桁にひっかかったゴミや、岸辺に打ち上げられているゴミの多さと汚さに驚いた。そして、自分のふるさとの町がこんな状態では恥ずかしいと感じて仲間を集め、川をきれいにする会を結成した。この会がこの川の清掃という段階に止まっていたならば、これは行政との連帯をまったく必要としないで“住民が自立”して活動ができる。そして実際そうしてきた。しかしながら、この会が「川をきれいにする」ということをゴミをなくすという段階で満足しないで、もし「川をきれいにする」根源は「川の水をきれいにする」ということだ、と判断したならば、これは行政との連携なしでは通常はかなり実現がむずかしい。下水、排水の問題が絡んでくるからである。そしてこの会が行政と連携して「川の水をきれいにする」活動を新しくはじめたとしたら、この会は住民の自立度が低くなったとってよいのだろうか。私はそうは思わない。なぜならば、この会は必要があって行政と連携をしているのであって、いささかも自立性を侵害されているわけではないからである。

このような一般論を冒頭に指摘したうえで、地方自治体と住民の計画参加をこのような課題の分かりやすい例としてとりあげよう。二つの異なった事例を紹介する。

住民の手になる自然公園： 密集した住宅地のなかに、宅地4戸分ほど(707平米)の広さの小径のついた森のような自然がある。これが東京都武蔵野市にある「木の花小路公園」である。この公園は、コナラ、クヌギ、カシワなどの大木が枝をひろげ、足下にはさまざま山野草がしげっている。さらに地下百メートルから汲み上げた水がホテルのいるせせらぎとして流れているのが目につく。よく見ると、メダカだろうか、小さな魚が泳いでいる。

ふつう都市の小公園というと、ブランコ、滑り台、砂場という俗に三点セットとよばれる設備と、決まり切った植栽がある公園であって、日本中どこを歩いてもさほど変わらない。それは金太郎飴のようなもので、都市公園法施行令では「児童公園」とよばれているものである。ところが、最近では個性のある公園が登場しはじめた。それはローカリテイへの傾斜のひとつの現れであるが、その経緯を述べておこう。

政府は1993年6月30日の「政令235号」で都市公園法施行令の一部を改正した。そのポイントは、先にあげた3点セットを「設けるものとする」と規定していた第7条が削除されたのである。そして、「もっぱら児童の利用」に供することを目的としていたのが「街区内に居住する者」の利用ということで、「児童」から「住民」に対象がシフトしたのである。その結果、小公園の利用主体である「住民」がにわかに主役となった。児童には公園の計画力はないだろうから機械的に対応できたかもしれないが、あたらしく主役となったこの住民の意見を聞かないで公園を計画することは、行政としても、やや据わりが悪い印象をもつことになった。全ての自治体ではないけれども、そのような印象を強くもった自治体は、住民が自分たちで計画をたて、それを実行していくことを積極的に支援する姿勢を示すことになる。

これがひとつの法的な流れであるが、もうひとつはしばしば指摘されているように、住民参加の考え方が1970年代前後から日本の各市町村で見られるようになってきたことがあげられる。木の花小路公園もこのようなふたつの変化の流れのなかにある。

武蔵野市そのものも、すでに1970年頃から「緑の基本計画」ということで、市民の生活のなかに自然を生かすことを進めてきた経験をもっていた。そしてその基本姿勢として、市民と市役所との共同で緑づくりをしようたい、1971年に「緑化市民委員会」を設置している。これは住民参加の考え方という全国的な流れと時代的にきれいに一致している。

武蔵野市の緑化政策として、民有地の買収を考えていたところ、相続でその土地を手放す人がおり、その人が処分方法に迷っていたときに、市が「自然公園」にしたいと打診したら、それなら地域の人にも喜ばれると判断して売却したという。

この公園の建設は従来の行政主体の計画、設計、建設、管理というプロセスを捨て、当初から住民を主体としたワークショップ方式によって、①公園イメージの検討と②完成後の管理・運営のあり方を検討する、という手法を選んでいる。具体的には、市民がイメージの絵を描き、それに基づいて専門家が設計図を引くという手続きをふんだ。絵と設計図

を見比べてみるとほとんど絵のアイデアが生かされている。地元住民の方の表現のとおり
にいうと、基本的には「公園は誰のものか」という問いかけをし、そのもとに、利用者が
少なく、たんなる空き地にしかすぎない既存の公園に対する批判のうえに、「里山を再現し
癒しの空間をつくろう」としたという。すなわちそれは、かくあるべき姿というものを明
瞭に示しての絵づくりであったという。

管理・運営については、住民が「生きものばんざいクラブ」を結成した。このクラブは
学生から85歳の高齢者まで約50人で、「鈴虫の音を愛でる夕べ」などのイベントをおこ
なうとともに、公園の維持管理を社会貢献と位置づけ、毎朝に清掃もおこなっている。

現実には、近所から落ち葉が舞い込むというような苦情もないわけではない。しかし、市
の管理ではなく住民の管理ということが、解決にあたり、落ち葉のある広葉樹を伐って植
栽を変えろという安易な選択ではなく、どんな生活空間をわれわれ住民が望んでいるのか
を相互に話し合う機会をつくっているともいえる⁽¹⁰⁾。

総合計画づくり： 住民が自分自身で地区計画をたて、それを行政と専門家やコンサルタ
ントがサジェスチョンをし、できあがった住民の地区計画と行政計画とのすりあわせを最
終的におこなうというパターンが先進地域ではみられるようになってきた。これよりもい
っそう思い切っているのが、行政計画の中心ともいえる市町村の総合計画そのものに、形
式ではなく本格的に住民の参加を考えようとするのである。そのような試みは山形県や
熊本県などいくつかの町でみられるようになってきた。そのうち、今回とりあげる兵庫県
矢野町は、その作成にあたっての悩みや試行錯誤を記録として止めてくれているので、う
まくいった側面だけではなく、その悩みや試行錯誤を紹介することをつうじて、住民が主
体性を獲得していく状況を考えることにしたい。なお、悩みなどをとりあげることと内部
資料を使うので、迷惑ではないと思うものの、念のために町名は仮名にした。

矢野町では1996年に町の総合計画の策定期間にあっていた。そこで今回は文字ど
おりの住民参加の総合計画づくりをおこなうことを町としては考えた。まず、住民と役場
職員とが一緒になって総合計画を実現していくために「地域づくり矢野塾」を発足させる。
そしてそれが作成したのちも、それを確実に実行していくためにこの組織は現在も活動を
している。その構成は住民からなる「まちづくり委員」38人、役場の職員からなる「地
域担当職員」41人である。

役場の担当職員の意見としてつぎのようなものがある。「『住民参加のまちづくりはほん
とに大変ですよ。動きだしたら自転車操業ですからやめられませんか。やめるんだったら

今ですよ』と視察に来られた行政マンには必ずこのように言うことにしている。相手はげんそうな表情を見せるが、本当のことなのである。すると、同席している同僚のTくんが『大変なのは行政であって、住民の人は楽しんでいるんですよ。ほんとに住民参加と言わずに行政参加が必要なのではないのでしょうか』とおもむろに切り出す。そして、もう一人の同僚、Kくんが『矢野塾でいろんな住民の方と知り合えることができ、大きな財産となりました』と話し出す。

ここでは、総合計画のやり方としては、ワークショップ方式をとり入れた。これは武蔵野市の自然公園の例と同じである。行政職員としては「今までの会議手法と違いとまどいもあった。そんなとまどいを払拭したのが、民間企業から就任したK助役の一言である。

『ワークショップは行政には馴染みはないかもしれないが、民間ではよくやっているの、住民の方がよく知っているのでは』と……。この一言で、行政内部の中でもワークショップがその地位を確保したと言える。ワークショップは参加者が対等な立場で、創造的に問題を考えていき、しかも参加者一人ひとりのアイデアを引き出し、合意形成を図りながら一定の成果をみんなで共有出来る。これだけの多くの意見を住民にも納得できるようにまとめるにはワークショップ以外にないとの思いで、地域委員会の8地域を3つのブロックに分け、アドバイザーのIさん、Oさんとも連絡を取りながら会議プログラムを検討し、ワークショップによるブロック会議を開健した。会議は大成功に終わり、後日、参加された住民から何通かの手紙が寄せられ、『今までにない会議で感動した』と書かれていた。ワークショップにおいては、ここでは、ポストイットなどの紙片にメンバーの考えや思いつきで発言したものを書き連ねていって、論理の束（紙片の束でもある）を形成していく方法である。ワークショップでの発言というものは、思いつきが奨励され（そのうちのかなりの部分は感性的・非論理的であるが、それも奨励される）、みんなが「うなずける発想」が採用されていくことになる。このような活動はすでに5年つづいている。

ただ作業の過程で出てきた意見のうち代表的なものは以下のようなものがある。

〔住民であるまちづくり委員のとまどい〕

☆自分たちの立場はまちづくりの中でどのような立場なのか。☆自分たちの意見をどこまで取り入れてくれるのか。☆「地域づくり矢野塾」にどこまでまかせてくれるのか。

☆もっと、情報を公開してほしい。

〔行政のとまどい〕

☆通常の仕事のほかに仕事量が増える。☆まちづくり委員の意見のとりまとめが難しい。

☆担当の施策どこから手を付けていけばよいのか分からない。☆担当職員にばかりが表に立って、幹部職員の顔が見えない。☆既に進行している事業と地域づくり矢野塾とする作業のとの調整が難しい。☆進行している事業内容をどこまで住民に知らせるべきか、知らせぬべきかの判断が難しい。☆住民の意見を聞きすぎると、抜き差しならないようにならないか。☆議会との調整が難しくなる。議会と地域づくり矢野塾とをどちらを優先させるのか。☆住民の声を聞くと仕事がしにくくなる。ややこしくなる。

これらの悩みをかかえつつも、固有の景観をもった町並みづくり、清流の保全、ホテルの養殖、魅力地図づくり、あいさつ運動など多様な分野で成果をおさめている。これらは住民が地域づくりに参加しただけではなく、行政の姿勢そのものを変えていく力となっているところを注目すべきであろう。武蔵野市の例はひとつの公園が対象であったが、この例では、町全体が対象であり、それを行政と協力しつつ、結果的には行政の側が行政変革を自覚するほどの力を、この人口5千人で準過疎地帯の住民がおこなっているのだ。このことは注目してよいだろう⁽¹¹⁾。

3 プログラムをもった社会システム

さまざまな現在の動向のうち、「住民参加」の事例で示したが、これらの事例をみてもあきらかなように、先にキーワード的にあげた3つの論、すなわち「ローカリテイ」「人民(住民)」「規範」が個別に作動しているのではなくて、総体として動いている。それをやや分析的に表現すれば、地域の社会システム(地域システム)のなかに住民を中心にしたプログラムを作動しつづける核(組織)が存在するようになる。そして、それが特定の「あるべき姿」(通常はローカリテイの強調)の方向に沿う形でプログラムを策定することを任務とするのである⁽¹²⁾。

このような活動の対極にあるのが、政府がおこなっているダムや河口堰やスーパー林道の建設などの公共事業であろう。公共事業そのものは、必要なものも当然含まれているが、公共事業においては、プログラムの策定のプロセスがまったく異なる。将来において、ここで述べた3つの論を機軸に据えたうえでの、プログラムを内包した社会システムの重要性がいっそう強まると想定されるし、またそうでないと環境問題の根本的解決への道は遠のいてしまうだろう⁽¹³⁾。

《注》

- (1)地域主義についてのごく簡単な研究史と論点については鳥越(1983,p180-186)で整理して述べている。
- (2)ハーバマスのこの辺りのことについての全体的な要約は鳥越(1998,p75-77)を参照していただくこととして、ここでは詳しく述べない。
- (3)「ほぼ同義」というのは、この論考においてはそれほど神経質に区別する必要がないという意味だが、日本語訳での公共性と公共圏との差異については花田達朗が詳しく論じている(花田:1996,p23-26)。
- (4)じつはハーバマス「市民的公共性」の変型としてふたつあり、ひとつは18世紀の遺産としての「人民的公共性」であり、もうひとつは「工業社会として高度に発展した独裁制下の統制された公共性」という時代的に比較的最近の人気投票の公共性としている。このように区分することも下位区分として意味があることは確かであるが、本稿ではそれを区分せずに「人民(住民)」という用語を使っている。
- (5)この明治期の田中正造や南方熊楠からはじまる人民論の系譜については鳥越(1999)でふれている。
- (6)ハーバマスはたいへん注意深く、自分の分析を歴史上の個性をもった西ヨーロッパの市民の分析であるという表現をしているので、ハーバマスやロッセスに対する反論ではないが、少なくとも日本においては、人民的公共性(圏)は「市民的公共圏をみずからの範と」してきたとは私は思わないので、市民的公共性(圏)の1変種とは判断しない。人民的公共性は独自の史的発展をしてきたと思っている。
- (7)理想としての「市民」像が、1960年の安保のころには、市民運動のなかでかなりリアリティのあるものとして姿を現したこともあった。筑紫哲也は市民運動家であった久野収の追悼の座談でつぎのようにいっている「戦後ずっと市民が育たなかったのはありません。小林(小林トミ〔声なき声の会代表〕)さんの話では、ある一瞬、なにも団体に属していない人が300人集まった。その300人は市民だったと思うんです。ところがその後、そういう部分はある部分で育ったが、どんどん去勢された民衆になっていった面もある。このあたりを久野さんはどう眺めてらしたのでしょうか」(『週間金曜日』No.256,1999/2/26)。もっとも本稿では、民衆(人民)を市民の去勢されたものとはみなしていない。
- (8)この種の3分類は多くの社会学者が認める一般的な分類であろう。この3つの概念の説明は高坂(1998,p42-60)が便利であろう。ただ、規範理論は「正義の正当性根拠を合理的に説明しようとするもの」(同上,p55)であるが、ここでいう規範論は政策論であって、どうあるべきかという主観的価値観が含まれている。
- (9)生活環境主義についてここでふれる余裕はない。鳥越(1997)を参照したいだければ幸いである。
- (10)この「木の花小路公園」の事例は高田昭彦氏のご教示によるところが大きい。データは氏のご教示と、生きものばんざいクラブの会員(梅田彰さん)からの現地での簡単な聞き取りといただいた資料と、『読売新聞』(1998年10月20日)によっている。
- (11)この町の事例は、筆者の聞き取り以外にこの町のまちづくりアドバイザーをされている小林郁雄氏からいただいた資料によっている。記して感謝しておきたい。

(12)社会システムとプログラムという、社会学者のなかにはプログラムによる秩序形成をとなえる吉田民人(吉田:1995,p274-294)を想起する人が少なくないと思う。それは科学の原理論なので議論の水準は異なるが、目指すところのものはそれとは無縁ではない。

(13)このような考え方はたとえば、社会科学は国民国家レベルの分析を基本的な視点に据えなければならぬと判断したライト・ミルズの考え方と基本的に異なる。ミルズは社会学の調査屋(research technicians)が、社会科学の本来の問題意識よりも調査技術上から国民国家よりも小さな規模の——たとえばコミュニティ——対象を選んでいることの批判がそこでの眼目であった(Mills:1959,p135-136)。このミルズの考え方は当時としては首肯できるし、現在も一部あてはまるが、時代が変わったといえよう。調査技術上からローカリティ論などがでてくるわけではない。

《参考文献》

ハーバーマース, 細谷貞雄訳『公共性の構造転換』1962,(訳書、1973)〔新版:1990(訳書、1994)〕未来社。

Habermas, Jürgen [1962] 1990 *Strukturwandel der Öffentlichkeit*, Luchterhand, 1965 (改訂版)。

花田達朗『公共圏という名の社会空間』木鐸社、1996。

高坂健次「社会学理論の理論構造」高坂、厚東編『講座社会学12 環境』東大出版会、1998。

Mills, Wright, *The Sociological Imagination*, Oxford University Press, 1959.

佐伯啓思『市民とはだれか』PHP選書、1997。

杉岡碩夫・増田四郎「再論地域主義」『経済セミナー』5月号、1977。

玉野井芳郎『地域分権の思想』東洋経済新報社、1977。

鳥越皓之「地域生活の再編と再生」松本通晴編『地域生活の社会学』世界思想社、1983。

鳥越皓之『環境社会学の理論と実践』有斐閣、1997。

鳥越皓之「生活環境とライフスタイル」飯島、松橋編『講座社会学12 環境』東大出版会、1998。

鳥越皓之「環境——エコロジー論を軸として」『書齋の窓』6月号、有斐閣、1999。

鶴見和子・川田侃『内発的發展論』東京大学出版会、1989。

鶴見和子『内発的發展論の展開』筑摩書房、1996。

内山節他『ローカルな思想を創る』農山漁村文化協会、1998。

吉田民人「ポスト分子生物学の社会科学」『社会学評論』46-3,1995。

青少年対策と青少年問題の変質

徳岡秀雄（京都大学）

1. 原因としての対策

(1)はじめに

戦後の青少年問題は、過去3回にわたる少年犯罪の量的推移として記述され、その原因については様々な要因が指摘されている。しかし、従来の説明には問題が多い。①法的統制の記録としての犯罪白書の特質を考慮に入れていない、②増加の理由が説明できても減少のそれは説明できない、からである。

機能分析の、逸脱の順機能、逸脱対策の逆機能、意図的行為の意図せざる結果（潜在的逆機能）という視点や、サンクションがパフォーマンスの原因になるといったラベリング論的発想からは、公的に介入することが新たな青少年問題の原因になるのではないかとの吟味も、当然、必要になる。本稿では、少年犯罪が減少したのは対策に効果があったからだ素直に認め、その上で、むしろ対策が功を奏し過ぎた結果としての副作用に着目する。問題の発生→対策→新たな問題の発生（つまり問題の転化）、というフィードバック関係への視点である。このような発想は、当該問題の沈静化で一件落着、にもかかわらず、一難去ってまた一難、といった伝統的・通俗的な発想とは根本的に異なる（図表1）。

(2)政策・対策のジレンマ

社会規範への同調行動を促進し、逸脱行動を抑止するための青少年政策には、さまざまなジレンマがある。まず、①健全なパーソナリティの発達を積極的に促進する政策、②問題行動の予防対策、③すでに犯罪を犯した少年の保護・矯正活動、の三レベルを意識的に区別しておくべきである。③はさておいても、①健康で豊かな人間形成を目指す積極的施策と、②消極的な問題予防対策、とのどちらを重視するかによって、実際の対応は矛盾してしまう。問題防止のための過剰規制・管理強化は人間関係そのものに対する消極主義や懐疑主義を生み出す危険性があるからである。

次に、上記の三レベルそれぞれについて、介入すべきか否かが課題となる。ラベリング

論は、③のレベルにおいてさえ、放置のコストと治療のコスト（副作用、転移）とを斟酌して、介入の逆効果を指摘しているぐらいだからである。

第三に、介入するとしても、即効的な対症療法と長期的な原因治療あるいは根源的療法とのジレンマがある。教育は本来、長期的視野に立った人間形成の営みであり、即効性を求めるものではない。しかし、3年という在学期間に可視的な効果をあげねばならない強い外圧のもとでは、すぐに立証されうるような、服装や態度などの外面を、体罰を行使してでもきちんと整えざるをえない。ましてや「荒れる学校」との風評を極度に恐れると、一部の問題少年だけでなく、すべての青少年を対象にした消極的な問題予防活動に重点が置かれやすい。しかし、あつものに懲りてなますを吹き、転ばぬ先に杖を持たせて足腰を弱めるような、社会化の大局を見失わせる対策は、親や教師が子どもよりも長生きすることを前提としたそれに墮しかねない。

(3)モラル・パニックと政策選択

モラル・パニックという用語は、自然災害・金融恐慌になぞらえて、いじめ・エイズなどをめぐる大騒ぎのような道徳的混乱を指すために、S・コーエンがはじめて用いた。特定のトピックに関する情報が瞬間的・短期間に爆発的な質と量で集中豪雨的に過剰供給されることで、自明と信じられていた社会的価値が脅威にさらされ、いじめで殺人や自殺すら惹起されることもあるのだ、といったモラルの混乱・崩壊が起きる。不安が雪だるま式に増幅され、いじめに敏感になると、表面化するいじめの件数も増える（図表2および図表3を参照）。さまざまな論争が飛び交い、いろんな対策が百家争鳴のごとくに提示される。

モラル・パニック状況での政策選択は、健全発達よりも問題予防的な、また長期的視野に立った根源的治療ではなく、対症療法的な介入にならざるを得ない。そのような対策は即効性を狙うために、行為者よりも行為規制に焦点をあてた、社会化よりも外的・法的統制に依拠した対策になりやすい。つまり、図表9のタイプAではなくタイプBになりやすい。犯罪増加期には、道徳起業家としてのマスコミ報道を契機にして、統制網が強化されてきた。ネット・ワイドニングの傾向は、犯罪減少期にも後退することなく、不可逆的過程として進行する。

II. 少年犯罪増加キャンペーンと統制強化

(1) 「第二の波」と低年齢化

『犯罪白書』によれば、敗戦後の少年犯罪は、大きく1951年、1964年、1983年をピークとする三つの山を描く。第一のピークは、敗戦による無政府・無警察状態から少年警察力の整備へというサンクシヨンの上昇カーブと、少年を犯罪に駆り立てる要因が相対的に減少したことによるパフォーマンスの下降カーブとの交点として出現したと考えられる。

白書では1954年を底に、1964年へ向けての第二のピークが始まる。戦後の混乱が一応おさまった1950年頃から、青少年問題への関心が高まる。衣食足りて子供の教育に、とでも言うべきであろうか。少年に目を向けるようになると、今までは見えなかった少年の非行が見えてくる。気になりはじめたのである。

白書によれば成人犯罪は戦後一貫して減少しているが、それとは逆に、少年犯罪は増加している。同様の傾向は、少年犯罪の内部においても見られる。すなわち、1960年以前の少年犯罪発生率は、年長少年が最も高く、次いで中間少年、年少少年の順であったのが、1970年以後は、年少少年の発生率が最も高くなり、次いで中間少年となり、年長少年の犯罪は成人と同様、むしろ減少している(図表4)。

低年齢化の問題性は、早い段階で問題行為に陥った少年の多くは、そのまま年長少年、若年成人になっても同じ行為を繰り返す、つまり再非行化する危険性が極めて高いからである。しかし、成人の場合も年長少年の場合も、犯罪発生率は年々低下している。いつまでたっても低年齢化であって、予備軍の正規軍への編入はない(図表5)。ということは、従来よりも統制網がきめ細かくなり、かつては捕捉されなかった年少少年の軽微な非行までが、確実に掬い取られるようになったと解すべきであろう(図表6で、統制レベルがAからBに下降したということ)。

(2) 第三の波はあったのか

図表7は犯罪白書のデータをもとに私が作成したものである。この図表からも明らかのように、第三の波は、多くの罪種が減少傾向を示す中で、万引きを中心とした窃盗と横領が大幅な増加を続けることによって形成された波である。1950年代後半からは、モータリゼーションの影響が未成年者にまで及ぶようになり、交通事故が年々増えるようになってきた。そこで1966年以降は交通関係業過を除くことになりCは激減、それ以後はほぼコン

スタントという状況になる。1971年に警察庁は「遊び型」非行というカテゴリを作り出す。Bだけが増加する趨勢が明らかとなり、1982年版警察白書では、「遊び型」を「初発型」と改める。万引きも軽視できない深刻な問題であるというレトリックへの転換を意図したものであろう。1982年、警察庁は『少年非行総合対策要綱』、「少年非行の総量抑制対策の推進について（初発型非行防止対策）」を通達、青少年問題審議会は「青少年の非行等問題行動への対応」を答申、青少年の非行防止対策について閣議決定もなされる。かくして少年の窃盗も減少する。

Ⅲ. 青少年問題の学校問題化

(1) 青少年の学校への「取り込み」

1974年には、高校等への進学率が90%を超え、高等学校は実質的に義務教育化した。その結果、ほとんどの青少年が学校の管理・統制の下に置かれることになった。青少年人口の大半が学生・生徒・児童ということになったのである。非行の低年齢化ともあいまって、少年非行のうち、学生・生徒の占める割合が1970年代後半に入ると7割余にまで達する。青少年問題は学校内部の問題に転化していく。その一方で地域や家族は大きく変質し、その社会化機能を衰弱させてきた。さらには、地域や家族が失った機能を唯一の可視的社会化機関としての学校に求めるという形で、学校への期待はますます高まる。それが昂じて学校責任の追求が激しくなると、学校は青少年をさらに囲い込み、管理せざるを得なくなる。こうして、子どもの生活にとって学校の占める比重は質量ともに増大する。

「今や学校は、知育、体育、情操教育、しつけ、保健、衛生、安全、遊びの指導から食事の世話まで一手に引き受ける、一大共同生活センターに変貌した」とも言われる。学校は教育の場であると同時に生活の場にもなり、溜まり場や路地裏、盛り場にも変貌する。犯罪少年を含む全ての青少年が学校に取りこまれ、青少年問題のほとんどは学校という場で発生することになる。

(2) 犯罪少年の学校への「逃げ込み」

街頭での万引きすら困難になった時点で、逸脱へのエネルギーは、フォーマル統制機関と直接対峙することを回避すべく、家庭内暴力や校内暴力など、庇護的空間で内弁慶的に表出されるようになる。かくして、青少年問題の舞台は学校内へと移行する。

かつての学校生徒の暴力沙汰は、学校間の暴力、つまりA中学生グループとB中学生集団が地域を舞台に立ち回るといったイメージであった。しかしこれも、地域浄化運動の中で衰退していく。それに代わって学校内部での暴力沙汰である。校内暴力はもちろん少年犯罪の一種であるが、校内暴力事件とは、教師に対する暴力事件、生徒間暴力事件、学校施設・備品等に対する損壊事件を指す。犯罪・非行に暗数は不可避であるが、特に家庭内暴力や校内暴力といった庇護的生活空間で発生する事件については、暗数がさらに多くならざるをえない。警察にまでキャッチされた事件はまさに氷山の一角というべきであろう。

対教師暴力に対しては、第一に、文部省が次々と具体的指示を通達する。第二の対応は、体力派教師の採用と体罰容認である。第三は、管理強化と校則規制である。最後は、警察の介入という対応である。こうして対教師暴力は封じ込められる(図表8)。

校内暴力のうち、対教師暴力や学校機器の損壊が鎮圧されると、残るのは生徒間暴力ということになる。この生徒間暴力と「いじめ」とは、類似性が高くなる。生徒間暴力も、表立った攻撃が困難になれば、それはすまず陰険な目立たない形態をとるようになる。統制が強化された学校の中で、目立つ暴力から隠れた暴力、つまり「いじめ」へと不満のはけ口を移していく。実態も定義づけも、校内暴力から「いじめ」へと変質を納得させるような状況の出現である。

また、社会から切り離され、閉ざされた生活感覚のなかで、子供は学校の同年齢の均質集団に押し込められている。そこで暇をつぶすには集団内部に少しでも異質なスケープゴートを生み出すほかない。それに代わる多様な人間関係がない限り、にっちもさっちもいなくなるのは明らかである。こうしていじめが多発するが、「いじめられて」と遺書を残して自殺するような悲惨な事件を契機に、いじめ総点検、管理の徹底、一望監視システムの採用によって息抜きの時間と場所を奪われた子供は、もはや学校にも来なくなる。今度は不登校現象の問題化である。

IV. 学校化社会における脱学校化現象

1990年代に入って、学校化が一段と進行する一方で、脱学校化の傾向も出てきている。家族も地域も学校的な存在、学校の出店化してきている。サカキバラ君事件については、学校化が浸透して「透明化」した状況での、一望監視下での息苦しきの象徴とも解される。しかもその学校は、既に準刑事司法機関化しているのである。すなわち、学校警察連絡協

議会の制度化、家庭裁判所から求められる学校照会書に答える形で学校側から積極的に提出される学校報告書の肥大化、校則の制定・強化、体罰の制度化、現場校長の裁量による出席停止処分、等々の現象がそれである。

他方で校則廃止やフリースクール、開かれた学校への提言、生涯教育など、「学校縮減」とボーダーレス化への萌芽も見られる。多様化と同時に社会化機能を弱めた家族や刑事司法機関化した学校でも抱え切れなくなった今日、行動様式としては完全に学校化した少年たちが、再び学校や家庭から社会へと流出しはじめる。

1986年の鹿川君は教室の中で「葬式ごっこ」をされたが、1992年の山形マツト事件の現場は体育館であり、1994年に自殺した大河内君は学外でいじめられている。

V. タイプA社会とタイプB社会

他者の側の関心・反応・対応（サンクション）が、行為者の行為そのものに向けられる場合を行為主義、行為者に向けられる場合を行為者主義と呼ぼう。また、同調行動への働きかけが外面規制（狭義の社会統制）にある場合と内面規制（社会化）にある場合との区別も必要である。今、前者にウエイトのある社会をタイプA、後者が強調される社会をタイプBと名付けてみよう（図表9）。

すでに述べたように、モラル・パニック毎に繰り返される政策選択は、行為者よりも行為規制に焦点を当てた、社会化よりも外的・法的統制に依拠したそれになり易い。つまり、タイプAからタイプBへの移行である。しかもこの過程は不可逆的なプロセスでもある。

例えば、学校社会の変質である。第二次大戦前の非行問題は学校問題の外にあり、教育と非行との関連は少なかった。ところが、進学率が高まり、少年犯罪問題と学校問題とが重なり始める。さらに進学競争の加熱とともに、偏差値・輪切り・スライス等々、学校生活におけるテスト成績という、行為結果責任に基づく評価や、校則による管理が、行為の外面規制への、いわば隠れたカリキュラムとして機能する。また、1991年からは、新学力観に立って偏差値重視路線から内申重視路線への転換がなされるが、そこでは、関心・意欲・態度が重視され、挙手の回数やボランティア活動でさえもが点数化されることになる。こうして、外面規制と行為責任主義が浸透していく。

外面規制の領域である少年司法システムにおいても、少年法改正の動きに代表されるように、行為主義化への変質が著しい。

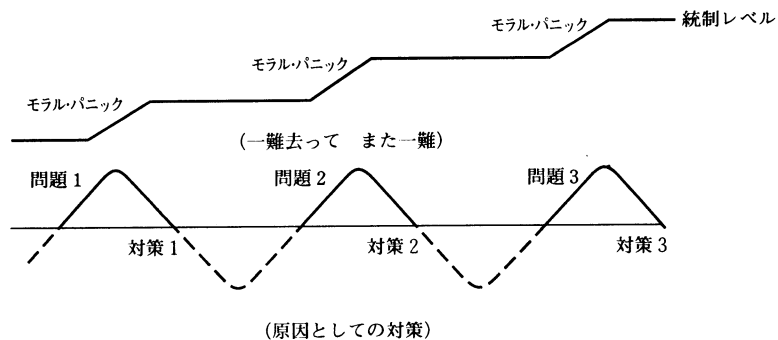
タイプB化した社会になるにつれて、内面化された道徳を中心とした善悪の同心円という前提が崩壊し、悪への新たな距離感が出現する。青少年は、もはや道徳的に軽微な逸脱行為よりも一層凶悪な犯罪に対して、より強い良心の呵責を感じるといった基準よりも、発覚と処罰へのリスク計算、犯罪がペイするか否かといった打算だけを指標に悪事を敢行することにもなりかねない。完全犯罪への誘惑にかられたり、愉快犯、劇場犯罪といったタイプが喧伝される所以でもあろう。凶悪犯罪として表現される暴力も、いきなりキレたり、前エディプスの反抗、内向化・内弁慶化、といった傾向は否めない。ごく最近のトピックは、更に低年齢化した小学校での「学級崩壊」現象なのである。

もう一つの流れは、反社会型から非社会型へ、という動向である。別言すれば、「してはならないことをする少年」から「しなければならないことをすらし、しない少年」へ、禁止されたことはしないが、当然のこともしなくなった、バイタリテイのない非行へ、なんにもしない、「無行」へという変質である。この傾向は、三無主義、指示待ち人間、マニュアル人間、受動的、無機質、背骨のない人間（無脊椎人間）、無秩序と無気力、精神力の全面的低下、「やる気」のなさ、等々と形容されるような、青少年一般の変質ともパラレルなのである。

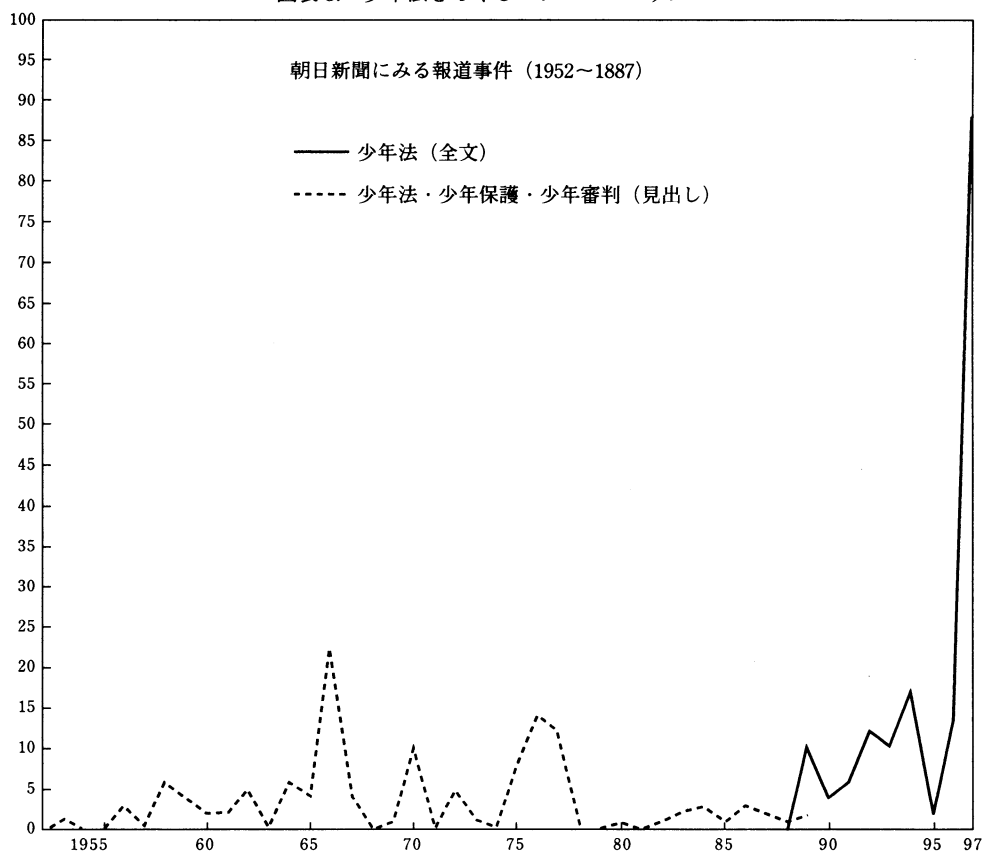
VI. 行為者主義精神の再確認

タイプAに戻すためには、問題予防よりも健全発達に、リーガル・マインドよりも人間・行動科学に関心を移行させ、豊かな社会体験を積み重ねることが大切ではあるが、そのためには、まずメディア・リテラシーの普及が前提となろう。モラル・パニックの圧力を除去することによって始めて、発達心理学等の知見が生かされることになるからである。

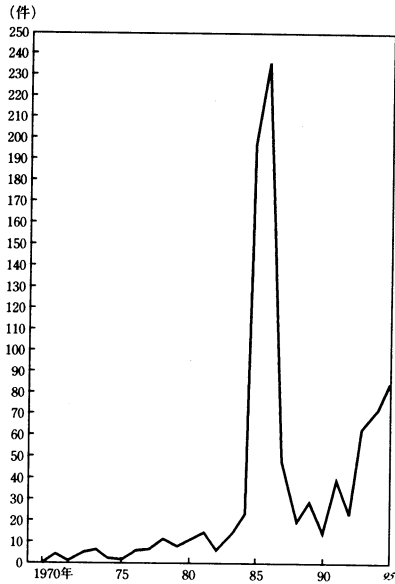
図表 1. 統制網の拡大・強化



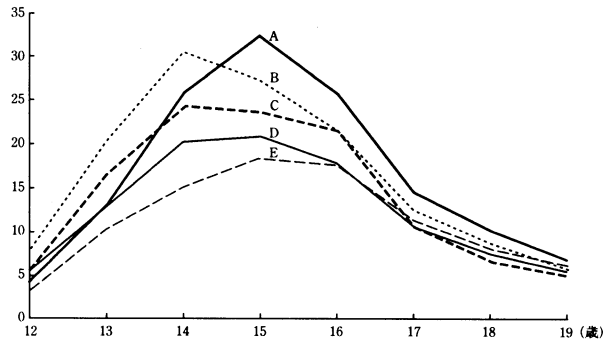
図表 3. 少年法をめぐるモラル・パニック



図表2. 朝日新聞「いじめ」見出し報道件数

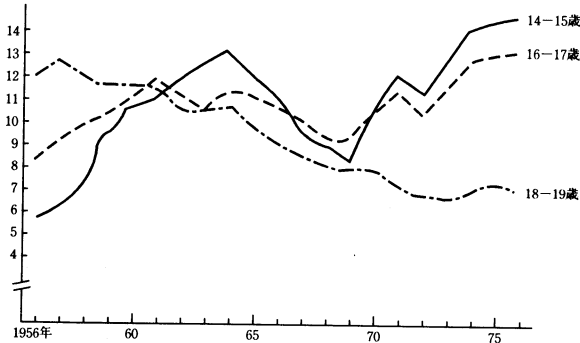


図表5 非行少年率の推移



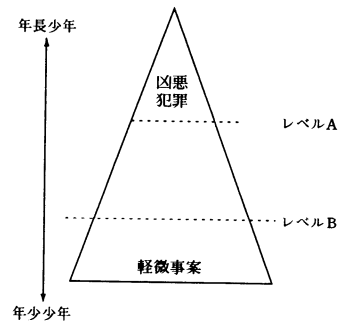
- 注 1 警察庁の統計及び総務庁統計局の人口資料による。
- 2 「非行少年率」は、少年刑法犯検挙人員の同年齢人口1,000人当たりの比率である。
- 3 Aは昭和53年に12歳で60年に19歳、Bは56年に12歳で63年に19歳、Cは59年に12歳で平成3年に19歳、Dは昭和62年に12歳で平成6年に19歳、Eは2年に12歳で9年に19歳の各非行少年率である。
- 4 交通関係業過を除く。

(人口1,000人比)

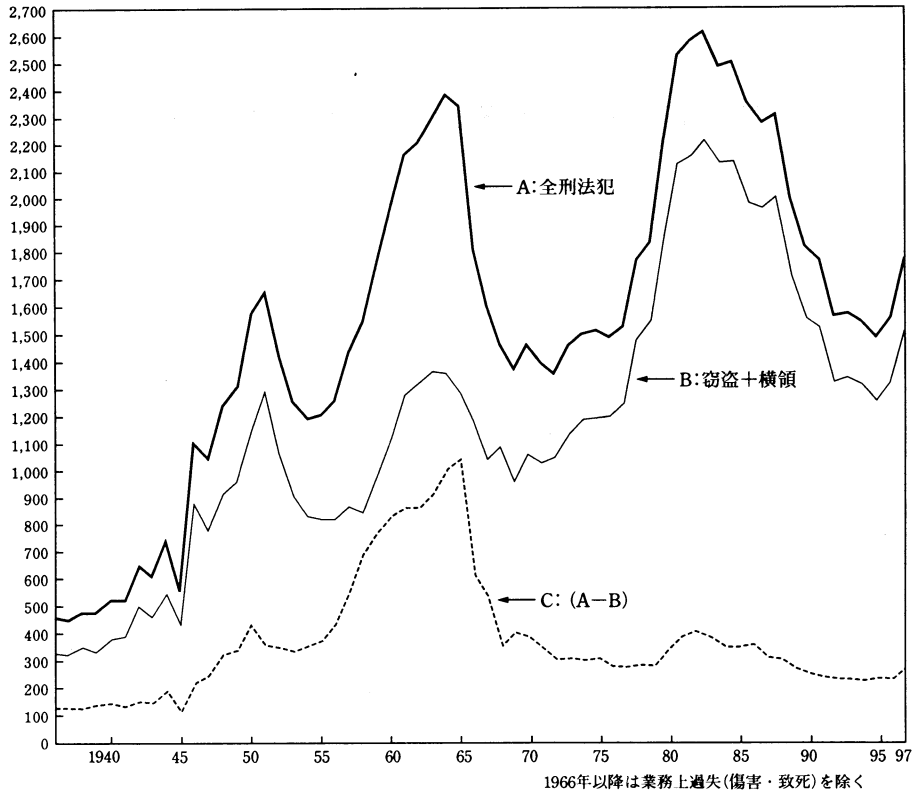


図表4. 主要刑法犯・年齢層別検挙人員人口比の推移

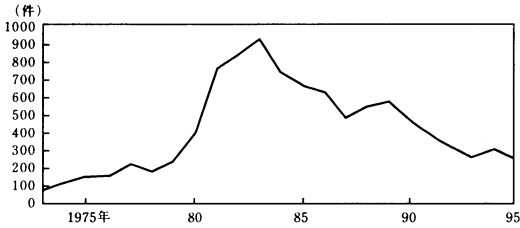
図表6. 非行の低年齢化



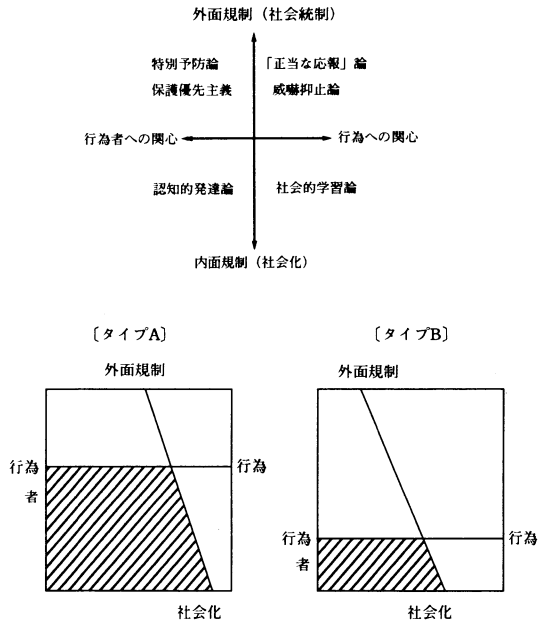
図表 7. 少年刑法犯の年次推移



図表 8. 対教師暴力の指導件数



図表 9. タイプA社会とタイプB社会



ミニシンポジウム 第1部会

社会学は「役に立つ」か？

——犯罪・社会問題の経験的調査を通じて考える——

コーディネーター 鮎川 潤（金城学院大学）

シンポジウムの総合テーマである社会学の「可能性」には、有用性や政策などへの応用可能性が想定されているように思われます。このセッションでは、犯罪・社会問題の研究を題材として、社会学の有用性や、社会政策や行政施策などへの利用可能性、応用可能性について——とりわけ社会問題の調査に携わるなかで突き当たる諸問題を手がかりに、できるだけ具体的かつラディカルに——考察してみたいと思います。

その際、近年の大学の改組転換によって関わりを持つことが増えた、実践的な性質を持つ社会福祉学や解釈法学などの隣接学問領域と社会学との関係の可能性についても検討してみたいと考えます。

以上がこのミニシンポジウムの企画の趣旨でした。

非常に短く要約され一部に変更もみられますが、当日はおおむね下記に寄稿していただいたような各報告者の発表が行われました。コメンテーターの平英美さん（滋賀医科大学）からエスノメソドロジーの観点よりご質問をいただき、松下武士さん（京都教育大学）からはむしろ伝統的な社会病理学的アプローチの有用性が提示されたのち、フロアのかたがたの参加を得て議論が行われました。報告に時間を要したため十分な時間がとれずに恐縮でしたが、構築主義的な観点からの社会問題の存否の認識に関してと、問題解決のための政策プログラムの提示能力に関して意見が交わされました。

いくつかのシンポジウムやミニシンポジウムのオーガナイザーあるいはコーディネーターを引き受けてきて、気づいたことが二つあります。

一つは期限です。レジュメや報告要旨などが期日までに集まらなかったり、自らも連絡が遅れたりなどして、事務局にご迷惑をかけてしまったり、報告者間の調整が不十分になったりすることがあることです。

第二は、最終的には当初のねらいとは異なったアウトプットがもたらされるということです。最初をお願いするときは、シンポジウム全体の趣旨と構成とを説明し、ご理解いただいたうえで、ご報告をお引き受けいただきますが、その後、全く違ったものを提案されること

もあります。打ち合わせの過程で全体の構造が変わったりもしますが、いったんメンバーが確定したのは、別の提案を受け容れて進むことになります。

最初は二つの事態に出会ってショックを受けましたが、最近は一ひょっとしたらこれは常態なのかもしれないと思い始めました。おそらく私が今までに聴きに行き、そこに構造と必然性を見出してきたシンポジウムの報告もそのようにコンティンジェントな達成かもしれないという感慨を深くするようになった次第です。

本ミニシンポジウムでは、第3報告と第4報告の分析パースペクティブが入れ替わりました。当初第3報告は、社会構築主義からの社会問題の分析が期待されましたが、パースペクティブはむしろ原因論的あるいは「実証主義的」なものとなりました。第4報告は、今回は社会問題の領域における計量的・実証主義的調査をテーマとしてご報告いただく予定でしたが、質的な解釈的アプローチの観点を中心としたご報告となりました。（なお、紙幅の都合から一言のみ付け加えさせていただくならば、第3報告は興味のあるものですが、わが国における社会構築主義研究については『社会問題の構築』において行われたような運動論的視点からの分析も有効なように思われます。）

フロアの皆さまからいただくご質問のコンティンジェンシーはもっとも大きな喜びですが、こうした構成の変化もまた楽しいものです。「役に立つのか」というテーマの設定は、問いの立て方や問い自体を問い直すということも狙っています。報告者が自由に報告を行い、自らの見解を披瀝していただくことが何よりも必要でした。他方、聴きにきていただいたかたには、物足りなさを感じられたかたもおられたことでしょう。また、どのようにすれば社会学はより役に立つことができるのかという明確な問題意識を持ってご参加いただいたかたにはフラストレーションを感じられたかたもおられたことと存じます。コーディネーターの未熟さに免じて、ご海容いただければ幸いに存じます。

積極的に政策提言や立案を行っている欧米の社会学者がまぶしく目に映ります。いったい社会学はどこへ行こうとしているのでしょうか。わが国の大学における学部再編、改組転換、学生の確保、定員割れの回避……。こうした状況下で無用の効用を謳うとするのであれば、それはどこまで通用するのでしょうか。心理学主義対社会学主義というデュルケムの問題意識が再燃しています。社会学と社会福祉の逆転現象も見られます。大学という狭い現実的な場面においても、社会学はその存在意義を問われているようです。

1. <社会問題の社会的アプローチ>は役に立ったか

——児童虐待問題研究から考える——

上野加代子（武庫川女子大学）

報告者の児童虐待問題への関心は、次の点においてである。日本での児童虐待の社会問題化において、対抗クレームらしきものが見あたらず、問題を問題として主張する人たちの活動についての分析もなされていないのはどうしてなのか。たとえば、非行やいじめをめぐるでは、それらの問題を報道するマスメディア、取り締まる警察、そして問題を論じるひとたちに焦点をあてた議論もなされてきた。70年代の子捨て・子殺しの一連の論議においても、新聞の関連記事の件数の増加が発生件数の増加と対応していないといったマスメディアの活動を分析したものがあつた。報告者は、今日の児童虐待問題について、家族を問題であるとして提示する人たちの活動についての分析がなされていないのは、この問題に固有な背景があるからだと考えている（詳しくは、拙稿「少子化時代のサバイバル——社会福祉の<社会病理>」『現代の社会病理』第14号、1999年、および「児童虐待問題から<家族の危機>を考える」清水新二編『現代家族の危機と変わりゆく家族問題』ミネルヴァ書房、2000年を参照されたい）。

けれども、そのような関心からの報告者の研究は、「現場」「関係者」の反発にあう。そんな悠長なことを言っているあいだに、親の虐待で子供が死んでしまったらどうする、関係者の努力に水をさす有害な研究である、というわけである。しかしその一方で、児童福祉や医療「関係者」のなかには、「部外者」は好きに議論をすればいいのではないか、「現場」に没頭してはみえにくい違った視点をむしろ歓迎するといった意見もある。「現場」「関係者」の反応は、その人や状況によって異なり、児童虐待防止の民間団体、児童相談所、社会福祉学会といった各々の団体の枠にそって分類できるわけでもない。ただひとつ興味深いのは、そのような多様な反応にもかかわらず、「現場」「関係者」のパブリックな議論（論文、研究会発表等）では、報告者の研究は参照されたとしても儀礼的な扱いが多いように思う。報告者にとって論文を書き、研究会で発表することが仕事の一環であるように、社会福祉・医療研究者にとって同様の行為は職業活動であり、そこでは社会学とはやや異なる職業上のルールが要請されている。児童虐待問題に関しては、研究活動とクレームメイキングとを分離することは職業倫理上、好ましくないことと考えられているようである。

報告者の限られた経験からすると、問題解決を金科玉条とする主流の「現場」「関係者」からさえ、社会問題の構築主義的な視点からの議論が期待されているむきもある。「関係ないひとだから」「部外者の議論だから」と、上手に無視してくれ、必要であればスパイスとして活かしてくれる。そして今後は、部分的に取り入れようということになるのではないだろうか。

というのも、児童虐待問題を社会問題の構築主義的な視点で論じること、それを聞いてくれるひとたち、社会問題の社会学や構築主義に関心を寄せるひとたちがいるから成立するのであるが、ソーシャルワークに目を転じてみても、北アメリカにおいては、ポストモダン・ソーシャルワーク論をはじめとして、構築主義的な研究に敏感なコミュニティの台頭をうかがい知ることができる。そこでは、ソーシャルワークの永年にわたる「専門知識」「客観性」「真理」「主体」への信仰が論議の対象になっている。アメリカの動向を熱心にフォローしつつつけてきた日本の社会福祉「関係者」のなかで、かかる関心が芽生えていないはずがないと思われる。

2. 組織体犯罪研究から見えてくること

——熊本水俣病事件の研究から——

平岡義和（奈良大学）

組織、とりわけ企業組織の影響力は、個人のそれに比して、きわめて大きい。ところが、日本では、企業組織の引き起こす問題が刑事事件として処理されるケースは多いとは言えず、社会学的実証研究も少ない。その背景にある社会学、刑法学の問題点について、筆者自身の熊本水俣病事件の研究をもとに考えてみた。

(1) 組織の犯罪の特徴

原因企業であるチッソの行動を、それを担った組織内の個々人の行動にまで遡って再検討してみると、以下のような特徴を見出すことができる。

- ①「事件」は、異なる時点における多数の行為（不作為を含む）の連鎖によって構成されている
- ②それぞれの行為に関与した部門、個人は異なっており、「会社ぐるみ」といわれるような一枚岩的組織観は必ずしも妥当しない可能性が高い
- ③個々の行為について、関与した個人の「故意」「過失」の立証はきわめて困難で、裁判における事実認定は、裁判官の心証、推論に大きく依存している

(2) 刑法学の問題点

刑法学は、次のような学問的特質を有している。

- ①司法過程における問題解決に資する一元的な解釈論理を志向している
- ②個人の行為を前提とした現行刑法を与件として、理論構築がはかられている
- ③司法過程に取り上げられたケースが主たる対象となり、そのテーブルにのりにくい組織の犯罪は、例外的な問題となってしまう
- ④法の解釈が主要な課題のため、演繹的性格が強く、個別のケースの事実から帰納的に思考することはほとんどない
- ⑤この①～④の結果、個人の行為を前提とした理論体系はゆるがさない

こうした学問的性格からして、刑法学は関与した個人の行為の犯罪性を同定することを求めるため、上記のような特徴を有する組織の犯罪の刑法的統制を困難にする一因となっているのである。

(3) 社会学の問題点

日本における組織の社会学的研究は、ウェーバーの官僚制の理論が研究の原点になっているせいか、主として組織と個人の関係に焦点をあてている。したがって、組織の動的な行動過程の研究はほとんどみられない。

犯罪社会学の分野をみると、アメリカでは、70年代以降、レイベリング論、構築主義が台頭した70年代に、ウォーターゲート事件を契機にして、それと並行して企業の犯罪に関する実証的研究が蓄積されている。ところが、日本では、ほとんど前者しか脚光を浴びていない。

これらの事実は、次のような日本の社会学研究の問題点を浮かび上がらせる。一つは、目新しい海外の理論の輸入が研究の中心となっていること、もう一つは、現実の問題に対する関心が相対的に希薄なことである。

(4) 共同研究に向けて

刑事裁判記録が十分に利用できないなど制約は大きいですが、上述した問題点を乗り越えるために、構築主義、エスノメソドロジー等の分野も含め、社会学と刑法学分野の人々による組織の犯罪に対する共同研究が行われることを望みたい。

(文献)

拙稿、1999、「企業犯罪とその制御—熊本水俣病事件を事例にして」、
宝月誠編『逸脱（講座社会学10巻）』東大出版会

3. 「世直しモード」はなぜ流行らないのか？

——社会イメージの変容をめぐる——

土井隆義（筑波大学）

かつては、社会学概論の講義を担当する度に「社会学は役に立つのか？」と疑問を投げかける学生によく出会ったものである。そこには社会という抽象的な実在がイメージされていた。すなわち、特定の集団や個人に対する効用を超えて、一般的に「社会を良くする」とか「社会の役に立つ」といった抽象化された発想が成立していた。しかし最近、そのような問いを投げかける学生がめっきり少なくなってしまった。しかし、彼らが社会学に実利性を求めなくなったわけではない。個別具体的な問題には強い関心を示すからである。むしろ最近の学生たちは、抽象的な社会を想像することが困難になっているのであり、具体的にイメージできるものに対してしか問題関心を抱かなくなっているのである。

社会はもともと想像力の産物であるが、とりわけ我が国の場合にはその抽象度が高かった。対して具体的であったのは世間である。しかし、最近では社会の抽象度が下がり世間に近づいてきている。その背景には、日本社会の変質が潜んでいる。最近の若者の眼前からは他者がフェード・アウトしつつある。他者との関係が成立しにくいという事態は、関係性を支えるための共通基盤として等身大の関係をこえた超越性が天蓋として存在していないことを意味している。また最近、社会に対して異議申し立てを行なう人びとがあまり見当たらなくなっている。社会問題の研究者が逸脱者の世界に見出すのは、反社会的というよりむしろ脱社会的な世界を生きる、いわば私事化された人びとの姿である。このような現象は、近年の日本において抽象的な社会に対するリアリティが崩壊しつつあることを物語っている。

社会を研究する側においても、抽象的な社会によりも諸個人の活動に注目するという研究スタンスに親近感を覚える研究者が多くなっている。最近の構築主義の流行もそのことと無縁ではなからう。脱社会的な心性が、「社会とは私たち個々人の活動でしかない」という構築主義のインプリケーションに対するセンスを高めるであろうことは想像に難くない。たとえば、構築主義における存在論的ゲリマングリング論争は社会学の効用性の否定を含意している。社会一般とか普遍的とかいった発想が構築主義にはありえない以上、「役に立つ」社会学を目指すことは、特定の集団利害に加担することにほかならないからである。その意味でこの論争は、社会学を「いかに役に立たなくするか」を追求するものだともいえる。「社会学は役に立つか？」という問いが成立しにくいという状況は、構築主義の流行との間にも

密接な関係を持っている。

現実にはリアルでないということが現代のリアリズムとなり、現実には演技によって達成されるという認識が一般化している。現実がコピーされるのではなく、コピーが現実として認識される。このような社会環境のもとに育った心性は、現実の構築という見方にも大いにリアリティを覚えるに違いない。現実がある種の虚構であり演技されるものだという認識は、現実には構築されるものだという認識と同系のものである。また現代は、社会が具体的なモノとして見えてしまう時代でもある。かつては想像力を働かさなければ社会は見えにくかったため、何かしらの物語を媒介にしなければ社会を語ることはできず、そこに抽象的な社会の成立しうる余地があった。しかし現在の社会は、可視的であるがゆえに、観念を媒介にしないで直接に具体的なモノとして認識されてしまう。このような事情によって、従来は自己のあり方を大きく規定してきたはずの社会の与件性が弱まる結果となっている。「社会学は役に立つのか？」という問いが成立しにくくなってきた背景には、このような事情があるのではなかろうか。

4. 社会調査の実践的コンテキスト

—ひとつの「こころがまえ」—

島 和博（大阪市立大学）

問題と問題化を巡る錯綜した社会的な関心と利害の絡み合いの中で、社会調査は、はたして「学問的」あるいは「科学的」問題関心によってのみ、そこに関与しているのか。たぶんそうではないだろう。様々の社会的な勢力や集団・個人の利害と関心の絡み合いによって構成されている社会的実践の場で、調査（研究）主体の「学問的」関心もまた形成されざるを得ないということは確かである。ある具体的な問題状況に対して、調査というかたちで私たちが関与あるいは介入する場合には、そこにはどのような関心と利害が潜んでいるのか。私たちが社会調査へと向かわせる実践的関心とは何か。このことが不断に自覚され反省されることが必要であろう。

「誰にとって」また「どのような意味で」社会調査が「役に立つ」のかということは様々であるとしても、それが「役に立つ」ということはほぼ疑いない。なぜなら、多くの場合、そこには調査に対する「需要」（これは必ずしも「スポンサーの意向」を意味しているのではない）が存在し、その「需要」に応えるかたちで調査は実施されるのであるから。そして、この調査に対する「需要」のありようを無視して、あるいはそれと無関係に、調査を計画・

実施することは恐らく不可能である。技術的な意味で調査がどのように「役に立つ」のかということの問題にする以前に、より根本的な次元で、調査が「需要」されるその背景を、調査の営みそのもののうちに繰り込んでおく必要がある。すなわち、この調査が根本的なところで、「誰のための」そして「何のための」調査であるのか、という厄介な問題について常に自覚的であらねばならない。

一般的に言えば、調査に対する「需要」と「供給」との間でア・プリオリに関心や利害の一致が成立するわけではない。むしろ実際には、程度の差はあれ、常に両者の間にはズレ、齟齬、さらには対立が存在する。その原因は大別すれば二つある。一つには、多くの場合、調査が相対立する利害に基づいた複数の「需要」（たとえば「行政」や各種「運動団体」、「市民」などからの「需要」）に向かい合いながら行われなければならないということである。とりわけ、その調査が対象とする「問題」がホットな「争点」として浮上している場合にはそうである。調査主体の「学問的」関心や「客観性」の主張によって、こうした「政治的」状況をかまし、あるいは調停することはほとんど不可能である。調査を実施するというそのもの、そして調査のやり方、さらには当然のことながら調査の結果、これらすべて（調査が「供給」するものすべて）が、この「政治的状況」の中に投げ込まれ、評価されることになる。第二に、さらに厄介な問題は、調査主体そのものが決して「調査マシン」ではなく、その調査を担う個々人（私たち）が、それぞれに一定の「政治的」立場や状況判断の固有の枠組みを保持しているのであり、それゆえ、この調査主体もまた「需要」者の一翼を構成しているのであるから、調査を巡る「政治状況」はさらに錯綜したものとなる。調査とその結果は単に「外部の」需要者によって「政治的」あるいは「社会的実践的」コンテキストに置かれるだけでなく、それ以前の段階において調査主体そのものによって実践的コンテキストに接合されているのである。こうした状況において調査が実施される場合には、それゆえ、調査という営みは必然的に「戦略的」たらざるをえない。認識論的次元における「正しさ」と政治的・実践的次元における「正しさ」をいかに「計算」するのかということが問われることとなる。普遍的に「役に立つ」ことなどはまったく不可能な状況で、調査が「役に立つ」あるいは「役に立ってしまう」という事実を、私たちはどのように考えたらよいのか。自覚的に「役に立たせない」ことをも一つの選択肢として考慮に入れつつ、調査の「戦略」を練っていかなければならない。

ミニシンポジウム 第2部会

ディシプリンとしての社会学

——そのアイデンティティとキャパシティ——

コーディネーター 大野道邦（奈良女子大学）

はじめに——趣旨

社会学は草創期以来、社会の「全体的・包括的」な理論的認識、社会の「理想的イメージ」の呈示を試みてきた。なるほど、このような試みは、専門分化した経験・実験科学としての個別の連字符社会学の立場、社会学の具体的な応用可能性の観点からいえば、「誇大理論」であるかもしれない。だが、「社会の基本的なデザイン」について、他の社会諸科学とは区別された独自の基礎的な分析・説明枠を備えたディシプリンとして理論的に提言することができるという点にこそ、他の科学にない社会学の応用（政策）可能性の一つがあるのではないか。こういったところで応用可能性を議論してみたい。

この場合、社会学の伝統的・根本的な理論的テーマである、「社会の範囲」、「社会のシステム性」、「文化的なるもの」、「社会の自己意識」に対応して、それぞれ、(1)社会学は「ナショナリズム」と「グローバリゼーション」の関係についてどのような提言ができるか（油井清光氏）、(2)「ポストモダン」社会においてシステム論はいかように社会について語るができるか（三上剛史氏）、(3)社会学において「文化」はいかに位置づけられべきか（荻野昌弘氏）、(4)社会についての反省意識としての社会学はモダニティの特性である reflexivity の作用をどう受けとめるか（宮本孝二氏）、という問題に報告者が答えた。そして、討論者（厚東洋輔氏、馬場靖雄氏）とともにパネル・ディスカッション風に議論した。いわば、「大きな物語」について、語るができないことも含めて語ろうとしたミニシンポジウムであった。

各報告内容

1. 社会学と国民国家・グローバリゼーション

油井清光（神戸大学）

油井氏は、今日、社会学に向けられている、「国民国家中心主義」および「郷愁のパラダイム（国民（文化）主義）」への批判に対してどう答えることができるのかをパーソンズの理論の再検討をとおして明瞭にし、こうして、国民国家とグローバリゼーションの問題の

分析に社会学がいかなる理論的キャパシティをもちうるのか、を探ろうとする。

冷戦下（1960年代）に書かれたパーソンズの国際（世界）社会論は、コミュニズムと資本主義に両極化しているように見える国際社会に「価値論」的なレベルにおける「秩序」はありうるのか、という問題意識に触発されたものであった。パーソンズは、秩序はありうると結論し、その根拠を両体制の「文化的基礎」の同質性に求めた。つまり、コミュニズムも資本主義も基本的には「同じ」西欧の文化的基礎からの「派生物」なのである。したがって、両者はそこへと収斂してゆくことができるだろう（近代社会の収斂）。だが、同時に、両体制には相違もある。「一般的な価値」のレベル（L次元）においてはある同質性があるが、より具体的な文脈における「規範化」のレベル（I次元）においては分裂や軋轢が生ずるのである。

それでは、世界が近代社会としてそこに収斂してゆく基本的な合意（価値）とはどのようなものであるのか。パーソンズは50年代末に既にいっている。「普遍主義的な観点をとれば、単一のシステム目標は、排除されるのである。遂行の産物ないし業績は多面的に評価されるべきものとなり、単一のシステム目標への貢献としてのみ評価されることはありえなくなる。かりに受容可能な評価基準があるとすれば、それはシステム外部のより高次のシステムとの関連をもたなければならない」と。この場合、パーソンズは「道具的活動主義」という「価値」について語っているのであるが、この価値はシステムの外部との関連においてしかシステム内部に現れないのである。

「システム外部のより高次のシステムとの関連における価値」という発想は、最晩年の「人間条件の一般的パラダイム」において明確となっている。アメリカ合衆国を一つの「全体社会」と見做すならば、価値の問題は、その外部である「文化システム」（行為システムのサブシステム）へと外化され関連づけられており、さらに、その外部にある「テリック・システム」へと外化・関連づけられる。これに対して、アメリカという一つの国民国家の「内部」の問題は「規範化」レベルの問題であり、それははじめから「多面的規範による多面的連帯」でしかない世界である。ここにおいて、国家内部のさまざまな倫理の実質から国家そのものが中立的（外部的）でありうるとする、ハバーマスの「中性国家」という価値概念が持ち出される。留意しなければならないのは、「中性国家」を良しとする価値（パーソンズの道具的活動主義）そのものへの人々のコミットメントがなければこの価値は成立しえないということである。これこそ、パーソンズのいう基本的な「合意」であろう。つまり、世界が近代社会として収斂するとするならば、この方向をとるであろう。「多面的

な社会」(アメリカを含む近代社会)は価値レベルで「前提条件」をもっており、この前提的な「価値」によって根拠づけられるものであろう。

このように、油井氏は、個々の国民国家や国民共同体(国民文化)を超えて「外」にある「価値」へのコミットメントこそ国際社会における「秩序」の普遍的な「根拠」をなすのではないかと、というパーソンズの示唆を受け、社会学がグローバリゼーションの中で社会のグランド・デザインを描こうとする場合、こういった「高次の抽象的な価値」への言及が理論的に問題になるのではないかと主張した。

2. ポストモダンティの社会学とシステム理論

三上剛史(神戸大学)

三上氏は、パーソンズやハバースマスやルーマンなどのシステムないし社会的全体の概念を比較検討しながら、とりわけ、ルーマンの社会システム理論が「モダンの境界線を引き直す時代の理論」であることに注目し、「ポストモダン」的な状況において社会学がシステム理論としていかなるキャパシティをもつのかについて議論する。

ポスト構造主義は世界を多様性と可変性において捉え、現実を「差異」の網の目として見る視点を共有している。「パーソンズの行為者は文化の汚染者でありアルチュセールの行為主体は構造の汚染者」(ギデンズ)ということになり、ともに「主体」を「構造的(文化的)決定」によって置き換えているだけである。これに対して、ポスト構造主義は、構造と主体を同時に相対化し、差異と同一性をめぐる社会的産出のプロセスとして社会を見る。こういったスタンスをとるルーマン、ハバースマス、ギデンズ、ブルデューのうち、とくにルーマンは新しいポスト近代的なシステム理論を提示しているという点で注目される。

ルーマンのシステム概念はパーソンズのシステム概念と比較することによりその特性が一層明らかになるだろう。パーソンズは、いわば社会システムの「上」の中心である価値と「下」の中心である主体(行為者)を二元論的に措定し、この「価値」と「主体」という二つの中心を「社会化」や「内面化」で繋いでいるといえる。これに対してルーマンはどうであろうか。第一に、「価値コンセンサス」に関しては、パーソンズが価値秩序の構造的同一性を前提とし、インタラクションにおけるダブル・コンティンジェンシーを共有価値と社会化で解決しようとしたのに対して、ルーマンは、このような前提を撤廃する。すなわち、ダブル・コンティンジェンシーは基本的には解決されず、インタラクションは価値コンセンサスなしに偶然に開始され続行する。次々と生起するものをその都度規定してゆくような、接続の連続的生起がまさにシステムを可能にしているのである。

第二に、「個人主体」については、パーソンズのように複数の「主体」が価値コンセンサスを内面化しシステムを形成するというのではない。ルーマンにあっては互いに別個の存在である個々の「意識システム（心的システム）」が接触するときには発生する一定のメカニズム（非任意性）こそ社会的システムとなってゆくのである。このような意味で個人と社会システムは互いに「環境(Umwelt)」なのである。

要するに、ルーマンの場合、ダブル・コンティンジェンシーが存在するから、存在し続けるから、秩序が存在するということである。社会というものは本来不確定であるからこそ社会なのである。不確定性が社会を可能にしているのであり、「ノーマルなものは不確定である」。ここにルーマンのシステム理論の特徴を見出すことができる。

このように、三上氏は、ルーマンのシステム理論を、価値とか規範とか合意とかいった超（あるいは非）社会的な根拠を持ち込むことなく「社会的なものを社会的なもので説明」しようとする、純粋に社会学的な議論である、と解釈する。そして、このようなルーマン的な視点に立つならば、「頂点も中心もない」、「管制高地が存在しない」ような社会の「イメージ」（設計図）を考えることもできるだろう、と示唆した。

3. 社会学における文化の位置

荻野昌弘（関西学院大学）

荻野氏は、社会学における文化の取扱いを批判し、今日において文化を社会学的に語るむつかしさに触れ、にもかかわらず語ることの可能性をいかに見出すかを議論する。

「私が盗んだすべてのもの」というタイトルの、実際盗品を用いたオブジェが1996年マルセイユ現代美術館に展示され、来館者のアーティストが自分のビデオデッキがそこにあるのを見つけ取り戻そうとして警備員に阻止された。美術館側は「あらゆる作品を守る」必要からこの措置をとったのであり、来館者は警察に訴え、館長と作品制作者は逮捕された。マスコミの論調は美術館に同情的であり「芸術を理解できない」警察を批判した。この事件をめぐる二つの解釈がありうる。(1)文化遍在主義、(2)文化遍在主義批判。文化遍在主義とは「あらゆるものが『文化』としての価値を認められるべきである」という考え方でありこの立場から美術館側を擁護した。これは文化的なものの範囲を特定の価値があるとされた作品に限るのではなく、あらゆる「人間の営み」にまで拡大しようとする、デュルケム以来の社会学における支配的な文化観である。これに対して、ブルデューの「象徴的闘争論」は文化（芸術）自体の価値は問わず、ある作品が文化としての価値を付与される過程に着目する（この事件においては作品の絶対的な文化的価値を主張する

文化的セクターと作品の社会通念上の限界にこだわる別の文化的セクターとの象徴的闘争)。また、ボードリヤールは「文化の権力批判」の立場から、美術館や博物館こそ限られた「空間」の中へありとあらゆるものを収集しようとする「全面的収集」の拡張的権力であり盗品の展示はこの結果であり殺人でさえやがて展示されるであろうと皮肉り、美術館そのものに権力を見出す。ブルデューもボードリヤールもあらゆるものが当初より自明的に文化であるとは見做していない点で文化遍在主義批判のスタンスをとっている。

社会学における文化遍在主義は、大衆文化や性或ロックミュージックなどかつて非文化的であったものも含めあらゆるものが文化的価値をもつにいたった現代、既に批判力を失っている。むしろ、社会学者が文化について論ずること自体がある種の権力（批評の権力）を生み出してしまふ。こういった状況の中で、「批評の権力」に与することからできる限り遠ざかるためには、文化の「意味内容」そのものについて思索することを回避し文化客体に対する態度やアクシオンを問題としなければならない。なるほど、ブルデューやボードリヤールはこの方向を示しているが、象徴的闘争論は社会構造の再生産の肯定に止まりがちであり、文化の権力批判は「アイロニー」的であり理論的な力をもちえない。

それでは、いかに社会学は文化を扱うべきか。全面的な保存・収集の時代である今日においては、個々の事物（文化作品）の価値は低下し事物の集まりは「雑音」にすぎなくなる。したがって、文化＝雑音を捉えたあとで、雑音から逃れるかあるいはそれを消し去る方法として社会学が登場してもよいのではないか。つまり、「忘却と消滅」の視点から見れば、再生産、システム、権力といった概念は捨て去り、「不確定」や「暴力」というような用語は見直されてよいのではないか。例えば「人間は根本的に暴力的である」というように。犯罪を含むあらゆるものを文化として捉えるようなことはやめ、文化的でない仕方では社会事象を論じてよいのではないか。

このように、荻野氏は、社会学における文化の微妙な位置について触れ、文化についてルーティンのかつ斉唱的に語らないことが、かえって文化のもつ社会的な批判力（毒的作用）について語ることになるのではないかと示唆した。

4. 社会学と reflexivity

宮本孝二（桃山学院大学）

宮本氏は、ギデンズの社会理論を検討しながら、社会学が社会それ自体についての、全体的な視野に立つ反省的意識である点をめぐって議論を展開する。

ギデンズの社会理論における reflexivity 論には次の三つの論点がある。第一に、主体の

「意味形成能力」、「意味反省能力」の理論としての reflexivity 論である。一般的な「構造化理論」のレベルでいえば、行為主体は、自己自身を、また自己の生きる世界を対象化しモニターしているという意味で reflexive である。全体的・現代的な「モダニティ論」のレベルでいえば、reflexive であるということは、新たな意味の発見、新たな問題の発見につながり、国家や運動は社会に対して reflexive な存在として問題解決に向かう。そして、「自己」も reflexive なプロジェクトとなりアイデンティティが問題となる。

第二に、行為の「帰結」の理論としての reflexivity 論である。構造化理論としては、意図せざる結果も組み込まれる、行為の帰結としての構造という視点が問題となる。モダニティ論としては、近代化の諸帰結が近代化の舞台そのものや成果を破壊しつつあるということ、すなわち、人間の行為能力の増進や可能性の拡大がそれに比例して危険な帰結をもたらすということである（ベックのリスク社会論の議論とも関連する）。

第三に、「社会学的認識」、「知識の存在様式」の理論としての reflexivity 論である。構造化理論レベルでは、「二重の解釈学」が問題となる。つまり、社会学の対象である社会的現実を構成する主体の reflexive な解釈を、社会学者が reflexive に再解釈し、それが主体の知見となって一層 reflexive となり、その帰結として行為が変容し現実も変化するということである。モダニティ論レベルでは、制度的 reflexivity の一環として、すなわち変革のメディアとして社会学が存在するということである。

最後に、社会学のアイデンティティとキャパシティについて、ギデンズに言及しながらいえば、次のような点を指摘できるであろう。

(1)一般理論的な reflexivity という社会学の課題は、「構造化理論」の構築のころみによって、(2)現代社会についての全体論的な reflexivity という社会学の課題は、資本主義、産業主義、監視、暴力の四次元への reflexive な考察に基づく、国民国家論やグローバル化社会論の構築のころみによって、(3)変革のメディアとしての社会学の課題は、ラディカル・ポリティックスやユートピア的現実主義に立つ新しい「社会構想」の提示によって、それぞれ、達成されるであろう。

このように、宮本氏は、とりわけ、「社会学的認識」の理論としての reflexivity 論を強調しつつ、社会的な知識の現実への「投げ返し」や「差戻し」を問題とし、これが社会学の「政策（社会構想）提言」のキャパシティに繋がってゆくのではないかと示唆した。

討論者のコメント

二名の討論者〔厚東洋輔（大阪大学）、馬場靖雄（大東文化大学）〕は次のようにコメントをした。

〔厚東氏〕ディシプリンとしての社会学を考えるさい、その認識対象であるリアリティとしての「ソサイエティ（社会）」が問題となる。社会学のポテンシャルティは一にコア概念としての「ソサイエティ」概念の有効性にかかっている。最近、社会学は「社会」を「ネイション・ステイト」と同一視しておりこれに代替させているという議論があるが、一面的な議論であるように思われる。ネイション・ステイトをコア概念にするならばディシプリンとしての社会学は確立しないだろう。ところで、第一に、21世紀の到来とともにネイション・ステイトの意義が低下するかもしれないが、それに替わってソサイエティが有意義になるのか、あるいは、ネイション・ステイトと運命を共にするのか。第二に、ソサイエティが社会学のコア概念にならないとするならば、それに替わる新しい鍵概念はなんだろうか。この二点を報告者に聞きたい。

〔馬場氏〕社会学のアイデンティティと考える場合、三つの方向がある。連字符的な社会学、形式社会学、社会全体（ルーマンのゲゼルシャフト）に考察を絞る方向。しかし、もう一つのアイデンティティの方向としてマンハイムの知識社会学が挙げられよう。それはある意味で、卑怯な科学、軽薄で浅薄な科学、「フリッパント」な科学とも呼んでよいだろう。というのは、知識社会学は、思想をその内在的動機や構造ではなく利害状況とか存在拘束性といった外在的・表面的なものによって説明しそれで事足りるとしているから。この意味で知識社会学はフリッパントでスキャンダラスなものかもしれない。だが、この方向に社会学のアイデンティティを求めることも可能ではないか。ただ、社会学とは存在拘束性を考察することである、と「ポジティブ」に規定してしまえば、それはもはや外在的でもフリッパントでもなく一種の確立された思想となってしまう。社会学にアイデンティティがあるとすれば、あくまでもフリッパントであり続けることではないだろうか。

おわりに——論点

報告者と討論者間の議論、さらにはフロアーからの5つの質問やコメントも交え、活発に討論が交わされたが、紙幅の都合上、主要な論点のみを挙げておこう。第一に、「価値という『文化的なもの』が、たとえ空虚で抽象的で高次であろうとも、ある範域の社会を根拠づけるのではないか、したがって、社会のデザインの描写には、『文化的なもの』が深く

かかわるのではないか」、あるいは、「そのようなものを根拠として想定しなくても、社会を説明できるシステムとしての社会は成立しうるのではないか、したがって、機能的システム固有のメカニズムからデザインを導出できるのではないか」という論点である。「価値」と「システム」の関係を巡る議論である。第二に、「社会学においては国民国家と社会は同一視されてきており国民国家という範域に『社会』は閉じ込められていたのではないか、したがって、国民国家の枠組が社会学を規定していたのではないか」、あるいは、「社会学における社会概念は国民国家概念をはみ出るのであり、国民国家以下においても以上においても『社会（ルーマン）』や『共同体（パーソンズ）』の概念が有効ではないか」という論点。これは、「国家」と「社会」の関係に係わる議論である。第三に、「ディシプリンとしての社会学やエスタブリッシュメントとしての文化は存在しないのであろうか」、あるいは、「社会学はスキャンダラスであってもよいし、文化は雑音にしかすぎないのではないか」という論点。

以上のように、本ミニシンポジウムは、ディシプリンとしての社会学の特性や運命や方向について「おおきく」語るという特別の機会を実現したのであって、この上演によって少なくとも「ディシプリンの創造」が限られた時間と空間の中でなされたのではないかと考えられる〔なお、本ミニシンポジウムの詳細な内容は『ソシオロジ』138号（2000年5月刊行予定）に掲載される〕。

ミニシンポジウム 第3部会

臨床のことばと学(術)のことば

コーディネーター 大村英昭(関西学院大学) 宮原浩二郎(関西学院大学)

1. 臨床社会学の可能性 — 臨床のことばを通して —

京都芸術短期大学 藤沢 三佳

2. セルフヘルプグループと「当事者のことば」

千葉大学 長谷 正人

3. 隠蔽のことば — 不治の病の告知をめぐるコミュニケーション —

南山大学 阪本 俊生

4. 口述の語りと学のことば

日本女子大学 小林多寿子

5. 信仰の中のことば

大阪大学 川端 亮

6. 計量の「ことば」と社会現象

同志社大学 尾嶋 史章

7. 「警報伝達システム」から

奈良女子大学 野田 隆

8. 学校秩序と解釈コード

京都大学 稲垣 恭子

9. 行ったり来たり — 現場のことばと現場の関心 —

富山大学 中河 伸俊

10. 臨床社会学の可能性をめぐる

関西大学 架場 久和

ご覧の通り、私が主宰した第3部会は他の部会とはかなり趣が違っている。記念大会ということで、当初の研究活動委員会では、総合シンポジウムとは別種の、ちょっと風変りな試みがあってもいいのでは……という意見が多かったと記憶する。で、当方は、いわゆ

るフォーラムの形をとってラウンドテーブル・ディスカッションをしたいと申し入れた。報告者が順次発題し、それを討論者が受けてコメントし、併せてフロアーからの質問にも応えるといった通常の形式は、はなから考えてはいなかったわけである。会場設営の点でも開催校には特段のご配慮をいただき、むしろ、ややクローズドな内輪の議論で終始しようとも思った。第一、「臨床のことばと学（術）のことば」なんて、余りにしぼりこんだテーマの故に、大方の関心を魅こうとは予想だにできなかったのである。

ところが当方の見込み違い。ラウンドテーブルのまわりには大勢の方々がつめかけて下さり、廊下にまではみ出しておられる事態に急速パイプ椅子を搬入していただくような仕儀になった。“嬉しい悲鳴”と言えなくもないが、正直、これでは内輪の議論を煮つめるといふわけにはいかないなァ……、と思わざるを得なかった。結局、通例のシムポジウムより多人数の方々をお願いしていた発題は、いずれも寸足らずの、いわば尻切れトンボ。発題者各位はもとより、つめかけて下さった大勢のオブザーバーにも、何やらもの足りない印象を与えるだけに終わってしまった。

全体を欲ばった分、個々には、かえって薄い内容になったのは、ひとえに主宰者（大村）の読みの甘さのせいであったと反省している。では、もともと、このフォーラムに期待していたねらいは、どの辺りにあったのか。いや、こと更めて「臨床社会学」を標榜する理由は何であるのか。以下に、エクスキューズを兼ねて少しだけ説明しておきたい。

確か、このの始まりは記念大会に向け、その企画を研究活動委員会で議論していた折も折、私が、宮原浩二郎氏の好著『ことばの臨床社会学』を書評するよう依頼され、丁度、出稿した時と重なっていたからだと記憶する。第一回目の打合せ会をするに先立って、だから『ソシオロジ』 — 通巻一三四号 — 掲載ぶんの校正ゲラを、事前に発題予定者全員に配布しておいたようにも思う。もちろん宮原氏自身にも、あらかじめ事情を説明し、コーディネーターの一人として参画されるよう依頼したのだった。先立って開催された日本社会学会大会（於、関西学院大）に際し、テーマセッション「臨床社会学の構想」をお世話させてもらった経験が、ものをいっているのは言うまでもない。

いずれにしろ、問題意識は社会学理論の活性化というか、一般世間に対しても、いま少しはアピールできる社会学にならないものか……という点にある。もとより私一人の想いではなく、それは記念大会を前にした研究活動委員会全体の想いでもあったろう。

ただ、とくに私が問題にしたかったのは、今の社会学が、狭い仲間うちだけにしか通用

しない、それこそ“アカデミック”な概念用語の、いわば独り歩きのような状態に陥っているのではないか、ということだった。もっと言えば、生活現場に息づく感情エネルギーをうまく汲みあげることができない。ために数多く社会学の本が出版されているわりには人々にうったえる力をもたない、あるいは研究者自身ですら身につまされるようなところがない、という仕儀になっているのではあるまいか。

ならば、とりあえずは我々「学者・研究者」という「エスニック集団」のエスニック言語を吟味してみるという作業が必要だろう。とは言え、宮原さん流儀の「ことばの臨床社会学」は、誰にでもできるというわけのものではない。そこで私が考えたのは、医療や福祉の各現場で、専門家とクライアントとの間にとりかわされる会話、とりわけ「臨床のことばと学術のことば」との齟齬や使い分けなどに比定しながら、では社会学の現場を想定した場合に、我々は同じ問題にどう対応しようとしているのか……を吟味してみるやり方だった。

幸い、医療や福祉に限らず、各々の生活現場に直接向きあい、そこで何が起きているかを知ろうとする — 宮原氏が言う広い意味での臨床的 — 態度で社会学をする人々が近年はとみに増える傾向にある。ただし、一見の活況も、なにがしか共通した土俵にのってもらわないとイッシューごとに散逸して、それこそ社会学のアイデンティティ・クライシスを招きかねない。現に最近年、合衆国の「臨床社会学」はレビュー誌の滞りにみるとおり、どうやら社会学に固有のパースペクティブを見失い事実上の拡散状態に陥っているらしいのだ。

社会学の用語法という、翻訳問題をも含む、いはばメタ理論レベルを吟味することは、この — 学アイデンティティを確保する — 意味でも、まずは必須の作業だと私には思われたのである。

丁度、フォーラムを具体化しようとした矢先、千葉大（当時）の長谷正人氏からいただいた『報告書』に瞠目した。なんと学生諸君の調査実習として“セルフヘルプグループ”にアプローチされた成果であるらしい。しかも副題には「生きづらさの修辞学」とあるではないか。

早速拝読して、特に長谷さんが、自らの入院体験こそ、この調査実習を思い立つきっかけだった、と言われる点に大いに共鳴した。そうそう「臨床社会学」の第一の要諦は、とにかく己れ自身の生活実感を手放さないこと、しかもそれを冷徹に分析する精神のタフネ

スを保持し続けることだと私も思っていたからだ。「それまで病院の外側から想像している限り、入院患者が頼りとするのは、治療してくれる医者であり、こまごまとした世話をしてくれる看護婦であり、そして何よりも家族の心の支えだと常識的に私は思い込んでいた。……ところが実際に入院してみると、それは全く違っていったのだ。入院患者にとっては、何よりも他の入院患者たちが大事な心の支えになっていたのである」。

こう述べられる一つの気付きから、セルフヘルプグループに対する次のような所見にまでは、ほんの一步しかあるまい。「だからたとえ専門的援助者が、セルフヘルプグループから学んで社会福祉制度を当事者寄りのものに改革したとしても、なおそれとは関係なくセルフヘルプグループを当事者たちは必要とするだろうし、実際に存在し続けるだろうと私たちは考える。要するにそれは社会制度の改良や変革とは別の次元に存在する、いわば『個人的な生き方』や『関係の作り方』の問題を扱うのだ」と。おまけに、この所見には、福祉政策論一般とは違う臨床社会学の、存在理由すらが暗示されているようで興味がつきない。

さらに私は、中江桂子助手（当時）の手になる、この報告書の「おわりに」からも大切なヒントをもらったように思う。そこで挙げられていたケン・プラマーの『セクシュアルストーリーの時代』（新曜社）も併せ読んで、従来の“グランド・ストーリー”には回収されないライフポリティクスの出現と、それ故に個々のナラティブ（語り）がもつ意義も大いに高まっていることに気付かされたのだ、と言ってもいい。

野口裕二氏から教示されたナラティブ・セラピーのこととも併せ、それなら会員の小林多寿子さんにライフ・ヒストリー論の意義や、ナラティブ・アプローチそのものの難しさなどについて報告していただければよいと考えたのである。早い機会に長谷・小林のお二人と面談でき、各々「セルフヘルプグループと当事者のことば」、「口述の語りと学のことば」という風に一応の報告タイトルも決まった。

人々の“生きづらさ”に向きあうといえ、もちろん宗教集団を忘れることはできない。かつ、これまた宮原氏が言われた「アタマ言葉とカラダ言葉の往復運動」がもっとも深いところで問われるのも信仰現場であるに違いない。実際、私が既成仏教に対し警告し続けた「現場なき教義と教義なき現場との共依存」という診断は、要は「アタマ言葉とカラダ言葉の往復運動」が十全になされてこなかったことからくる病いに相違ないからである。

ここでも幸いなことに、隆盛の新宗教「真如苑」を、かなり長期間、調査研究し続けて

いる若手研究者が身近なところにおられた。川端亮氏と秋葉裕両氏にはかったところ“それなら僕が……”という感じで川端さんに「信仰の中のことば」問題を語ってもらうことにした。興味深いことに、この真如苑研究グループでは、いわゆる霊能者へのアンケート調査を集計しつつ、彼らの信仰の深まり具合を、特殊な使用言語の頻出回数を通して数量的に計測しようと試みているのである。宗教学会全体を見渡しても、この種の分析手法に依った調査研究はほとんど見られないだけに、書物として刊行される日を心待ちにしている仕事なのだが……。

それはさておき、数量調査といえば例のSSM調査に参加され、計量社会学の分野で目立った業績を挙げている若手研究者も会員のなかには少なからずおられる。所属階級の違いに応じて言葉づかひまでも違って来る点についてはB・バーンスタインのコード論やP・ブルデューのハビトゥス論によって、つとに注目されてきたが、SSM調査に参加された人たちの中にも、その国際比較データの再吟味を通して階層文化の世代を超えた継承性などを、同じく言葉づかひの面から考察しようとする向きもあると聞く。

で、若手研究者のリーダー格、尾嶋史章氏に相談したところ、それ以前の問題として、「階級文化」や「権威主義的パーソナリティ」といった概念と、それらを計測する尺度データとの関係性が、そもそも議論されるべきポイントであろうということになり、わずかの発題時間であったにもかかわらず、理論的な概念構成と「計量のことば」とのきわどい関係につき、さすがに示唆にとむ意見を述べていただいたのである。

もう一つ社会調査、とくに臨床社会学的センスによるものといえば、あの大地震を機に阪神間の各大学が今なお継続中の調査研究を、もちろん忘れるわけにはいかない。ただ、それら調査研究の全体は日本社会学会大会も含めシムポジウムや特別部会で再々とり上げられてきただけに、今回の記念大会では、ずっと以前から、より一般的な「災害の社会学」を構想し、近くその成果によって博士号を取得した野田隆氏に登壇してもらうことにした。「被災者」とは誰のことかに始まり、「警報」や「勧告」と現実の避難行動との関係にいたるまで、氏の業績中にも、現場のことばと学のことばとの微妙なズレが各所で問題にされていたからである。

以上、ここまではアメリカ合衆国で言われる常識的な「臨床社会学」の行き方からは、むしろ、やや意外に思われるような研究経歴の人たちに強いて、我が田に参入していただいた印象がある。標準的なハンドブックなどで見ると、かの地の臨床社会学で採りあげ

られる“現場”とは、要はデス・ロス・イルネスと何やら三題斬めいた辺りにあることは一応、私も了解しているつもりである。

そこで、この面からも会員を見渡し、自身の調査研究テーマとして「死の告知」問題にアプローチしつつ、併せて、例えばストラウス＝グレッサーの『死の覚識』（一九六五）へと至ったシカゴ学派の学説史的展開にも関心をもっておられるらしい藤沢三佳さんに、その辺の事情を説明していただくことにした。もとより、あとの点については、会長の宝月誠氏が、さすがに早くから検討されており、『社会学のあゆみ・パートⅡ』（有斐閣新書）所収の「シムボリック相互作用論」に、その成果の一端を見ることができるとはわかるのだが、藤沢さんには、できれば、ご自身の調査研究とも絡めて、やはりことばにこだわる形での発題を、と無理強いしたことになるだろうか……。

おまけに、はじめに触れた通りの当方の見込み違いから、折角用意された報告内容も、おそらく半分も言えない結果になり申し訳なく思っている。もうお一人、これまた“どっちつかず”の報告を無理強いしたなァと反省するのが阪本俊生氏に対してである。もともと隠蔽と暴露の、いわばせめぎ合いに強い関心をもっている人だから、その問題意識を現在の医療現場に関連づけて言って下されば、という程度のいい加減な注文に大いに困惑されたに違いない。にも拘わらず、ずばり「隠蔽のことば — 不治の病いの告知をめぐるコミュニケーション」と題して周到な用意を下さったのに……、またもや時間不足。おそらく、ご本人がもっとも不満だったろうと推察する。

ところで、直接の医療現場を離れても、〇〇症候群式に、レトリックないし病いのメタファーにのせて語られる問題事象は少なくない。と言うより、そういうレトリカルな表現を通して、人々が社会問題をどう認知し、どう構成していくのかを探ろうとする研究動向もある。そこで、まずは、そういったレトリカルな表現を含む「クレーム申し立て活動」こそ、そもそも社会問題の本質ではないかと主張する中河伸俊氏をお招きし、併せて「学級崩壊」などと、それこそレトリカルな表現を得て、いよいよ世間の耳目をそばだたせている教育現場の実情を、どなたかに報告していただこうと考えた。教育社会学の分野から、という私の問いかけに竹内洋氏は、まあこの際、関西社会学会の会員になってもらおう意味でもいいでしょうという感じで、稲垣恭子さんを推薦して下さったのである。「学校秩序と解釈コード」と題された、その報告は、今の学校や学級で生起している現象を正しく「語る」ことば、ないしコードを大人の側が持ちあわせていないだけのことではないか、と指摘されたもので、なるほど我々の期待にかなった内容だったように思う。

一方、「エスノメソドロジーの知見に学ぶ構築主義」を精力的に展開されてきた中河氏からは、(時間の都合もあって)現場のことばを構築すること、現場の関心を自らのものにする事とは別のことであり「両者を混同すべきではない」という我々としては、やや予想外の批判的見解が示された。最後、わずかの時間の討論を含めて、宮原浩二郎氏とも意見がかみ合わないままに終わったのが惜まれる。私個人の意見としては、では中河さんがされる調査研究は、そもそも誰に向けてなされているのか……、社会学界という小さなエスニックグループの中の、さらにマイナーな部分でしか通用しない「語り」ではないか、といった疑問をもつのだが、いずれにせよ今回のミニ・シンポには収まりきらない論点が提示された一幕ではあった。

さて、ここまで若干のすれ違いも含めて当日の報告内容を説明してきたつもりだが、これだけでは、なお「臨床社会学」を標榜する論理的必然性については大方の理解を得られるとは思えない。という以上に、私自身、先に日本社会学会大会時のテーマセッション「臨床社会学の構想」をコーディネートした経験から言っても、論者によって「臨床社会学」に寄せる想いがかなり違っていることを痛感せざるを得なかった。とりわけ、いわゆる福祉政策論一般に解消されかねない議論動向には警戒心を募らせるところがあった。

そこで、ここは一番、実践的ないし政策論的関心からは、むしろ縁遠いように見える理論家に、いわば締め発題をしてもらおうと考えた。それが架場久和氏による「臨床社会学の可能性をめぐる」である。第一報告の藤沢三佳さんに期待したのが臨床社会学の可能性であったとすれば、架場さんにはあくまで臨床社会学の可能性について語ってもらおうと計ったのだと言ってもいい。残念ながら、ここでも時間不足のため、ご本人から「なんやア……何にも言われへん」の悲鳴が出る始末だったが、それでも得意の映画論を持ち出してまで言わんとされたことは、まァ判るひとは判るレベルのものだったように私は思う。

つまり、氏が言わんとしたのは、真に“現場”ないし“事実”に肉薄することが臨床の名に値するとして、それは既成の概念装置の外部にはみ出してしまうような体験だろうというわけだ。当然ながら、それを既成の言葉や概念で「語る」ことは極めて難しい。だが映画やマンガ、あるいは作家の技法のなかに探れば、そういった「語り得ないもの」を語ろうとする工夫があったのではないか。いや、社会学の中にも、この意味での臨床性を隠しもつものがあるのではないか……というのが氏の意見である(らしい)。ならば、従来の

区分で言えば、むしろ実践的でないと看做される作品の中に、かえって「臨床社会学の可能性」があることになり、是非とも具体例を挙げてその辺りの事情を説明してほしかったのだが、まア、後日を期すということで今回のフォーラムは一応、閉幕せざるを得なかった。

なお、末筆ながら、以上の通り何とも“中途半端”に終わったフォーラムながら、それでも有斐閣から出版予定の『臨床社会学のすすめ』（野口裕二氏との共編）、及び、世界思想社から出版する『臨床社会学を学ぶ人のために』（こちらは宮原浩二郎氏との共編）の、いずれにも十分なたたき台になり、参加者の多くにも寄稿していただく刺激になったことは確かである。この意味で、フォーラム開催まで種々のご協力を賜った関係者各位に篤くお礼申しあげて筆を擱きたい。

「知の考現学」としての可能性

コーディネーター 高坂健次（関西学院大学）

「知の考現学」のことばは私の造語である。造語の由来と背景についてまずは述べておきたい。フーコーの著書に『知の考古学』というのがある。私にとっては難解以外のなにものでも書物だが、そこでは近代を呪縛しているもの（主体や社会）をみつめるという作業が行われているように思われる。しかもその仕方は根底的かつ根本的である。具体的に言えば、「いかなる中心にも特権を与えないような脱中心化を行う」ことにフーコーの仕事の神髄がある、と考えたい。

本シンポジウムでいう「知」には広い意味を含ませたい。たとえば、モースのいう「身体技法」のような、体が覚えている知識のようなものも含ませたい。また、ポランニーのいう「暗黙知」と「形式知」の双方を含ませたい。さらには、科学内部で使用される科学知（＝科学的知識）と人々（素人であれ、科学者であれ）が日常生活のなかで頼りにしている日常知（＝日常的知識）の双方を含ませる。さらには、知識の運営そのものに関する知識のようなものも含めたいと考えている。私の念頭にあるのは、文部省が出している新学習指導要領のようなものも含ませたいということだ。これは児童や生徒がどのような知識をどの年齢段階で学習すべきかを指定している。

このように、さまざまなタイプの知識を徹底的に相対化してみたいと考えた。しかし、フーコーが考古学にこだわったようなかたちで私たちは過去から現在にいたるまでの知の問題にとりあげるだけの余裕はない。すべては現在の社会のなかでの知識のあり方について焦点を合わしたい。知の「考古学」ではなく「考現学」としたのはそのためである。

「考現学」という言葉の方は、いうまでもなく今和次郎に負っている。彼は律儀に具体性を追い求め、どこまでも対象に忠実に記述ないし描写しようとしていた。もとはといえば、関東大震災のショックないしはその被害への共感から出発したと言われている。最近の路上観察学なる運動にもつながっている。知はしばしば目に見えるかたちでは存在していない。教科書や六法全書に書いてある知は、世の中の知の全体からすればほんの一部でしかない。私たちの議論はどこまでも観念的におわらずに具体的にもっていきかかった。この具体性とそこから見えない世界に切り込んで行こうとする姿勢こそは、今和次郎に学

ぶべきもうひとつの点であり、この点も報告者にあらかじめお願いしていた点である。

以下は、このシンポジウムを企画したときに作成した趣意書に大会当日お話した内容を [] で付記しつつここに掲げさせていただく。

現代日本社会における知のあり方を具体的に反省し、その運用を工夫することによって、社会を動かす可能性を探る。さしあたり、3つのサブ・テーマを取り上げる。

1 知と権力：日常生活人としての知識がそのまま専門職業人として知を形成していることが少なくない。社会学がそうした専門職業人（権力をもっている人）の知の日常性を暴露し、よりふさわしい知のあり方を提示できないか。[阪神大震災について私が研究した過程で感じたことだが、関西にはあのような強い地震はやってこないだろうというふうに権限をもった専門人（必ずしも地震の専門家ではない）自身が思い込んでいたふしがある。彼らの知識は権限をもっているがゆえに多大の影響力をもったし、もちうるということだ。]

2 現代社会を生きぬくための知：宮部みゆきが小説『火車』で指摘しているように、クレジットカードがこれほど世間に行き渡っているにもかかわらずその仕組みについては、誰も正規に教えられたことがない。現代社会を生き抜くための知識とは何か。市民的リテラシーに必要なものは何か。カリキュラム改編に向けて、社会学は積極的な提言ができないものか。

3 「関西」社会学の可能性：社会学が分析の対象とする知は階層や地域による偏りがある。東京一極集中は情報発信のメカニズムと発信される情報についてもあてはまる。「関西」に視点を据えた分析や社会学の可能性に目を向けることで、東京中心になっている現代日本社会の仕組みを変革するための展望ができないものか。[「日本文学の誠実ぶった贋物の道徳性、無思想性、大阪の地盤から戯作者的な反逆が行われる」と期待を込めた坂口安吾の構図に似たことが、社会学にも期待できないものか。]

これらのサブ・テーマのいずれかに強調点をおいていただく格好で好井裕明(広島国際学院大学)、矢谷慈国(追手門学院大学)、黒田勇(関西大学)の諸氏に問題提起をしていた

だくことをお願いした。討論者には、橋本満（大阪大学）、石田佐恵子（大阪市立大学）になっていただいた。（以下、発言内容の紹介は学会大会の「報告要旨」に掲載されたレジュメ、大会当日に配布された資料、ならびに口頭による発言から私がまとめたものである。文責はすべて私にある。）

まず、好井は「啓発する知」と「知の啓発」というタイトルの下に、普遍的な広がりのあるゲイスタディーズに焦点を合わせながら、社会学的知が啓発的意味をもつ（＝新しい知識をあたえて目を開かせる）ことについて述べた。

好井は社会学的知の考現学を次のような一連と問題だと考える。知が今、どのように立ち現れているのか。社会学的知を研究者がどのように生み出しつつあるのか。社会学的知と研究者の「暮らし」「ひととなり」とがどのような関係にあるのか、など。つまり、社会学的知を「常識的知識」や研究者の日常生活世界などとの関係を問うことが課題である。また、社会学が啓発する知であるためには「新たな知」を自らがもたないといけないが、そのときの「新しさ」はどこにあるか。ひとつは「驚き」のない啓発（＝すでにある不定型な知に「科学的」衣を与えること）、第二は「驚き」のある啓発（＝生活世界を整理するうえで、これまで想像したこともない「枠」としての地を呈示すること）、第三は、「驚き」に「喜び／不安」がともなう啓発（＝生活世界を整理するだけでなく、生活を具体的に変革し得る方法や指針なども受け取り得る何かを放散する知を呈示すること）である。むしろ、社会学的知が生活の中に最も深く浸透して啓発的知となりうるとすれば、この第三のタイプだろう。（少なくとも私はそう受け止めた。）

そうした意味で啓発的意味をもちえた実践例は社会学におけるゲイ・スタディーズである。それは「当事者たるゲイによって担われ、ゲイが自己について考え、よりよく生きること」に寄与すること、さらに異性の間の愛情にのみ価値を置き、それを至上のものとして同性愛者を差別する社会の意識と構造とを分析することによって、同性愛恐怖・嫌悪と闘っていくのに役立つ学問」である（キース・ヴィンセント、風間、河口）。

ゲイ・スタディーズは、同性愛嫌悪を告発するさいに、語る主体である「わたし」は「わたし」なりの「公・私」領域の再編が必要になる。すなわち、その研究でライフストーリーを語るという実践は、みずからの「ひととなり」「世界」をも「語る」こと、「語る」過程で、「かれら」の物語に囚われていた自分に気づき、「わたし」を癒し、「わたし」を揺さぶり、変革させようとする明確な意志をもった知の実践を意味する。研究者自身が当事者

であり、「カムアウト」を通してみずからがそれまでに抱いていた「常識的な前提」や「生活の処方知」を問い直す必要があるのである。

好井は言う。社会学的知の姿が「うつりかわる」ことと研究者自身の生の「うつりかわり」がどのように相互に影響しあうのか。またその影響「しあう」ありよう自体を、いかにして記述していくのか。そうした作業を構想、実践していくなかに、あらたな「知の啓発」が可能となるのではないかと。

矢谷は「生きていく原点に立ちかえって考え直すこと」というタイトルで報告した。あらゆる実態化を疑ってかかることを提唱する。学生には身体や物質の世界にまで立ち入って疑うことの大切さをゼミ活動のフィールドワークをとおして教え込もうとしている。このことは矢谷が当日配布した大部の資料を読めばわかる。矢谷ゼミでは、学生に「何も無い山の中で食うこと、寝ること、遊ぶこと、そして学ぶこと」を実践させている。また、社会学フィールドワークとして、「実習田と畑で作物を育てること、共に食うこと」を実践している。そうした活動をすることで[システムの]「全体」に対する自己責任の観念や必要性などを学習させようとのねらっている。

現代日本の子どもたちの、心、体、対人関係に起こっている病理現象、家庭内暴力、登校拒否、とじこもり、いじめ、薬物依存、TV ゲームやパソコンとはつきあえるが、生身の他者や自然とは関われなくなっていく現象、援助交際、摂食異常、自殺、殺人、アレルギー、アトピー症、などなどは、すべて同根だと矢谷は言おうとしているように思われる。管理されている教師や大人が偏差値管理教育に駆り立てるために、子どもは「二乗された管理」の下で、窒息しかかっていることの現れだととらえる。「生き物としてピチピチ生きられなくなって、悲鳴をあげている」のは、一体どうしてか。そうした状態から抜け出すためにはどうすればよいのであろうか。矢谷は、次の4点をあげて説明し、提案しようとした。

- 1) エコロジー的世界観とユニバーサル・プロジェクション
- 2) 資本主義的合理性とエコロジー的合理性
- 3) いのちとからだの教育
- 4) 食と農の教育

大会当日は必ずしも事前の打ち合わせとおりに論をはこばなかった。矢谷は統一テーマと自分の選びとったサブ・テーマとの関わりについて熟考したあげく、上にあげた論点

をずらして(自ら選んだタイトルの言葉に幾分ひきづられる格好で)、以下のような命題群を提示した。

- 1) 社会学は「知の考現学」であるべきであると共に、「知の考古学」でもあるべきだ。
- 2) 「原点に立ち帰って考え直すこと」は、19世紀と20世紀前半の「個別専門的実証科学」のもたらした「全体を忘れて、職業的に自立した、学問のための学問」という疎外形態に対して、自覚的になり、反省することである。
- 3) 関西社会学の可能性について・・蔵内数太の方法は、「自分の生きているローカル」という原点から出発して「グローバル」に開かれていく方法である。
- 4) 学問という専門分業をして、その対価をうけて生計を立てている「社会学者」あるいは「専門学者」から「自らの日常生活の中での具体的な生きざま」と自らの学問との間に論理的実践的倫理的首尾一貫性があるべきだ。
- 5) 社会学会のメンバー個人個人が自らの生業としての社会学という営為に対して、自らのトータルな生きざまに返って、Identityを確認する、学会仲間どうしとして確認しあうような開かれた、しかも一歩も二歩もつっこんだ、対話を回復せねばダメなのでなかろうか。

黒田は『『関西』言説の現在』というタイトルで報告した。テーマをまずは「関西にこだわる」、「東京メディアに文句をつける」という点にしぼっての報告と問題提起であった。実際にテレビ番組や広告などのフィルムを紹介しながらの報告は独特の説得力と多大の関心を惹いた。

「関西」についての言説は、たとえ一面的であったり、誇張されていたり、時にはまったくの虚偽であったとしても、メディアを通じて「拡大」再生産され、ますますその知の信憑性が高まり、常識として固定化される、と黒田は言う。しかも、多くは関西が描いたものではなく、東京のメディアが描いたものである。それに対して、「関西人」は苛立ちをおぼえるが、それは「われわれ」日本人に対して「かれら」としての存在する関西人という描かれ方への苛立ちである。もっとも、関西が描く自画像とても東京の描く関西像と全く異なっているとも言えない。

メディアに描かれる「関西」とはどのようなものか。一つは関西が舞台となる場合、もう一つは関西弁を操る関西人が登場する場合である。京都を舞台にした「サスペンスドラマ」と「アニメ」を中心に、そこで描かれている「関西」を探ってみると、そこには共通点が見えてくる。共通しているのは、日本社会の価値から逸脱を表現する場合に関西人が

登場する傾向である。また、東京の中心性を確保するための辺境として関西が用いられていることもある。

「サスペンスドラマ」での典型的な配置を見ると、関西弁を話すのは被害者と容疑者、そして端役的な登場人物である。それに対し、共通語（東京弁）を使うのが事件説明者、真犯人などの主役クラスの登場人物である。被害者は、真犯人に殺される「原因」をもった人間である場合が多く、視聴者の同一視の対象にはならない。こうして、東京弁・共通語＝「われわれ」と関西弁＝「彼ら」という図式が成立するのである。

他方、関西発の番組を見てみる。東京との対比をことさらに強調する。その結果、東京の造ったパターンを関西発の番組のなかで実演してしまうこともある。関西ローカルとしてテレビ史上最長寿ドラマである『部長刑事』に登場する人物の配役構造を例にとりあげる。そこには、関西というローカル・アイデンティティが投影されている。

結局、実態としての関西が存在するわけではない。関西は関西にとってもイマジナリー・スペースであり「東京ではないもの」としての関西しかないのではないだろうか。

コメンテーターの論点は多岐にわたったが、ごくかいつまんでしかも枝葉を落として要約すれば次のようになるだろう。橋本は、矢谷報告を「中心性」の問題としてとらえる。矢谷が自然、食らう、寝る、といった営みを強調することは近代システムの広がりや近代資本主義が作りだした危機に対する逆襲ととらえることができる。そうした運動は柳田民俗学や日本農本主義がやろうとしたことである。しかし、下手をすると近代への挑戦、近代の超克という、かつての帝国日本が陥った過ちに陥ることになりはしないか。

好井の言う「啓蒙」は、知の増殖を招き、いわば知の悪性腫瘍とならないであろうか。語るワタシは何か。ゲイ・スタディーズは果たしてそれほど面白いものなのか。社会学に知をつかさどる特別の地位を認めようとするのは、社会学帝国主義とのそしりを免れないのではないか。社会学的知はもっと控えめなもので、「目の前の科学上の問題だけが解決できる程度でよい」のではないか。カミングアウトしたものの解釈だけをスタンダードなものとしてしまうと、そうでないオカマはさらに生きにくい状況が生まれるのではないか。啓蒙の限界ということを問題設定に取り込んでほしい。

黒田の指摘するとおり、メディアが再現する関西は実際には異質な地域からなっているものの、東京に対する想像上の概念となっている。東京の暴力団が理論武装して右翼になっているなどという仮構性をみると、想像上の関西が仮構としての東京を強化しているよ

うに見える。ここには、二重の発明が行われている。黒田の議論は、文化の他者性の問題だと解釈したい。

石田は、まず全体について、ミニ・シンポジウムの3つのサブテーマと、それぞれの報告との対応関係が分かりにくいと述べた。シンポジウム全体の議論の焦点が拡散してしまったのではないかと述べた。企画者の意図によれば、3つのサブテーマが3つの報告にそれぞれ対応しているというわけではなく、力点を変えたかたちで展開されたものだという。報告がそれぞれ異なる位相 — 社会学的知と啓発（好井）、身体・経験と知（矢谷）、メディアの言説と日常的知（黒田） — で展開されたためか、たいへん刺激的で面白い全体テーマであるにもかかわらず、議論が分かりにくいものになってしまったことが残念だと指摘した。

個々の報告へのコメントとして述べた論点は、以下の通り。好井報告が前提とする「社会学的知」とはそもそも誰によって担われているのか。それは社会学者が特権的に所有するものなのか。また、特にゲイ・スタディーズについて「当事者性」からとりあげるとき、それはもっぱら「ゲイ」と「ゲイではない人々」との関係からの視点である。当事者たるゲイのなかにも多様性があり、その「代表性」はいったい誰が担うのか。誰が「啓発」し、誰がされるのか。矢谷報告は、打ち合わせの内容とは大きく変わり、シンポジウムの開かれている「いま・ここ」に根ざした議論となった。その姿勢には共感する。しかし、生のありようそのものの多様化をどう考えるのか。矢谷は「知の『全体』を知れ」と主張するが、その「全体」とはいったい何か。「生の全体」もまたフィクションではないのか。黒田の提示した「フィクションとしての関西」という分析結果については、全く賛成。しかし、メディア言説分析の意味について、もっと詳細な議論が必要ではないか。メディア言説の分析は、近年、メディア・リテラシー教育などで展開されている「現代社会を生き抜くための知」という発想とつながっていくが、このミニ・シンポジウムのサブテーマに関連して、もっとつっこんだ議論が欲しかった。

フロアからも質問やコメントが相次いだ。そのいくつかを記しておこう。

- ・ 「知」を広く解釈して問題を捉える姿勢はよいが、現代を生き抜く上での知識を問題にしようと言いながら、肝心の「生きる」という視点に関する議論が抜け落ちていたのでは。
- ・ 本来は社会学がいかにより良く生きるかを考えるものであるにもかかわらず、たとえば「予言の自己実現」に関する社会学的知との間には乖離がある。
- ・ 「自然」の体験という時の「自然」とは何か。逆に、社会的体験とは何か。日本の社会

学は日本のリアリティから遊離している。

- ・知識の中心性は主体と客体の間（＝関係性）の中にあるのではないか。
- ・「よりよく生きるための知」はいわば善意の強制力となる。そのことの二面性に着目する必要もあるのではないか。
- ・日本の中の他者である「関西」にこだわることによって、ナショナリズムにつながるものがありはしないか。

質疑応答がうまくかみ合ったかどうかは分からないが、規定の時間目一杯使ってなお議論が果てない感じの残る活発さはあった。最初に断ったように、「知の考現学」は私の造語である。古い連字符社会学風の分類だと、それは知識社会学に属する研究領域だろう。しかし、あえて知識社会学としての可能性と自己表現しなかったのにはむろん理由がある。それはかつての知識社会学では十分に見えていなかった世界に目を向けようとの提案であり、呼びかけであり、そのためのメッセージである。

マンハイムの知識社会学では、マルクスの問題意識（知識の社会的基盤）を継承しつつ「自由に浮動するインテリゲンチヤ」に期待が寄せられた。今は、問題はもう少し込み入っている。専門家と素人という区分がありうるとしても、それは現実の世界のなかで明確に分かれているわけではない。すなわち、専門家とはある特定の分野に限った専門家であって、森羅万象にわたっての専門家ではない（現代に生きる百科全書家の存在を否定するつもりはないとしても）。限定的専門家はしかしながらその専門性に根拠づけられた権限が付与されているのが通例である。しかもその権限の行使にあたっては、権限の根拠となった専門性を超越した知識を必要とするという矛盾をはらんでいる。専門性を超越した知識は、その人間にとってはただの日常的知識でしかない。ここに、専門家の日常的知識の性質（クオリティ）が問われなければならない理由がある。

三者の報告はそれぞれ社会学の専門家による報告ではあるが、むろん各人の日常的知識と無縁でもある。その意味で報告の内容はすべて自己言及的な性格をもっていた。もたざるをえなかったというべきかもしれない。しかし自己言及的とはいえ、その鎖を断ち切る視点もどこかで必要だろう。私たちは単に知的ゲームを楽しんでいるわけではないはずである。ましては、学問的（な装いをいくらまもっていたとしても）信仰告白の場ではないはずだ。鎖を断ち切る判断基準は何か。

「知の考現学」によって受け止めたかったのは、政策的な視点である。社会学的知が社会学者の「糊口を凌ぐ」だけの手段になっているというのは、どこかおかしくはないか。

また、大言壮語を語ることによって結局は人畜無害な（その意味では有害な）飼料として飼いならされているのも、どこかおかしくはないか。私がここでいう政策はさしづめ中範囲的なものを考えている。きわめて技術的な個々の施策からすればはるかに大きな指針となりうる理念の部分にかかわる政策レベルであり、「大きな物語」（を認めないわけではない）からすればはるかに小さな、だが確実な指針形成に役だちうるような政策レベルである。

フロアからは「商売としての知」という幾分自虐的・偽悪的で、どこかVB時代にマッチした言葉も飛び出たが、私自身は「知の考現学としての社会学の可能性」を、現代をよりよく生きることに関わることと捕らえたい。よりよく生きるということは、私の中では決して放縦な手続きのリベラリズムを意味しているわけではない。かといって、内に暖かくし外に対しては排除的なタイプのコミュニタリアンを意味しているわけではない。ポパーを文字で言えば、それは「よりよき社会を求めて」ということでここはとめおかざるをえない。「よりよき社会」の中身については別途論じる機会もあることだろう。

ミニ・シンポジウムは盛会であったといつてよいかと思う。多くのミニ・シンポジウムが同時並行で行われたにしては数十名の参加者はありがたかった。しかし、公平のために付け加えるならば、大変面白かったとおっしゃってくださったかたがおられた反面、報告の一部を念頭において「学会を馬鹿にしてもらっては困る」との酷評もいただいた。さらに、参加者の中には学部学生も参加していたが、偽悪的であれ「食うための社会学」という言説が飛び交ったことについてはずいぶんとショックを受けたようであったことも付記しておきたい。当初、出版の話もないではなかったが、現時点では思いとどまらざるをえなかった。それをあるいは予期されていたかもしれない報告者ならびに討論者にはお詫び申し上げます。当面は、各自がめいめいのメディアを通して「知の考現学」に関わる構想やアイデアや成果を独自に公表していただければと思う。

（文中、報告・討論・発言内容について、私の思わぬ誤解や見落としがないとは言えない。文責がすべて私にあることを再度強調し、読者にはそのようなものとしてお読みいただくとともに、関係者のご海容をお願いしたい。）

第26回～第50回大会の記録



第26回大会

1975年5月24日(土)、5月25日(日)

開催校 関西学院大学

第1日 5月24日(土)

◆開会の辞(13:30 ; 202室)

関西社会学会委員長 森 好夫

◆歓迎の辞

関西学院大学学長 久保芳和

◆シンポジウム(13:30~17:30 ; 202室)

テーマ「地域社会の変貌」

司会 余田博通・二宮哲雄

1. 農村の変貌—農民層分解と農村諸組織の展開

高野山大学 岩崎信彦

2. 漁村の変貌—三重県伊勢志摩地方の漁村を事例にして

愛知大学 牧野由朗

3. 大都市とその周辺における地域社会の変貌—名古屋市都域を事例として—

金城学院大学 高橋純平

討論者 金城学院大学 安藤慶一郎

大阪市立大学 大藪寿一

龍谷大学 口羽益生

名古屋大学 中田 実

京都府立大学 益田庄三

富山大学 間庭充幸

◆総 会(17:30~18:00 ; 202室)

◆懇親会(18:30~ ; 甲東園 椿荘)

第2日 5月25日(日) 午前9時30分

◆研究報告(9:30~12:30)

第1室(304室)理論

司会 江藤則義・高島昌二

1. 仕事の満足における技術要因の再検討

関西学院大学 石井 徹

2. アメリカにおけるマイノリティの概念規定をめぐる一考察

—とくに階級概念とのかかわりにおいて—

広島修道大学 青木秀男

3. トックヴィルにおけるアソシアシオンの概念

京都大学 富永茂樹

4. 初期パーソンズの主意主義と秩序問題

京都大学 溝部明男

5. ベクトル行動理論の試み

京都府立大学 園 直樹

6. 社会過程論の再検討

奈良女子大学 新 陸人

第2室(202室) 家族

司会 光川晴之・光吉利之

1. 合同家族(joint family)の解体と同族団の編成過程

—信州佐久地方本間村の近世文書を中心にして—

神戸大学 竹内隆夫

2. 姉家督の地域的分布

関西大学 前田 卓

3. 山村・漁村における姉家督

関西大学 奥村芳和

4. 港町における姉家督

関西大学 藤田道代

5. イタコの社会学的研究

大谷大学 佐藤久光

第3室(402室) 地域社会

司会 益田庄三・大薮寿一

1. 周辺社会と社会関係

関西学院大学 奥田憲昭

2. 現代都市域における地区人口の変容過程

滋賀文教短期大学 佐々木士郎

3. 工業特化都市における人口流動と生活構造—豊田市を事例として—

金城学院大学 高田弘子

4. 現代漁村社会学の課題

奈良女子大学 後藤和夫

名古屋大学 中田 実

第4室(403室)階級・階層

司会 野崎治男・杉之原寿一

1. イギリスにおける「新しい労働者階級」

京都大学 藤田栄史

2. 衆議院議員の社会的構成—役職者を中心として—

①当選回数と役職

京都大学 高沢淳夫

②役職者の経歴

関西大学 中道 実

③官僚出身議員

京都大学 鈴木洋昭

④団体所属

京都大学 橋本 満

⑤権力エリートとしての国会議員

京都大学 中 久郎

3. 19世紀ロシアにおける雑階級的インテリゲンツィヤの社会的性格

京都教育大学 村井研治

第5室(307室)老人・宗教

司会 上子武次・豊嶋覚城

1. 独居老人と近隣の関係

甲南大学 山中美由紀

2. ニュージーランドの独居老人と家族関係

甲南大学 塚本孝美

3. 尾張旭市の直系家族と老人

愛知県立大学 高津 等

4. 古代日本の宗教

関西大学 伏野 彰

5. 村落社会における家の宗教に関する調査研究—中間報告—

大谷大学 志水宏行

滋賀県立短期大学 武邑尚彦

龍谷大学 舟橋和夫

◆重点部会（13：30～17：00）

第1室（402室）

司会 池田義祐・口羽益生

テーマ「韓国の同族村落—慶尚南道内谷里の場合」

- | | | |
|-------------|--------|------|
| ①序説（スライド使用） | | 白井二尚 |
| ②封鎖制・開放性 | 広島大学 | 八木佐市 |
| ③生活の共同・分離 | 福岡教育大学 | 平田 順 |
| ④等質性・異質性 | 京都府立大学 | 益田庄三 |
| ⑤伝統性・変動性 | 広島大学 | 八木佐市 |
| ⑥即自性・対自性 | 奈良教育大学 | 小笠原真 |
| ⑦社会関係 | | 白井二尚 |

第2室（202室）

司会 作田啓一・新 睦人

テーマ「シンボル・意味・情報」

- | | | |
|--|--------|-------|
| ①情報空間への視座 | 東京大学 | 吉田民人 |
| ②シンボル・意味・解釈 | 大阪市立大学 | 船津 衛 |
| ③マクロ情報現象へのシンボル分析的アプローチ —H. D. ダンカンの『シンボルと社会』を中心に— | 関西学院大学 | 中野秀一郎 |
| ④パースペクティブと支配的シンボル | 京都大学 | 前田成文 |
| ⑤無意識とシンボル—構造主義的シンボル論— | 桃山学院大学 | 大野道邦 |

◆挨拶（17：00 202室）

関西学院大学 余田博通

◆閉会の辞

関西社会学会常任委員 堀 喜望

第27回大会

1976年5月29日(土)、5月30日(日)

開催校 追手門学院大学

第1日 5月29日(土)

◆開会の辞(9:30; 2階ⅢB-1室)

関西社会学会委員長 森 好夫

◆歓迎の辞

追手門学院大学文学部長 遠藤汪吉

◆研究報告(10:00~12:00)

第1室 (2階ⅢB-1室) 理論Ⅰ

司会 居安 正・新 睦人

1. A・グルドナー reflexive Sociology に関する一考察

大阪市立大学 深沢建次

2. ウェーバーの価値合理性概念をめぐって

京都大学 平 英美

3. 第一次所有関係と第二次所有関係 —〈私的所有〉の二形態—

東京大学 吉田民人

第2室 (2階ⅢB-2室) 理論Ⅱ

司会 豊嶋覚城・大野道邦

1. 「構造」概念の2つの系譜

京都大学 上野千鶴子

2. P.L.Berger の宗教社会学について

京都大学 飯田剛史

3. 講集団—そのインフォーマル機能の検討〈分析〉—

四天王寺女子短期大学 清水夏樹

4. デュルケムにおける国家の問題

関西学院大学 小関藤一郎

第3室 (2階III B—4室) 産業・労働

司会 野崎治男・西山美瑛子

1. ソ連邦労働者の生産管理参加

関西大学 長沢孝司

2. 専門職業化論と女性解放論の一接点

南山短期大学 天野正子

3. 経済社会システム —システム社会学の一般理論—

京都府立大学 園 直樹

◆昼食懇談会 (12:00~14:00 於 食堂)

会費 1,000 円

◆重点部会 (14:00~17:30)

第1室 (3階III C—1室)

テーマ「有賀社会学」

司会 川越淳二・後藤和夫

1. 有賀社会学における生活把握の方法

佛教大学 鳥越皓之

2. 有賀社会学における家と同族

岡山大学 米村昭二

3. 有賀社会学の理論構成と同族団研究の今後の課題

神戸大学 長谷川善計

第2室 (3階III C—1室)

テーマ「社会学理論の展開軸」

司会 橋本 真・中 久郎

1. フランクフルト学派の社会認識

大阪外国語大学 井上純一

2. 闘争理論と統合理論

神戸商科大学 大村英昭

3. 相互作用論のインパクト —逸脱行動論の動向—

大阪府立大学 宝月 誠

討論者：同志社大学 三沢謙一、 和歌山大学 橋本和幸、 大阪市立大学 大藪寿一

◆総会 (3階III C—1室) (17:30~18:00)

第2日 5月30日(日)

◆研究報告(10:00~13:00)

第1室(2階ⅢB-1室)理論Ⅲ

司会 間場寿一・高島昌二

1. 機能要件論の批判的検討

大阪市立大学 鯨坂 学

2. 逸脱行動論における規範概念の検討

京都大学 高原正興

3. パーソナリティ・システムモデルとグループ・システムモデルの
アーティキュレーションについて

関西大学 木村洋二

4. 社会体系分析の一局面 —W.Buckley の所論を中心に—

奈良女子大学 新 睦人

第2室(2階ⅢB-1室)家族

司会 光川晴之・本村 汎

1. 日本における非摘出の発生に関する一考察

大阪市立大学 善積京子

2. 大都市問題地域の家族 —尼崎市戸ノ内地区の事例—

甲南大学 平松道夫

3. 貧困の文化に関する一考察

—H.Rodman “Lower-class Families”(1971) をめぐって—

大阪市立大学 野口道彦

4. 京都府下老人の自殺

愛知県立大学 高津 等

第3室(2階ⅢB-3室)地域社会

司会 余田博通・牧野由朗

1. 「配偶者選択」と村落構造

大阪市立大学 西川美紀

2. 村落における家族変動 —大和郡山市若槻を事例として—

関西学院大学 曾我部信子

3. 村落と同族

関西学院大学 井上文夫

4. アメリカにおける郊外理論の検討

関西学院大学 奥田憲昭

◆挨拶（13:00 2階ⅢB—1室）

追手門学院大学学長 天野利武

◆閉会の辞

関西社会学会常任委員 堀 喜望

第28回大会

1977年5月21日（土）、5月22日（日）

開催校 大阪市立大学

第1日 5月21日（土）

◆開会の辞（9:00；2階 第2教室）

関西社会学会委員長 森 好夫

◆歓迎の辞

大阪市立大学文学部長 武田弘道

◆研究報告（9:30～12:00）

第1室（2階 第2教室）理論I

司会 橋本 真・浜口恵俊

1. 倫理と社会学 —社会科学における価値判断の問題を考えるために—

長崎大学 森田三郎

2. 動態機械的的行為 —行動理論と社会システムの研究—

園 直樹

3. 社会変動の理論的研究についての諸問題

関西大学 木村雅文

4. 社会システム論の一展開

奈良女子大学 新 睦人

第2室 (2階 第3教室) 理論II

司会 田中清助・小山陽一

1. マルクス社会理論の基礎視座

京都大学 栗岡幹英

2. マルクスの「自由時間」論

東京都立工科短期大学 大倉秀介

3. 「生活」の論理構造とゾチアルなもの

高野山大学 岩崎信彦

4. A・ゴルツの労働組合運動と社会主義革命の理論

立命館大学 清野正義

第3室 (2階 第4教室) 農民

司会 二宮哲雄・松本通晴

1. 小農民経営と農民層分解

関西学院大学 南 育広

2. フランスにおける離農 —とくに第2次大戦後—

愛知学院大学 山本力也

3. 北陸の山村における人口流出と挙家離村者の生活
—富山県婦負郡八尾町大長谷の場合を中心に—

富山大学 山口素光

4. 都市人口の増加と農民の生活破壊 —神戸市水道拡張工事と波豆むら—

関西学院大学 余田博通

第4室 (2階 第5教室) 社会心理

司会 高島昌二・三沢謙一

1. 集団構造のモデル —structural balance について—

九州工業大学 平松 闊

2. Vilfred Pareto の研究 —ファシズムと非合理—

春日井高校 山田隆夫

3. 攻撃性研究の課題

京都大学 高橋三郎

◆役員選挙（11:00～12:30 1号館2階、12:30から14:00田中会館）

◆昼食会（12:15～13:30 田中会館） 会費 1,500円

◆シンポジウム（13:30～17:00）（田中会館大会議場）

テーマ「社会学と社会問題」 司会 山本 登・雀部猛利

1. 社会問題の現局面

立命館大学 真田 是

2. 地域生活の破壊と再生

—過疎山村のコミュニティづくりをとおして—

名古屋大学 中田 実

3. 現代の貧困

佛教大学 浜岡政好

◆総会（17:00～17:30 田中会館大会議場）

第2日 5月22日（日）

◆研究報告（9:30～12:30）

第1室（2階 第2教室）理論Ⅲ

司会 佐藤嘉一・厚東洋輔

1. ウェーバーと相互作用派 —ウェーバーの政治論に関する一解釈—

京都大学 高橋由典

2. 理解社会学の新展開

京都大学 筒井清忠

3. マンハイム知識社会学における「意志」と認識

京都大学 千葉芳夫

4. アルフレッド・シュッツの生活世界論と新しい知識社会学の構想

追手門学院大学 矢谷慈国

第2室（2階 第3教室）家族

司会 上子武次・土田英雄

1. 古典荘園段階におけるドイツ保有農民家族についての一考察

関西学院大学 竹安栄子

2. 石垣島川平に於ける系譜集団と祭祀の関連と他界観について

岡山就実短期大学 田中真治

3. 対馬の性慣行と社会的背景 — 厳原町大字阿連部落の場合 —

福岡県社会保育短期大学 桧垣 巧

第3室（2階 第4教室）地域

司会 大藪寿一・高橋純平

1. 差別と社会統合のメカニズムに関する一考察

— 広島市「被爆者差別」をめぐる支配関係の分析を通して —

広島修道大学 青木秀男

2. 町内会・自治会の分析方法 — 京都近郊都市を事例として —

神戸女子短期大学 鯨坂 学

立命館大学 山本賢治

3. 四日市市民の住民意識

三重大学 久慈利武

4. 大阪市ドヤ街の老人問題

愛知県立大学 高津 等

第4室（2階 第5教室）組織・労働

司会 野崎治男・塩原 勉

1. 組織の意思決定の民主化 — F.Naschold の場合を中心に —

金城学院大学 碓井 崧

2. 経営官僚制と統治官僚制

近畿大学 齋藤美雄

3. 紡績女子従業員の定着意識の分析 — 数量化理論Ⅱ類を用いて —

関西学院大学 佐々木 薫

第5室(2階 第6教室) 逸脱

司会 中 久郎・宝月 誠

1. Alienation と Anomie

関西学院大学 木下博道

2. 逸脱規定に関する一考察

大阪市立大学 中道久堆

3. ウィッチクラフト告発についての一考察

京都大学 平野信博

◆挨拶(12:30; 2階 第2教室)

大阪市立大学 上子武次

◆閉会の辞

関西社会学会常任委員 余田博通

◆新旧合同委員会(13:00; 2階 第2会議室)

第29回大会

1978年6月3日(土)、6月4日(日)

開催校 佛教大学

第1日 6月3日(土)

◆開会の辞(13:00 4階 大講堂 401教室) 関西社会学会委員長 池田義祐

◆歓迎の辞 佛教大学学長 藤原了然

◆シンポジウム(13:30から17:00 4階 大講堂 401教室)

テーマ「現代社会と宗教」

司会 豊嶋覚城・佐々木光

1. 社会変動と宗教

金沢経済大学 鈴木宗憲

討論者 関西学院大学 小関藤一郎

2. 現代社会における信教の自由の問題 —J・ロックの寛容論を手がかりとして—

奈良女子大学 井上公正

討論者 大阪外国語大学 井上純一

3. 現代社会における宗教の機能

大谷大学 高橋憲昭
討論者 岐阜市立女子短期大学 戸谷 修

◆総会（17：00～17：30 4階 大講堂 401教室）

◆懇親会（17：30～19：00 図書館2階 小講堂）

第2日 6月4日（日）

◆研究報告（10：00～12：00）

第1室（3階 301教室）理論Ⅰ

司会 居安 正・三沢謙一

1. M・ウェーバーにおける理解社会学と解釈学

大阪大学 片 茂

2. 意味と主体性—なぜ今、理解社会学か—

大阪大学 浜日出夫

3. ファシズムに至る病い

京都府立大学 鈴木正仁

第2室（3階 302教室）理論Ⅱ

司会 小関藤一郎・作田啓一

1. フランス社会学における“社会的事実”—デュルケムからレヴィ=ストロースへ—

京都大学 安野早己

2. 制裁の外在性 —Durkheim と labeling theory—

関西学院大学 柳原佳子

3. デュルケムの道徳理論

夙川学院高校 寺林 脩

第3室（2階 201教室）地域Ⅰ

司会 益田庄三・二宮哲雄

1. 同和地区の問題点について —実態調査を通して—

龍谷大学 横山勝英

2. 消費コミュニティ

近畿大学 河村雷雨

3. 対馬の本戸の寄留

福岡社会保育短期大学 桧垣 巧

第4室 (2階 202教室) 宗教I

司会 川崎恵璋・宮城 宏

1. 宗教と多元的リアリティ

京都大学 飯田剛史

2. 真宗福祉活動の構造 —社会的行為を視点として—

真宗教学研究 林 弘幹

3. 宗教的セクトのエートス —都市中間層の苦難の弁明論—

和歌山大学 池田 昭

第5室 (2階 203教室) 社会変動

司会 橋本 真・徳永 恂

1. 社会変動論の現代的課題について

関西大学 木村雅文

2. 「日常」と「世界」の選択的親和性をめぐって
—「社会変革の担い手」を中心に据えて—

京都大学 伊藤公雄

3. <起承転結>集合の反復と変動—4項目型思想の研究—

大阪産業大学 園 直樹

◆研究報告 (13:30~16:00)

第1室 (3階 301教室) 理論III

司会 森 好夫・新 睦人

1. AGIL図式作成の意味構造

関西学院大学 藤原英男

2. ホマンズと方法論的個人主義

—Behavioral Sociology の方法論的視座について—

大阪市立大学 荒川茂則

3. 社会学における還元主義の復権のために

三重大学 久慈利武

4. 階層化過程の諸メカニズムについて

広島大学 安田三郎

第2室 (3階 302教室) 地域II

司会 後藤和夫・松本通晴

1. 地域社会学への計量的手法の導入の試み —村落構造の崩壊と住民ニーズの分裂—

佛教大学 満田久義

2. 漁業生産構造の変化と村落の変容 (共同報告)

i 問題の所在

愛知大学 牧野由朗

ii 釣網漁村=浜島の事例

愛知大学 渡辺 正

iii 真珠養殖村=立神の事例

愛知大学 交野正芳

第3室 (2階 201教室) 組織・労働

司会 塩原 勉・遠藤惣一

1. 産業民主制と労働者統制

京都大学 沢田善太郎

2. 労働過程の変化と技術者問題

大阪大学 松戸武彦

3. 日本的意思決定としての稟議制

金城学院大学 碓井 崧

第4室 (2階 202教室) 社会心理

司会 浜口恵俊・船津 衛

1. 社会学における社会化の諸問題

京都大学 細辻恵子

2. 対人関係と社会化

神戸女学院大学 磯部卓三

3. 東南アフリカの一王権儀礼にみるシンボリズム

京都大学 筒井幸子

第5室 (2階 203教室) 宗教II

司会 安藤慶一郎・前田 卓

湖西農村における村落構造と宗教 —中間報告— (共同報告)

i 概況

龍谷大学 舟橋和夫

ii 三重生の場合

同上

iii 上寺の場合

常盤女子高校 足利誠憲

iv 島の場合

滋賀県立女子短大 武邑尚彦

v 横江の場合

大谷大学 志水宏行

◆挨拶 (16:00 4階 大講堂 401教室)

佛教大学社会学研究所 山岡栄市

◆閉会の辞

関西社会学会常任委員 阪井敏郎

第30回大会

1979年6月2日(土)、6月3日(日)

開催校 富山大学

第1日 6月2日(土)

◆開会の辞 (9:30 2階4教室)

関西社会学会委員長 池田義祐

◆歓迎の辞

富山大学学長 林 勝次

◆研究報告 (10:00~12:00)

第1室 理論Ⅰ（2階 201教室）

司会 浜口恵俊・小関三平

1. 百貨店の記号学

平安女学院短期大学 上野千鶴子

2. 笑いのメカニズム

関西大学 木村洋二

3. 大学属性別にみた女子学生の『女性度』の比較検討

三重大学 久慈利武

第2室 理論Ⅱ（2階 9教室）

司会 居安 正・越井郁朗

1. M. ウェーバーにおける中国官僚制論

京都大学 指方秀雄

2. 伝統的社会における家産官僚制とその分権化傾向

—プッリウンデ封建制とレーエン封建制の性格をめぐって—

関西学院大学 春日雅司

3. G. H. ミードの「自我論」—その内的論理構造の検討—

大阪市立大学 平川 茂

第3室 理論Ⅲ（2階 219教室）

司会 三沢謙一・山口節郎

1. 社会的関係による規定性と物象化

京都大学 田中 滋

2. マルクスにおける市民社会と政治的国家

立命館大学 竹内真澄

3. ユートピア論の問題点と課題

京都大学 三上剛史

第4室 地域Ⅰ（2階 218教室）

司会 新 睦人・高橋純平

1. 都市的生活様式とエートス

立命館大学 山本賢治

2. R.D.McKenzie の人間生態学

常盤会短期大学 奥田憲昭

3. 西ドイツにおける都市社会学研究の最近の動向
—とくに社会計画論との関連において—

関西大学 神谷国弘

第5室 地域Ⅱ (3階 336教室)

司会 余田博通・安藤慶一郎

1. 都市近郊農村における村落生活の変化と部落自治組織

愛知学院大学 黒柳晴夫

2. 伝統的価値態度について

—長崎県上県郡上県町大字伊奈における意識調査の結果から—

福岡県立社会保育短期大学 桧垣 巧

3. 兼業化と地域社会の変化(1)(2) —長野県佐久市常和の事例—

神戸大学 北原 淳

” 藤井 勝

第6室 社会問題 (3階335教室)

司会 山本 登・雀部猛利

1. 炭鉱離職者の社会的移動

佛教大学 高橋伸一

2. 5年後の変化からみた独居老人と老親子関係 (兵庫県西宮市の場合)

甲南大学 塚本孝美

3. 和歌山県下の同和地区住民意識

龍谷大学 中垣昌美 横山勝英

◆シンポジウム (13:00~17:00 2階4教室)

テーマ「産業化に伴う地域社会の変容」

司会 杉之原寿一・二宮哲雄

1. 山村

富山大学 山口素光

討論者 桃山学院大学 鳥越皓之

2. 農村

和歌山大学 橋本和幸

討論者 愛媛大学 横飛信昭

3. 都市

関西学院大学 倉田和四生
討論者 愛知県立大学 四方寿雄

◆総会（17：00～17：30 2階4教室）

◆懇親会（17：30～19：00 2階201教室）

第2日 6月3日（日）

◆研究報告（9：30～12：30）

第1室 共同報告Ⅰ（2階201室）戦友会の社会学的研究

—アンケートによる実態調査・中間報告—

司会 阪井敏郎・間場寿一

1. 戦友会研究の意義と方法

京都大学 高橋三郎

2. 社会集団としての戦友会

① 戦友会の諸類型

” 伊藤公雄

② 日本人にとっての「戦友」

” 高橋由典

③ 戦友会における慰霊

京都大学 溝部明男

3. 戦後日本における戦友会

① 戦後「現実」と戦友会

” 架場久和

② 戦友会とヤスクニ

龍谷大学 新田光子

③ 戦友会の社会的機能

甲南女子大学 橋本 満

第2室 共同報告Ⅱ（2階9教室）鳥取県夏泊の調査報告

司会 益田庄三・牧野由朗

1. はじめに一昭和36年調査との比較において—

京都大学 平 英美・柳川洋一

2. 夏泊の産業構造

” 沢田善太郎

3. 夏泊の階層構造と権力構造

佛教大学 満田久義・豊福陽一

京都大学 蘭 信三・小川賢治

4. 夏泊における親族関係

” 西川和美

5. 夏泊の講集団

” 細辻恵子

6. 宗教的制度・活動と意識

” 中河伸俊

7. 夏泊子弟の進路選択

” 三上剛史

8. まとめ

” 平 英美

第3室 学説史研究（2階219教室）

司会 佐々木光・大村英昭

1. デュルケームにおける哲学と社会学

京都大学 中島道男

2. デュルケーム研究の新方向—「学派」を分析単位として—

デューク大学（米） 柏岡富英

3. デュルケーム社会学における「社会的なもの」の諸相

京都大学 芦田徹郎

4. デュルケームについての一考察

関西学院大学 小関藤一郎

第4室 組織（2階218教室）

司会 梅沢 正・加藤昭二

1. 社会変動の過程における政治の役割について

関西大学 木村雅文

2. 最近の日本産業組織研究において用いられている

理論的枠組の評価と新しいアプローチの試み

関西学院大学 ジロラモ・アバーテ

3. 組織目標に関する若干のパラダイムについて

金城学院大学 碓井 崧

4. 組織の国際比較の新展開—組織社会学のフロント—

関西学院大学 萬成 博

第5室 逸脱（3階336教室）

司会 仲村祥一・坪内良博

1. 逸脱行動論からみた精神病

大阪大学 鮎川 潤

2. 逸脱の意味連関

関西学院大学 柳原佳子

3. 『自殺論』批判—方法論的問題の提起—

” 木下博道

4. 離婚原因の実証的研究

愛知県立大学 四方寿雄

第31回大会

1980年6月7日（土）、6月8日（日）

開催校 大谷大学

第1日 6月7日（土）

◆受付開始（9：00）

◆開会の辞（9：20 2101教室）

関西社会学会委員長 池田義祐

◆研究報告（9：30～11：30）

第1室 理論（2101教室）

司会 井上 俊・山口節郎

1. 役割理論への現象学的方法の導入をめぐる

京都大学 栗岡幹英

2. 私化現象と多元的現実

大阪市立大学 片桐雅隆

3. 起承転結 —四段階の思考、思想、行動の一般記号として—

園 直樹

第2室 女性・職業（2201教室）

司会 上子武次・中野秀一郎

1. 主婦の自己実現にかかわる生活構造諸要素の分析

—都市家族における主婦類型別の実証的分析—

京都大学 神原文子

2. 女子学生の性別役割態度と家族における態度形成要因

大阪成蹊女子短期大学 服部範子

3. 最近の大学教授市場の一考察 —社会学関係の教授の補充からみたばあい—

佛教大学 星 明

第3室 組織（2202教室）

司会 碓井 崧・高橋三郎

1. 組織の存立とパワー

大阪大学 君塚大学

2. 集団の全体性を表現する「人的象徴」

関西学院大学 井上文夫

3. 組織構造の中範囲理論

京都大学 沢田善太郎

第4室 地域Ⅰ（2302教室）

司会 松本通晴・前田成文

1. 社会関係・社会集団と圏域 —鈴木栄太郎の圏域論をめぐって—

立命館大学 美留町利朗

2. 村落社会の自律性—部落会と「むら」規範—

関西学院大学 南 育広

3. ジャワ農村家族における子どもの社会化

愛知学院大学 黒柳晴夫

第5室 宗教Ⅰ（共同報告）（2301教室）

司会 池田 昭・前田 卓

定着期新宗教の一考察 —「大本」京都本苑四支部の事例—

1. 対象と調査の概略

京都大学 飯田剛史

2. 成員の社会的属性と集団特性

” 芦田徹郎

3. 入信過程と信仰実践

” 安野早己

4. 宗教意識と日常性

” 飯田剛史

◆学会委員選出投票（11：00～14：00）

◆歓迎の辞（12：30 2301教室）

大谷大学学長 広瀬 晃

◆シンポジウム（12：40～17：00 2301教室）

テーマ「産業化に伴う家族の病理と福祉的対応—国際比較の観点から—」

司会 増田光吉・光吉利之

1. 資本主義社会——日本の場合

関西大学 徳岡秀雄

討論者 大阪女子大学 阪井敏郎

2. 資本主義社会——アメリカの場合

大阪市立大学 木村 汎

討論者 愛知県立大学 四方寿雄

3. 社会主義社会——ソ連の場合

京都教育大学 村井研治

討論者 大阪教育大学 沢田軍治郎

4. 発展途上社会——インドネシア（ジャワ）の場合

岐阜市立女子短期大学 戸谷 修

討論者 龍谷大学 口羽益生

◆総会（17:00～17:30 2301教室）

◆懇親会（18:00～20:00） 於 ホリディ・イン・京都

第2日 6月8日（日）

◆研究報告（9:30～12:30）

第1室 階級・社会意識・支配（2101教室）

司会 高島昌二・岩崎信彦

1. 欲求をめぐる社会意識理論について

京都大学 大杉 至

2. 階級意識の構成要素

” 小川賢治

3. 階級理論の新展開—アンソニー・ギデンスの理論を中心に—

大阪大学 宮本孝二

4. 家産制的支配の構造—その本質とダイナミズム—

関西学院大学 春日雅司

第2室 統合・逸脱（2201教室）

司会 小関藤一郎・宝月 誠

1. 逸脱行動の統制理論をめぐる

京都大学 中河伸俊

2. 文化精神医学における異常

平安女学院短期大学 上野千鶴子

3. コンフリクトとアンビヴァランス

大阪大学 大村英昭

4. デュルケムの社会統合モデルの再構成

奈良女子大学 新 睦人

第3室 政治（2202教室）

司会 間場寿一・居安 正

1. N.プランツァスの構造主義的政治社会学について

立命館大学 久保和洋

2. 社会変動の政治社会学的分析について

関西大学 木村雅文

3. 近代日本における Civil-Military Relations

中京大学 筒井清忠

4. 日本国憲法前文と第九条との総合社会学的分析

京都産業大学 大谷孝太郎

第4室 宗教Ⅱ（2302教室）

司会 川崎恵瑋・宮城 宏

1. 超越存在の人間学

大阪大学 森下伸也

2. ネパールにおけるシャーマンの社会的役割

種智院大学 佐藤久光

3. 日本的「愛」の特性

福岡県社会保育短期大学 桧垣 巧

4. 東・西本願寺比較史試論 ―近代教団改革運動からみて―

金沢経済大学 鈴木宗憲

第5室 地域Ⅱ（共同報告）（2301教室）

司会 後藤和夫・余田博通

富山県氷見市の一漁村の調査報告

1. 調査の方法と概観

京都大学 平 英美

2. 産業構造の史的展開

” 指方秀雄 沢田善太郎

3. 階層構造と権力構造

” 三上剛史 蘭 信三

◆挨拶（2101教室）

大谷大学 高橋憲昭

◆閉会の辞（ ” ）

甲南大学 増田光吉

第32回大会

1981年5月30日(土)、5月31日(日)

開催校 甲南女子大学

第1日 5月30日(土)

◆受付開始(9:30)

◆開会の辞(9:50 545教室)

関西社会学会委員長 池田義祐

◆研究報告(10:00~12:00)

第1室 理論Ⅰ(522教室)

司会 筆谷 稔・新 睦人

1. オニールの「野生の社会学」と社会的現実

佛教大学 上田 裕

2. ジンメルにおける闘争モデル再考

京都大学 神原文子

3. 代理 —形式社会学的試論—

関西学院大学 安田三郎

第2室 理論Ⅱ(523教室)

司会 高島昌二・池田 昭

1. マックス・ウェーバーの近代社会論における「職業義務の観念」概念の位置について

大阪市立大学 田村雅夫

2. マックス・ウェーバーの政治思想

名古屋大学 津村 修

3. 聖一俗の弁証法とウェーバーの政治論

京都大学 小松秀雄

第3室 都市(542教室)

司会 四方寿雄・倉田和四生

1. 大都市と少年非行 —大阪都市圏の場合—

常磐会短期大学 奥田憲昭

2. ドヤ街研究の基礎視角について —大阪・釜ヶ崎を事例として—

広島修道大学 青木秀男

3. 筑豊地方の生活保護の実態

—高保護率の背景と「慢性的」失業社会が抱える諸問題—

高野山大学 桧垣 巧

第4室 村落Ⅰ（543教室）

司会 古屋野正伍・戸谷 修

1. 「村落共同体論」再考 —村落社会研究の視座をもとめて—

京都大学 蘭 信三

2. 中国共同体論の研究 —清水盛光の所論をめぐって—

大阪大学 蜂谷庸子

3. タイ農村社会の構造と変動 —同姓集団の考察を中心として—

神戸大学 北原 淳

第5室 調査（544教室）

司会 西田春彦・増田光吉

1. 青年の価値観についての考察

佛教大学 伊藤一雄

2. 対人関係分析への一視角 —「利用と満足」アプローチの適用可能性—

東京大学 高木英至

3. 世論研究における「理論」と「調査」の統合の試み

—L.Guttman の研究動向をめぐって—

関西学院大学 真鍋一史

第6室 家族（541教室）

司会 杉之原寿一・土田英雄

1. 家族と社会的ネットワーク —最近におけるポット理論の研究—

甲南大学 平松道夫

2. 地域と老人福祉

甲南大学 山中美由紀

3. パートタイマーの職業移動

佛教大学 高橋伸一

◆歓迎の辞（13：00 545教室）

甲南女子大学学長 鯨坂二夫

◆テーマ部会（13：15～17：00）

文学の社会学（541教室）

司会 作田啓一・塩原 勉

1. 憂鬱の解剖 —《世紀病》の社会心理—

京都大学 富永茂樹

討論者 大阪大学 徳永 恂

2. スノビズム —対象なき欲望—

京都産業大学 織田年和

討論者 関西学院大学 加藤春恵子

3. 悪夢の選択 —コンラッド『闇の奥』について—

大阪大学 井上 俊

討論者 京都大学 亀山佳明

都市の社会学（545教室）

司会 大藪寿一・中 久郎

1. 都市と人間 —家族生活と人間形成をめぐる諸問題—

甲南大学 松尾恒子

討論者 大阪女子大学 仲村祥一

2. 都市と労働 —出かせぎ者の就労生活の状況—

金沢大学 八木 正

討論者 関西学院大学 遠藤惣一

3. 都市と環境 —居住環境とコミュニティ形成—

甲南大学 高橋純平

討論者 関西大学 神谷国弘

◆総会（17：00～17：30 545教室）

◆懇親会（17：30～19：00） 於 学内第一学生会館

第2日 5月31日(日)

◆研究報告(10:00~12:00)

第1室 理論Ⅲ(522教室)

司会 橋本 真・清野正義

1. パーソンズ理論における「価値」について

大阪市立大学 中西吉則

2. Simon-Homans モデル再考

大阪大学 白倉幸男

3. 詩学及び範疇表による起承転結 —四段世界思想の研究—

園 直樹

第2室 理論Ⅳ(523教室)

司会 三沢謙一・山口節郎

1. 言語学上の意味論による1953年のパーソンズのシンボルの概念を
サインの概念から区別する試み

関西学院大学 藤原英男

2. E・ゴフマン、role distance についての一考察

広島修道大学 深沢建次

3. 多角的リアリティ論再考 —A. Schutz の問題提起とその身体論的再定式化の試み—

追手門学院大学 矢谷慈国

第3室 村落Ⅱ(542教室)

司会 安藤慶一郎・横飛信昭

1. 奈良盆地の村落における宗教構造

龍谷大学 西光義秀

2. 電源開発に伴うむらの変容とむらの自治 —福井県大飯郡大飯町大島地区の事例—

佛教大学 豊福陽一

3. 山村地域の社会構造 —トヨタ自動車産業と山村社会—

名古屋大学 宮本益治

” 米田頼司

4. 農業集落の主成分分析

九州工業大学 平松 闊

第4室 共同報告Ⅰ(543教室)

司会 川崎恵瑋・二宮哲雄

滋賀県中部広域市町村圏の社会学的研究

1. 調査のねらい

佛教大学 山岡栄市

2. 対象地域のプロフィール ―圏域設定の論理と課題―

” 満田久義

3. 調査結果の分析 ―広域市町村圏における住民生活―

” 浜岡政好

4. 地方都市の政治構造 ―滋賀県八日市市の場合―

” 筆谷 稔

5. 宗教意識

” 藤山照英

6. 総括

” 山岡栄市

第5室 組織(544教室)

司会 仲村祥一・居安 正

1. 選挙協力における政党と労働組合の組織連関分析

―〈滋賀方式〉の政治的効果を中心に―

佛教大学 大橋松行

2. 組織体における関の機能について

” 星 明

3. 大企業における昇進と学歴 ―学歴社会虚像論批判―

関西大学 竹内 洋

4. 組織目標の動態分析 ―農業協同組合の組織目標の事例を中心に―

金城学院大学 碓井 崧

第6室 共同報告Ⅱ（541教室）

司会 北川隆吉・間場寿一

戦友会の社会学的考察

1. 第二次戦友会研究の視点

甲南女子大学 橋本 満

2. 戦友会へのトリップ

新潟大学 溝部明男

3. 「戦友講」の慰霊

京都大学 新田光子

4. 死の意味づけの変遷 ―戦記物の分析を手がかりにして―

京都大学 高橋三郎

5. 戦友会を作る人々

” 伊藤公雄

6. 戦友会を拒否する人々

広島女子大学 高橋由典

7. 現代日本の中の戦友会

甲南女子大学 橋本 満

◆挨拶 (545教室)

甲南女子大学 堀 喜望

◆閉会の辞 (”)

関西社会学会常任委員 作田啓一

第33回大会

1982年5月29日(土)、5月30日(日)

開催校 愛知大学

第1日 5月29日(土)

◆受付開始(12:00)

◆開会の辞(12:40 記念会館3階小講堂)

関西社会学会委員長 池田義祐

◆歓迎の辞(12:45 ”)

愛知大学学長 久曾神昇

◆シンポジウム（13:00～17:00 記念会館3階小講堂）

テーマ「産業と地域社会」

司会 後藤和夫・松本通晴

1. 渥美の農業と地域社会

愛知大学 牧野由朗

2. 陶磁器産業と瀬戸市

名古屋工業大学 谷口 茂

3. 自動車産業と地域社会

立命館大学 小山陽一

4. 産業構造・自治体・コミュニティ

名古屋大学 中田 実

討論者 関西学院大学 倉田和四生

明治大学 長谷川昭彦

神戸大学 長谷川善計

◆総会（17:00～17:30 記念会館3階小講堂）

◆懇親会（18:00～20:00 於 学外）

第2日 5月30日（日）

◆研究報告 午前の部（10:00～12:30）

第1室 理論I（222教室）

司会 塩原 勉・中野秀一郎

1. 社会構造モデルの諸問題 一分節リニジ体系論から

京都大学 栗本英世

2. 集団論の再構成をめざして 一序論的考察一

” 神原文子

3. トルーマンの1951年の心理モデル

関西学院大学 藤原英男

4. 社会的行為理論についての一考察

—T・パーソンズ『社会的行為の構造』を巡って—

京都大学 山下雅之

第2室 都市（223教室）

司会 高橋純平・八木 正

1. 寄せ場労働者の意味世界：予備考察 ー大阪・釜ヶ崎の場合ー

大阪市立大学 平川 茂

2. 寄せ場労働者のサブカルチャー：予備考察 ー大阪・釜ヶ崎の場合ー

広島修道大学 青木秀男

3. 都市の形態論から表象論へ ーフランス都市社会学の展開ー

大阪大学 小林多寿子

4. アーバニズムと都市化 ー途上社会への適用をめぐるー

兵庫教育大学 古屋野正伍

第3室 家族・女性・病理（225教室）

司会 増田光吉・宮城 宏

1. 女性の労働市場進出と意識の変化

(株)大広 大橋照枝

2. 暴走行動と性格特性との関係に関する研究

大阪市立大学 森田洋司

3. 離婚原因の社会・文化的背景

愛知県立大学 四方寿雄

第4室 共同報告Ⅰ（226教室）

司会 余田光吉・口羽益生

「豊川用水の開通と渥美農業・農村の展開」

1. 渥美農業・農村の概況と問題の所在

愛知大学 牧野由朗

2. 豊川用水の開通と露地栽培農業の展開

慶応義塾大学 坂井達朗

3. 施設園芸農業と村落の変容

愛知大学 渡辺 正

4. 農業構造改善と複合農業経営の展開

愛知大学 交野正芳

5. 企業進出にともなう複合農業の変容

愛知学院大学 黒柳晴夫

第5室 意識調査・数理分析(227教室)

司会 間場寿一・坪内良博

1. 医師の職業生活意識 一病院医師の仕事の満足度について一

夙川学院短期大学 小野能文

2. 因子分析法より見た女子大学生の意識構造

梅花女子大学 井上文夫

3. Simon-Homans モデルと Blalock の安定条件について

大阪大学 白倉幸男

4. 農業集落カードの分析

大阪大学 西田春彦

九州工業大学 平松 闊

◆研究報告 午後の部(13:30~16:00)

第1室 理論II(222教室)

司会 橋本 真・丸木恵祐

1. G・ジンメルにおける Soziologie と「第三王国」論

大阪大学 友田篤生

2. マックス・ウェーバーの民主主義論の再検討

—モムゼン『マックス・ウェーバーとドイツ政治 1890~1920』をめぐって—

大阪大学 北野雄士

3. G・H・ミードとE・ゴッフマンの比較研究

名古屋大学 黒田由彦

4. 身体社会学についての構想

佛教大学 上田 裕

第2室 地域(223教室)

司会 鈴木宗憲・土田英雄

1. 多治見窯業の展開と地域

名古屋大学 小木曾洋司

2. 地方改良運動の諸相

関西学院大学 南 育広

3. 農山村社会の変貌と生活環境の改善 —香川県三豊郡大野原町の事例—

香川大学 渡辺安男

4. 対馬の村民意識 —その守旧意識弛緩過程の一端—

高野山大学 桧垣 巧

第3室 政治・組織（225教室）

司会 居安 正・高島昌二

1. 1930年代日本における統轄官庁の研究

大阪大学 石丸 博

2. 農村社会における政治文化の変容 —滋賀県湖北地域の事例—

佛教大学 大橋松行

3. 所有と支配の分離をめぐる理論的経緯 —A・A・バーリを中心に—

大阪外語大学 林 弥富

4. 農協組織の意思決定構造 —愛知県農協職員調査を中心に—

金城学院大学 碓井 崧

第4室 共同報告Ⅱ（226教室）

司会 北川隆吉・遠藤惣一

「自動車工業独身青年労働者の労働・生活・余暇 —トヨタ調査を中心に—」

1. 独身青年層の出身階層と仕事意識

立命館大学 村上文司

2. 自工の労働者管理と独身青年層の意識

” 湯本 誠

3. 独身青年層の余暇生活

東京都立工科短期大学 大倉秀介

◆挨拶（16:00 221教室）

愛知大学 川越淳二

◆閉会の辞（16:10 ” ）

関西社会学会常任委員 四方寿雄

第34回大会

1983年6月11日(土)、12日(日)

開催校 京都大学

第1日 6月11日(土)

◆受付開始 9:00

◆開会の辞 9:40 (北館1階1号室) 関西社会学会委員長 池田義祐

◆歓迎の辞 9:45 (") 京都大学 中 久郎

◆研究報告 午前の部 10:00~12:00

[第1室] 社会意識 (南館1階6号室)

司会 : 小関三平・三沢謙一

1. 若者の性意識調査

大手前女子短期大学 善積 京子

2. マスメディアによる女性の意識形成

(株)大広 大橋 照枝

3. 生活満足意識の構造と中流意識

岡山大学 藤森 俊輔

[第2室] 家族 (南館2階2号室)

司会 : 阪井敏郎・金屋平三

1. フェミニズム理論による家族社会学批判の問題点

立命館大学 渋谷 敦司

2. 都市における家族関係に関する一考察

京都大学 神原 文子

3. 韓国社会の配偶者選択

鹿児島経済大学 山中美由紀

[第3室] 宗教と生活 (南館2階3号室)

司会 : 山本 登・川崎恵璋

1. 寄せ場労働者の生と死 ——釜ヶ崎・「越冬闘争」を事例として——

広島修道大学 青木 秀男

2. 仏教のシナ的変容の諸契機とシナ化仏教としての禅宗の諸特質

高野山大学 桧垣 巧

3. 蘇生説話の脈絡と位置づけ

金沢経済大学 鈴木 宗憲

【第4室】 教育と医療（南館3階亀の間）

司会：遠藤惣一・山口節郎

1. 学校教育と知識・役割の性別配分

京都大学 森 繁男

2. 看護学生のための「制度」の概念の定義の試み

藤原 英男

3. 医育機関別にみた臨床医師の動向 ——近畿13校のばあい——

福井医科大学 西川 美紀

【第5室】 病理（南館3階鶴の間）

司会：山口透・大村英昭

1. 精神病のレイベリング理論に関する一考察 ——「相対主義」的視点をめぐって——

京都大学 黒田浩一郎

2. 現代日本の少年非行と逸脱行動論

鹿児島女子大学 高原 正興

3. アルコール依存と社会的態度の研究

大阪市立大学 清水 新二

【第6室】 エスニシティ（北館1階1号室）

司会：古屋野正伍・二宮哲雄

1. タイ国華僑・華人系住民の同化

大阪大学 チーラパー・ラオスィーシン

2. アフリカ都市出稼ぎ民の再部族化現象

——状況的アプローチ理論の発展をめざして——

京都大学 松田 素二

3. 日系アメリカ人の政治的態度 ——その形成と構造——

関西学院大学 真鍋 一史

◆学会委員選出投票 11:00～14:00

◆研究報告 午後の部 13:00～17:00

【第1室】 理論（南館1階6号室）

司会：間場寿一・久慈利武

1. パワー概念の基本構成

大阪大学 宮本 孝二

2. ダイアト的交換理論の一考察 ——分配公正論を手がかりに——

京都大学 柳川 洋一

3. G.H.ミードの自我論の新たな展開 ——H.ヨアスの所説によせて——

大阪府立大学 土肥 豊

4. 社会システムの収束的起承転結と発散的起承転結

園 直樹

【第2室】 組織（南館2階2号室）

司会：居安 正・高島昌二

1. 災害時における組織行動

大阪大学 野田 隆

2. 戦前昭和期「人口政策」断章 ——厚生省人口問題研究所をめぐる——

京都府立大学 高沢 淳夫

3. 伝統型地域住民組織とコミュニティ形成

関西大学 神谷 国弘

” 滝本 佳史

4. 組織コミュニケーション ——レビューと展望——

金城学院大学 碓井 崧

【第3室】 老人（南館2階3号室）

司会：四方寿雄・宮城 宏

1. 熊本市内老人クラブの比較研究 ——比較調査法の試み——

熊本大学 高津 等

2. 老人をとりまく援助制度に関する一考察 ——第一次集団間代替の検討——

関西学院大学 松岡 敦子

3. 名古屋市におけるひとり暮らし老人の実態と生活

名古屋大学

宮本 益治

4. 志摩における隠居慣行 ——国府地区と船越地区の比較——

岐阜女子大学

鈴木 洋昭

5. 老人の隠居観の地域比較研究

——三重県志摩地方、国府・船越の二地区の事例調査より——

上久保達夫

【第4室】地域（南館3階亀の間）

司会：谷口 茂・牧野由朗

1. 北陸山村の拳家離村者の生活

——富山県砺波郡利賀村の離村者の追跡調査を中心にして——

岡山大学

山口 素光

2. 大都市近郊における宅地開発と地域社会の変容

1. 可児市の現況と調査の概要

名古屋大学

杉浦 直子

2. 地域社会の変容Ⅰ ——大森と今渡——

”

白鳥 真紀

3. 地域社会の変容Ⅱ ——広眺ヶ丘団地と愛岐ヶ丘団地——

”

小木曾洋司

4. 四地区の比較

”

黒田 由彦

5. 可児市における社会関係を規定する要因の変化

”

大藤 文夫

【第5室】宗教と社会（南館3階鶴の間）

司会：鈴木宗憲・口羽益生

「生駒山系の宗教と社会」

1. 概観

英知大学

西山 俊彦

京都大学

菅 康弘

2. 生駒山系における「朝鮮寺」について

富山大学 飯田 剛史

3. 石切神社発展小史

大阪大学 森下 伸也

4. 生駒山系における修験信仰

大阪大学 池田 光穂

5. 生駒聖天・宝山寺 ——その信仰と構造——

清水 夏樹

[第6室] 地域と女性意識 (北館1階1号室)

司会：高橋純平・長谷川善計

「長岡京市における女性の意識調査」

1. 調査の概要

京都大学 山下 雅之

” 大牟田 透

2. 「地域」意識からとらえた「地域」の空間的範疇

” 松居 径

3. 近隣交際の次元と意味

” 池田 繁樹

4. サークル参加者の意識と関心

” 安田 卓生

5. 家事をめぐる女性の「家内性 (domesticity)」の現代的特徴

” 串田 秀也

6. 現代母親の類型的把握

” 大牟田 透

7. 女性観の諸相と女性の自立

” 田中 滋

◆総会 17:00～17:50 (北館1階1号室)

◆懇親会 18:00～20:00 (南館3階 鶴の間・亀の間)

第2日 6月12日(日)

◆シンポジウム 10:00~15:30 (北館2階ホール)

テーマ 「われわれは社会構造をどうみるか」

司会 : 徳永 恂・中野秀一郎

1. 構造とシンボル ——構造主義の視点——

報告者 : 神戸大学 大野 道邦

討論者 : 甲南大学 森田 三郎

2. 構造と体験 ——現象学的社会学の視点——

報告者 : 追手門学院大学 矢谷 慈国

討論者 : 金沢大学 佐藤 嘉一

3. 構造と実践 ——マルクス主義の視点——

報告者 : 立命館大学 清野 正義

討論者 : 奈良女子大学 新 睦人

◆閉会の辞 15:30 (北館2階ホール) 関西社会学会常任委員 作田啓一

第35回大会

1984年5月26日(土)、5月27日(日)

開催校 奈良女子大学

第1日 5月26日(土)

◆受付開始 9:30

◆開会の辞 9:50 (文学部北棟103室)

関西社会学会委員長 中 久郎

◆研究報告 10:00~12:00

[第1室] 理論 (文学部北棟 201 室)

司会 : 越井郁朗・山口節郎

1. ミードの「精神・自我の社会発生論」の検討

京都大学 加藤 一己

2. 社会学における主観性について ——エスノメソドロジーの視点から——

京都大学 宮脇 幸生

3. 自己と主観的現実 ——日記の中の取り残された世界——

大阪市立大学 桐田 克利

[第2室] 権力 (文学部北棟 101 室)

司会 : 高島昌二・居安 正

1. 権力の実証的測定とその諸問題 ——M. クレソンの試論を中心に——

大阪市立大学 竹川 郁雄

2. 国会議員の政治的経歴に関する一考察

京都大学 原田 隆司

3. 株式会社制度と財産—権力の行方

大阪外国語大学 林 弥富

[第3室] 労働・職業 (文学部北棟 102 号室)

司会 : 長谷川善計・遠藤惣一

1. 産業構造の変化と女子労働の変質について

関西大学 志村 哲郎

2. 南京工場労働者家族調査の報告 ——家族構成を中心として——

大阪大学 松戸 庸子

3. 医師と医療における連続と変化

——〇市・K市における医師意識調査の報告に寄せて——

関西学院大学 中野秀一郎

[第4室] 文化・コミュニケーション (文学部南棟 114 室) 司会 : 井上 俊・丸木恵祐

1. 大衆劇団組織の社会学的考察

京都大学 鵜飼 正樹

2. 力道山プロレスのフレーム分析

大阪大学 リー・オースティン・トンプソン

3. オーディエンス論再考

京都大学 高橋 由典

【第5室】福祉・老人（文学部南棟115室）

司会：四方寿雄・土田英雄

1. 老人ホームにおける寂しさ ——ある養護老人ホームでの聞き取り調査を通じて——

奈良女子大学 藤川 博子

2. 老人の生活とその実態 ——宇治市における調査から——

中京短期大学 上久保達夫

3. 「身体障害者授産施設」の分類の混乱の整理

藤原 英雄

◆歓迎の辞 13:00（文学部南棟218室） 奈良女子大学長 後藤和夫

◆シンポジウム 13:15～17:00（文学部南棟218室）

テーマ「社会学を考える ——社会事象の計測・観察・解釈——」

司会：古屋野正伍・萬成 博

1. 「村落構造の計量的分析」

九州工業大学 平松 潤

2. 「社会調査と村落社会構造」

神戸大学 北原 淳

3. 「都市の同郷団体」

同志社大学 松本 通晴

討論者：高沢淳夫（京都府立大学） 坪内良博（京都大学） 大藪寿一（大阪市立大学）

◆総会 17:00～17:30（文学部南棟218室）

◆懇親会 17:30～20:30（大学会館食堂）

第2日 5月27日(日)

◆研究報告 10:00~12:30

【第1室】理論 (文学部北棟 201室)

司会：橋本 真・浜口恵俊

1. 初期パーソンズ研究

京都大学 進藤 雄三

2. 「社会構造」概念の再・再考

奈良女子大学 新 睦人

3. 即事象—超越カテゴリー— ——起承転結の社会学序説——

園 直樹

【第2室】地域 (文学部北棟 101室)

司会：二宮哲雄・八木佐市

1. 漁撈集団におけるリーダーの役割分析

佛教大学 若林 良和

2. 農村青年とコミュニティ施設との関連についての実証的研究

香川大学 渡辺 安男

3. 混住化地域における青年の「集り」(collectivity)と「地域づくり」

——石川県野々市町青年団を事例として——

金沢大学 西村 雄郎

4. 対馬・廻部落における生活の共同 ——その規定因素と隣接唐州部落との対比——

高野山大学 桧垣 巧

【第3室】歴史・変動 (文学部北棟 102室)

司会：鈴木宗憲・塩原 勉

1. 集合行動の歴史社会学・試論 ——C.ティリーの研究を中心に——

大阪大学 鶴飼 孝造

2. 「世俗化」再考

大阪大学 三木 英

3. ヒンドゥー婚の理念と諸問題

大阪市立大学 本部 隆一

4. 19世紀アメリカ社会のコミュニケーション運動

立命館大学 奥川櫻豊彦

【第4室】 女性（文学部南棟114室）

司会：加藤春恵子・今津孝次郎

1. 女子大学生の教育アスピレーション形成 ——母親の生活観の影響——

奈良女子大学 太田垣由起枝

2. 女子大学生における就職意識の計量的分析

梅花女子大学 井上 文夫

3. 消費社会と女性

(株)大広 大橋 照枝

【第5室】 数理（文学部南棟115室）

司会：碓井 崧・山本剛郎

1. 組織内移動の分析

大阪府立大学 沢田善太郎

2. 『「いき」の構造』の代数的構造

桃山学院大学 高坂 健次

3. L.Guttman の諸法則とその追試

関西学院大学 真鍋 一史

【第6室】 共同報告（文学部南棟116室）

司会：柴野昌山・竹内 洋

専修学校の動向と学生の意識 ——コンピューター系専修学校を事例として——

① 専修学校の展開と特徴

立命館大学 竹内 真澄

② 学生の進路選択と進学動機

” 中村 正

③ 学生の学校生活に対する意識

” 山元 公平

④ 学生の就職意識

” 湯本 誠

◆閉会の辞 12:30（文学部北棟103室） 関西社会学会常任委員 大藪 寿一

第36回大会

1985年6月1日(土)、6月2日(日)

開催校 金沢大学

第1日 6月1日(土)

◆受付開始 12:00

◆開会の辞 12:40 (教養部 B14)

関西社会学会委員長

中 久郎

◆歓迎の辞 12:50 (")

金沢大学学長

金子曾政

◆シンポジウム 13:00~17:00 (")

テーマ「社会学を考える:日常経験と理論」

司会 : 越井郁朗・仲村祥一

1. 日常経験と社会学

神戸女学院大学

小関 三平

2. 日常生活とフォークロアの方法

関西学院大学

鳥越 皓之

3. 日常経験と相互作用論

金城学院大学

丸木 恵祐

4. 日常経験とシステム理論

立命館大学

佐藤 嘉一

討論者 : 山口節郎 (大阪大学) 岩崎信彦 (神戸大学)

◆総会 17:00~17:30 (教養部 B14)

◆懇親会 18:00~20:00 (学生会館)

第2日 6月2日(日)

◆研究報告 午前の部 10:00~12:30

[第1室] 理論Ⅰ (第30号教室)

司会：中野秀一郎・三沢謙一

1. 「内面化」と「討議」 ——パーソンズとハーバマスにおける文化の位置——
京都大学 馬場 靖雄
2. パーソンズ社会理論における人間像 ——「制度化された個人主義」をめぐって——
京都大学 進藤 雄三
3. 分化とメディア ——T.Parsons を中心に——
九州大学 中西 吉則
4. 反復活動（起核／継承／転換的総合）の課題 ——身体、機械、クラシック——
園 直樹

[第2室] 政治・階層 (第20号室)

司会：居安 正・間庭充幸

1. 「寄せ場労働者差別」についての一考察
平川 茂
2. 社会諸階層の政治的態度 ——倉敷市民調査——
岡山大学 藤森 俊輔
3. J. コッカのホワイト・カラー論
大阪外国語大学 林 弥富
4. 現代社会論と Nation=State の概念
立命館大学 清野 正義

[第3室] 地域 (第32号教室)

司会：川崎恵璋・山口素光

1. 「第三空間」研究への社会学的アプローチ
京都大学 永井 良和
2. 漁撈集団リーダーのオカにおける社会関係 ——贈答慣行の視点から——
佛教大学 若林 良和
3. 伝統型都市の社会構造に関する実証的研究 ——旧堺市街地を中心に——
龍谷大学 荻野 勝行
4. 欧米諸国におけるネオ・ルーラリズム
佛教大学 満田 久義

[第4室] 社会心理 (第22号教室)

司会：石川 実・高橋三郎

1. 音楽の大衆化をめぐる理論的展開

関西学院大学 松田 健

2. アイデンティティ形成と攻撃性についての一考察

——学級集団内の「いじめ」行動を中心に——

大阪市立大学 竹川 郁雄

3. 現代社会の基軸としての消費と消費者行動 ——モデル化のための概念設計——

(株)大広 大橋 照枝

4. ME (マイクロ・エレクトロニクス) 化の中小企業の対応

——枚方市における事例——

関西大学 大西 正曹

[第5室] 共同報告I (第33号教室)

司会：大藪寿一・土田英雄

離島出身者と同郷団体 ——甑島と尼崎——

1. 総論

同志社大学 青木 康容

2. 甑島村落の特質

愛知大学 交野 正芳

3. 在村者の他出経験

熊本大学 蘭 信三

4. 他出経験者の生活実態

同志社大学 森川真規雄

5. 離村者の移動形態

広島女子大学 加茂 陽

6. 都市離村者の実態

広島大学 鯨坂 学

7. 離村者と同郷団体

山本 正和

◆研究報告 午後の部 13:30~16:00

[第1室] 理論II (第30号教室)

司会 : 磯部卓三・大村英昭

1. 社会的誘導の理論

龍谷大学 磯部 裕

2. 相互作用における自他のネーミングプロセス

——Anselm Strauss の象徴的相互作用論の検討——

京都大学 藤沢 三佳

3. 集合的不合理とフリーライダー問題

——M.Olson の『集合的行為の論理』をめぐって——

京都大学 柳川 洋一

4. 相対的不満論再考

関西学院大学 高坂 健次

[第2室] 制度・運動 (第32号教室)

司会 : 碓井 崧・奥川櫻豊彦

1. 運動集団形成に関する理論的考察

京都大学 牟田 和恵

2. 制度をめぐる矛盾の帰結の法則の体系

藤原 英男

3. 社会学における制度の問題

京都大学 高沢 淳夫

[第3室] 家族 (第22号教室)

司会 : 坪内良博・戸谷 修

1. ヒンドゥー婚の諸問題について

大阪市立大学 本部 隆一

2. 社会変動の家族社会学的分析について

関西大学 木村 雅文

3. 送付村における海外出稼ぎ者と海外移民の家族と生活

鹿児島経済大学 川崎 澄雄

[第4室] 共同報告Ⅱ (第20号教室)

司会：長谷川善計・山本剛郎

大都市近郊住民の生活構造とコミュニティ形成要件 ——吹田市を事例として——

1. 問題の所在と調査概要

関西大学 神谷 国弘

2. 生活構造のパターン分析

関西大学 瀧本 佳史

3. 社会移動と住民参加意識

奈良女子大学 中道 實

4. 生活構造パターンと住み心地意識

関西大学 森谷 健

[第5室] 共同報告Ⅲ (第33号教室)

司会：牧野由朗・八木佐市

韓国慶尚北道蔚珍郡厚浦里の調査報告

——日韓漁村社会・経済研究会による第二次調査——

1. 調査の概況

甲南女子大学 益田 庄三

2. 韓国社会の儒教的体質 ——漁村の聞きとり調査を中心に——

高野山大学 桧垣 巧

3. 韓国漁村契の現状

佛教大学 豊福 陽一

4. 韓国と日本の沿岸漁村比較調査レポート

気象庁 酒井 俊二

5. 韓国漁村村落の社会民俗の動態 ——慶尚北道蔚珍郡平海邑金音三里の事例——

熊本大学 平田 順治

◆挨拶 16:00 (第20号教室)

金沢大学 二宮 哲雄

◆閉会の辞 16:10 (")

関西社会学会常任委員 上子 武次

第37回大会

1986年5月31日(土)、6月1日(日)

開催校 同志社大学

第1日 5月31日(土)

◆受付開始 11:00

◆学会役員選出投票 11:00～14:00

◆開会の辞 12:40 (S22 教室)

関西社会学会委員長 中 久郎

◆歓迎の辞 12:50 (")

同志社大学学長 原 正

◆シンポジウム 13:00～17:00 (")

「社会学を考える」シンポジウム・シリーズについて 研究活動委員会代表 間場寿一

テーマ「社会学を考える:現実問題への提言」 司会: 碓井 崧・大村英昭・大藪寿一

1. 都市計画の現実と展望 ——西陣の再生について——

京都産業会館・前京都市経済局長 清水 武彦

2. 生活の中の非行

金城学院大学 山口 透

3. 高齢化社会と社会福祉

同志社大学 小倉 襄二

討論者: 神谷国弘(関西大学) 徳岡秀雄(関西大学) 野村哲也(大阪府立大学)

◆総会 17:00～17:30 (S22 教室)

◆懇親会 18:00～20:00 (新島会館)

第2日 6月1日(日)

◆研究報告 午前の部 10:00～12:30

[第1室] 理論I (S2 教室)

司会: 居安 正・高橋由典

1. 隠蔽の社会理論序説 ——ゴッフマンを中心に——

大阪大学 阪本 俊生

2. ウェーバー社会学における知識人層と「文化」

京都大学 田中 紀行

3. 支配の正当化論 ——ウェーバーの「正当性」概念に関連して——

名古屋大学 大藤 文夫

4. マックス・ウェーバーの行為論をめぐる若干の問題について

同志社大学 田村 雅夫

【第2室】 地域・家族（S3教室）

司会：坪内良博・北原 淳

1. 新しい農業文化の記述 ——いちごの栽培をめぐる——

藤原 英男

2. ヒンドゥー社会の底辺にあるもの（I）

大阪市立大学 本部 隆一

3. 東北タイにおける農民の地域移動

——ハーナーディー（美田を求めて）の移動を中心に——

滋賀県立短大 武邑 尚彦

4. ソ連における家族変動の要因

京都教育大学 村井 研治

【第3室】 現代社会（S4教室）

司会：高島昌二・高橋三郎

1. 消費社会のネクスト・フロンティア

(株)大広 高橋 照枝

2. Corporate Network について

同志社大学 青木 康容

3. 戦争国家（Warfare State）と社会学の理論枠組

立命館大学 清野 正義

【第4室】共同報告Ⅰ（S地2教室）

司会：八木佐市・中道 實

西陣地域住民の意識と行動 ——西陣学区の事例——

1. 研究課題と調査地域の概況

佛教大学 谷口 浩司

佛教大学 星 明

2. 地域の社会関係

佛教大学 浜岡 政好

佛教大学 高橋 伸一

3. 情報行動

佛教大学 荒木 功

4. 宗教生活

佛教大学 加藤 信孝

【第5室】共同報告Ⅱ（S地3教室）

司会：谷口 茂・中田 実

自動車のまちの地域生活 ——豊田市M町の事例——

1. 概況

神戸大学 岩崎 信彦

2. 家族生活

中川 順子

3. 地域の社会関係

鈴木 富久

4. 社会意識

神戸大学 岩崎 信彦

◆研究報告 午後の部 13:30~16:00

【第1室】理論Ⅱ（S2教室）

司会：平田順治・佐藤嘉一

1. ルーマンの歴史経験

京都大学 馬場 靖雄

2. L.クラップマンの相互行為論的役割論について

東京農業大学 深沢 建次

3. エスニシティ論の理論的考察

京都大学 西井 涼子

4. 現代韓国社会学についての考察

福岡教育大学 小林 孝行

[第2室] シンボル (S3教室)

司会 : 小関三平・富永茂樹

1. 安楽死問題に於ける身体の象徴性について

京都大学 棚瀬 慈郎

2. <生>と<死>の象徴論的分析

大阪大学 長谷 正人

3. 四面体(聖一俗一遊一乱図式)再考

関西大学 木村 洋二

4. 起承転結の両義性(記号のシンボルと計算法のイメージ) ——人気の社会学序説——

園 直樹

[第3室] 宗教 (S4教室)

司会 : 塩原 勉・山口素光

1. 「力の体系」としての社会 ——デュルケム宗教社会学における力と感情の問題——

京都大学 菅 康弘

2. 湖北・海老江における村落と宗教

龍谷大学 西光 義秀

3. 近江の宗教環境について

大谷大学 志水 宏行

4. 韓国の祖先崇拜の一断面

高野山大学 桧垣 巧

[第4室] 社会意識・社会調査 (S21教室)

司会 : 戸谷 修・中野正大

1. 神道石切教石切神社信者における宗教意識の構造

大阪大学 川端 亮

2. 「社会調査」の授業の組み立てについて ——試論——

京都大学 高沢 淳夫

3. 市民意識の研究手法 ——内容分析と質問紙調査の統合の試み——

関西学院大学 真鍋 一史

【第5室】共同報告Ⅲ（S地2教室）

司会：萬成 博・長谷川善計

豊田市における自動車関連企業の階層構造 ——経営と労働を中心にして——

1. 豊田市における自動車関連企業の展開過程

愛知教育大学 藤田 栄史

2. 経営・生産における格差構造

立命館大学 辻 勝次

3. 労働力構成および労働諸条件における格差構造

立命館大学 湯本 誠

4. 零細企業の生業展開と労働諸条件

立命館大学 木本喜美子

【第6室】共同報告Ⅳ（S地3教室）

司会：土田英雄・二宮哲雄

東三河における山村構造の分化と統合

——豊川流域圏の社会とその変容（そのⅡ）——

1. 問題の所在

愛知大学 牧野 由朗

2. 稲作型山村における社会結合の変容

愛知大学 交野 正芳

3. 賃労働依存型山村における分化と結合

愛知大学 古賀 倫嗣

4. ダム建設計画に対する住民の対応形態

愛知大学 渡辺 正

◆閉会の辞 16:10（S地3教室）

関西社会学会常任委員 牧野 由朗

第38回大会

1987年5月23日(土)、5月24日(日)

開催校 愛知県立大学

第1日 5月23日(土)

◆受付開始 12:00

◆開会の辞 12:40 (講堂)

関西社会学会委員長 中 久郎

◆歓迎の辞 12:50 (＃)

愛知県立大学大学長 横越 英一

◆シンポジウム 13:00～17:00

テーマ 「地方圏構想と社会学 ——東海地域を事例として——」

司会 : 山本 登・高橋純平

1. 基調報告

甲南大学 高橋 純平

2. 大都市の視点から

金城学院大学 西山八重子

3. 中小都市の視点から

椋山女学園大学 黒田 由彦

4. 農山村の視点から

愛知大学 渡辺 正

討論者 : 山本剛郎(関西学院大学) 浜岡政好(佛教大学)

◆総会 17:00～17:30 (講堂)

◆懇親会 18:00～20:00 (学生会館 会議室)

第2日 5月24日(日)

◆研究報告 午前の部 10:00～12:30

[第1室] 理論Ⅰ (104 教室)

司会：丸木恵祐・井上 俊

1. E.ゴフマンにおける「関与 (involvement)」の問題

京都大学 串田 秀也

2. E.Goffman の精神「障害」者論検討 ——Asylums を中心に——

京都大学 藤沢 三佳

3. 高齢者の日常コミュニケーション行為の研究に向けて

——E.ゴフマン『島嶼社会におけるコミュニケーション行為』(1953)の再検討——

甲南大学 安達 正嗣

[第2室] 共同報告Ⅰ (105 教室)

司会：居安 正・伊藤公雄

グラムシと社会学

1. M.フーコーのディシプリナリー化社会論とグラムシ

——B.スマートの所説を手がかりとして——

立命館大学 中村 正

2. グラムシの言語問題の射程とそこからみた言語病理の諸相

言語問題研究所 鈴木 修

3. グラムシの合理性概念

立命館大学 鈴木 富久

4. グラムシと社会学の方法

立命館大学 石倉 康次

[第3室] 産業 (106 教室)

司会：碓井 崧・清野正義

1. ユーゴスラヴィアの自主管理企業における「動機づけ」の問題

神戸大学 材木 和雄

2. J.コッカの産業官僚制論

大阪外国語大学 林 彌富

3. 工場組織の変化モデルの構築

関西学院大学 萬成 博

関西学院大学 ロバート M. マーシュ

[第4室] 地域 (202 教室)

司会 : 松本通晴・中野正大

1. 真宗村落の宗教生活 ——石川県能美郡辰口町鍋谷の調査から——

日本学術振興会奨励研究員 由谷 裕哉

2. 地域社会における〈社会的連帯感〉の形成 ——住民参加の問題点について——

大阪市立大学 森村 尚

3. 海外勤務者の現地における労働時間および生活状態

創価大学 佐々木交賢

4. The impact of technological and economic change on family

and work in Nishijin silk weaving industry

同志社大学 HAREVEN, Tamara

[第5室] 社会問題 (203 教室)

司会 : 仲村祥一・間庭充幸

1. 老人の自殺の地域差について

神戸山手女子短期大学 西下 彰俊

2. 商店名の差別的呼称について

愛知学院大学 松浦 国弘

3. 「野宿者」襲撃と「寄せ場」差別

関西大学 中根 光敏

[第6室] 共同報告Ⅱ (107 教室)

司会 : 牧野由朗・坪内良博

山東省小高家村

1. 調査の概要

甲南女子大学 上子 武次

2. 家族と村の歴史

甲南女子大学 宮城 宏

3. 村の生活

大阪大学 橋本 満

4. 親族組織——「院」

甲南女子大学 李 小慧

◆研究報告 午後の部 13:30~16:00

[第1室] 理論Ⅱ (104教室)

司会：新 睦人・佐藤嘉一

1. ダイアログのために ——ハーバーマス＝ルーマン論争・再考——

京都大学 馬場 靖雄

2. 資源動員論と『集合行為の論理』 ——公共財論の観点から——

大阪大学 元田 州彦

3. ウェーバー社会学の問題の構造 ——付録 数学の若干の新しい方法——

藤原 英男

4. 社会的制作物と制作心理の起承転結

——結合連想の起、分離分想の承、転換的収束の転結——

園 直樹

[第2室] 理論Ⅲ (105教室)

司会：越井郁朗・山口節郎

1. 情動の社会的問題性

関西大学 金田 福男

2. G.H.ミードの「科学的方法」 ——その歴史的背景——

金沢大学 近藤 敏夫

3. アルフレート・シュッツの生活世界概念の検討

京都大学 田間 泰子

4. ラベリング・アプローチによる犯罪動機論の試み

大阪大学 土井 隆義

[第3室] 意識・文化 (106教室)

司会：間場寿一・井上忠司

1. 大衆演劇の内容分析試論 ——仇討ち物を中心に——

京都大学 鵜飼 正樹

2. 職業と結婚との間の関係についての大学生の意識

夙川学院短期大学 小野 能文

3. 消費者行動調査における質問紙作成のシステムティックな方法

——Facet Design の利用と開発——

関西学院大学 真鍋 一史

4. 日本人の対人関係観 ——「間人主義」と「個人主義」との連関性をめぐって——

大阪大学 濱口 恵俊

大阪大学 古川 秀夫

【第4室】アジア社会（202教室）

司会：戸谷 修・北原 淳

1. エスニシティ化の研究

大阪大学 秋庭 裕

2. 革命と心理について ——中国土地改革へのアプローチ——

関西大学 富田 和広

3. ヒンドゥー社会の底辺にあるもの（Ⅱ）

大阪市立大学 本部 隆一

4. 東北タイ農村における世帯間共同の類型とその特徴

——「屋敷地共住集団」をめぐる一試論——

京都女子大学 舟橋 和夫

【第5室】共同報告Ⅲ（203教室）

司会：土田英雄・中田 実

伊根町漁業集落の共同研究

1. 伊根町および同町漁業集落の概況

高野山大学 桧垣 巧

2. 新井崎地区の漁業協同組合活動

甲南女子大学 崔 聖愛

3. 狭域漁業生産組織漁村の比較考察 ——泊および蒲入地区を中心に——

東洋大学 酒井 出

4. 伊根の漁村・莞島の漁村

佛教大学 豊福 陽一

5. 旧伊根浦三か村における株制と親方・小方慣行の残像

高野山大学 桧垣 巧

◆閉会の辞 16:10 (107 教室)

関西社会学会常任委員 四方 壽雄

第 39 回大会

1988年5月28日(土)、5月29日(日)

開催校 立命館大学

第 1 日 5月28日(土)

◆受付開始 13:00

◆開会の辞 13:40 (401 教室) 関西社会学会委員長 中 久郎

◆歓迎の辞 13:50 (401 教室) 立命館大学副学長 真田 是

◆研究報告 I 14:00~16:30

[第 1 室] 理論 (201 教室)

司会 : 中野秀一郎・磯部卓三

1. グラムシの社会科学方法論 ——「新しい言語文献学」の問題を中心に——

立命館大学 鈴木 富久

2. マルクスの抽象の構造 ——付録超多変量解析法——

藤原 英男

3. 社会変動の群論起承転結(二項対立の結合の原理)と
想像力起承転結(二項連想の分想の原理)

園 直樹

[第 2 室] 学説 I (202 教室)

司会 : 高橋由典・黒田由彦

1. G.H.ミードとプラグマティズム

東京都立大学 近藤 敏夫

2. ゴフマンの「聖なるもの」 ——デュルケム儀礼論の今日的展開——

立命館大学 紀 葉子

3. フーコーにおける権力分析の基本的構図

——『監獄の誕生』の方法的分析を中心とする試論——

京都大学 近藤 哲郎

【第3室】調査と方法（203教室）

司会：中道 實・平松 闊

1. 相対的剥奪と社会意識

大阪大学 佐藤 裕

2. ソーシャル・ネットワークにおける社会的同質性

大阪大学 岡本 隆宏

3. 瀬戸大橋建設の地域社会への影響 ——島しょ部を中心に——

広島大学 鯨坂 学

4. 社会研究における方法的視点としてのキャリア

名古屋大学 今津孝次郎

【第4室】組織と階級（204教室）

司会：小笠原真・富永茂樹

1. 市民権の展開と階級区分

大阪大学 森定 玲子

2. アソシエーションと近代

大阪府立大学 沢田善太郎

3. 蓮如の組織論・序説 ——組織と対比して——

真宗大谷派教学研究 所 林 弘幹

【第5室】文化（205教室）

司会：森川真規雄・井上真理子

1. 中国残留孤児・帰国者の生活史 ——異文化との共存への一視角——

立命館大学 野入 直美

2. 文化類型の比較について ——「罪の文化」と「恥の文化」の場合——

大阪大学 ポーリン・ケント

3. 日本人論の諸命題とその諸機能に関する実証的研究 ——質問紙調査による接近——

関西学院大学 真鍋 一史

4. つきあい・義理・恩再考 ——交換理論から——

三重大学

久慈 利武

◆総会 16:40~17:30 (401 教室)

◆懇親会 18:00~20:00 (中川会館)

第2日 5月29日(日)

◆研究報告Ⅱ 10:00~12:30

[第1室] 学説Ⅱ (201 教室)

司会 : 三沢謙一・井上純一

1. アドルノの芸術社会学

京都大学

吉田 純

2. ハーバーマスの後期資本主義論に関するヒルシュの批判をめぐって

京都大学

樋口 進

3. モデルネ論争の知識社会学 ——ハーバーマス、ルーマン、デリダ——

愛知県立大学

三上 剛史

[第2室] 家族・福祉 (202 教室)

司会 : 本村 汎・細辻恵子

1. 中国における一人っ子政策の展開と推移

甲南大学

中田 睦子

2. 家事労働と地域社会

立命館大学

黒田 慶子

[第3室] 国家と政治 (204 教室)

司会 : 柏岡富英・富士田邦彦

1. 正統性問題再考

京都大学

馬場 靖雄

2. 権威主義・保守主義・革新主義 ——左翼権威主義再考——

関西学院大学

小林 久高

3. 国家と動員の歴史社会学・試論

大阪大学 鶴飼 孝造

【第4室】労働 (204 教室)

司会：西山美瑛子・奥村義雄

1. 自動車産業に生きる人々 ——T自動車労働者の追跡調査から——

立命館大学 湯本 誠

2. 日本自動車企業アメリカ合衆国での現地生産について

立命館大学 タリエ・グローニング

3. ソビエト社会学における労働態度研究

神戸大学 材木 和雄

4. ホワイトカラーの社会的把握について ——J.コッカの所説を中心に——

大阪外国語大学 林 弥富

【第5室】共同報告 (205 教室)

司会：中野正大・交野正芳

韓国慶尚南道統営郡内の漁村の調査報告

1. 龍南面新村地区におけるセマウル運動の展開 (その1)

甲南女子大学 益田 庄三

2. 龍南面新村地区におけるセマウル運動の展開 (その2)

甲南女子大学 崔 聖愛

3. 統営郡見留マウルの生業と自治

佛教大学 豊福 陽一

4. 韓国の祖先崇拜 ——統営郡内の農・漁村の比較調査から——

高野山大学 桧垣 巧

5. 日韓漁村の集団的特徴に関する比較考察

気象庁 酒井 俊二

◆重点部会 13:30~17:00

【第1室】知の社会学 (403 教室)

司会：倉橋重史 (佛教大学)・大野道邦 (神戸大学)

1. 科学社会学における科学 ——R.K.Merton の科学社会学を中心に——

広島大学 有本 章

2. 科学の周辺

関西学院大学 対馬 路人

3. 知と情のダイナミズム

大阪大学 大村 英昭

討論者：厚東洋輔（大阪大学） 安野早己（大阪学院短期大学）

【第2室】社会学に何が出来るか ——そのパースペクティブを問う——（402 教室）

司会：高橋三郎（京都大学）・新 睦人（奈良女子大学）

1. 医療の高度化と人間の問題 ——機能主義の立場から——

奈良女子大学 進藤 雄三

2. 私化した社会とは

大阪市立大学 片桐 雅隆

3. マイホーム再考 ——戦後日本社会を理解するために——

京都大学 高澤 淳夫

4. 日本ナショナリズムの歴史社会学的考察 ——1930年代の視点から——

奈良女子大学 筒井 清忠

討論者：徳岡英雄（関西大学） 伊藤公雄（大阪大学）

【第3室】ME (Micro Electronics) 化の社会的影響と問題（401 教室）

司会：北川隆吉（名古屋大学）・長沢孝司（日本福祉大学）

1. 技術革新と労働・企業・地域

鹿児島経済大学 都築 耕生

2. 学校教育におけるコンピュータ利用の現状と個別化・管理化

中京大学 松田 昇

3. 自治体行政におけるサービス化と集権化

名古屋大学 貝沼 洵

討論者：板倉達文（名古屋大学） 藤田栄史（愛知教育大学）

◆挨拶 17:00（401 教室） 立命館大学産業社会学部 清野正義

◆閉会の辞 17:10（401 教室） 関西社会学会常任委員 牧野由朗

第40回大会

1989年5月27日(土)、5月28日(日)

開催校 龍谷大学

第1日 5月27日(土)

◆受付開始 9:20

◆役員選挙投票 9:30~14:30

◆開会の辞 9:40 (101教室) 関西社会学会委員長 中 久郎

◆歓迎の辞 9:50 (101教室) 龍谷大学社会学部長 川崎恵璋

◆研究報告 I 10:00~12:00

[第1室] 学説 I (203教室)

司会：高橋由典・桐田克利

1. デュルケームにおける儀礼論の検討

京都大学 小川 伸彦

2. 対人恐怖に関する社会学的一試論 ——アーヴィング・ゴッフマンの観点から——

関西大学 中内 英了

3. 対面的相互作用と社会的自我

——ゴッフマンのドラマツルギカルアプローチをめぐって——

立命館大学 藤田 実

[第2室] 婚姻 (204教室)

司会：坪内良博・野々山久也

1. 配偶者選択に関する調査研究 ① 配偶者選択の過程

甲南女子大学 佐藤 繁美

2. 配偶者選択に関する調査研究 ② 結婚をめぐる男女の相互作用

甲南女子大学 門野里栄子

3. 離婚原因の実態

愛知工業大学 四方 壽雄

【第3室】農村Ⅰ (205 教室)

司会：北原 淳・橋本 満

1. 沖縄の門中

関西学院大学 安和 守茂

2. 中国農村における老親扶養をめぐる諸問題

甲南大学 中田 睦子

3. タイ農村における「村」の概念

三重大学医療技術短期大学 武笠 俊一

【第4室】職業的世界 (304 教室)

司会：西山美瑛子・磯部卓三

1. H.S.バッカーの「芸術世界」論 ——職業社会学と芸術社会学の接点——

京都大学 鎌田 大資

2. E.C.ヒューズの職業社会学

京都大学 野田 浩資

3. ドイツ社会史における Angestellten の推移とファシズム

大阪外国語大学 林 彌富

【第5室】社会問題 (305 教室)

司会：仲村祥一・鳥越皓之

1. 社会問題研究の社会学的課題 ——定義をめぐる問題——

日本学術振興会特別研究員 中根 光敏

2. 「中年期」考察のための一視角 ——社会構造と年齢カテゴリー——

大阪大学 大和 礼子

3. 大病院における「医師連鎖」と医師—患者関係

京都大学 筒井 琢磨

◆シンポジウム 13:00~17:00

テーマ 「現代日本の社会変動 ——1970 年以降」

【第1部会】主として下部構造の変動 (201 教室)

司会：遠藤惣一 (関西学院大学)・光吉利之 (奈良女子大学)

1. 階層・教育

大阪大学 直井 優

2. 産業 ——企業社会の動揺と労働志向——

立命館大学 辻 勝次

3. 政治

同志社大学 青木 康容

4. 地域社会

金沢大学 橋本 和幸

5. 家族

京都精華大学 上野千鶴子

討論 中野秀一郎（関西学院大学） 嘉田由紀子（滋賀県琵琶湖研究所）

〔第2部会〕主として上部構造の変動（205教室）

司会：塩原 勉（大阪大学）・飯島伸子（桃山学院大学）

1. 風俗 ——風俗としてのグルメ文化——

甲南大学 井上 忠司

2. 自己意識 ——退屈と「私」——

関西大学 木村 洋二

3. 医療 ——高度・先端医療の影響と社会的反応——

京都大学 宝月 誠

4. 宗教 ——新宗教を中心として——

桃山学院大学 沼田 健哉

5. ライフスタイル

奈良女子大学 新 陸人

討論：大橋照枝（大広） 今津孝次郎（名古屋大学）

◆総会 17:00～18:00（101教室）

◆懇親会 18:00～20:00（西本願寺・開明亭）

第2日 5月28日（日）

◆受付開始 9:30

◆研究報告Ⅱ 10:00~12:00

【第1室】学説Ⅱ (203教室)

司会：高坂健次・山口節郎

1. ジンメルの社会学的記述についての構造分析的解読

京都大学 永谷 健

2. ブラウの社会構造論

京都大学 金子 雅彦

3. ルーマンにおける「社会」の位置

京都大学 上村 隆広

【第2室】コミュニケーション (204教室)

司会：井上 俊・佐藤嘉一

1. コミュニケーションの「可能性」

京都大学 馬場 靖雄

2. 談話分析から見たイデオロギーの正当化のメカニズム

——アメリカの宗教雑誌のベトナム戦争正当化の場合——

愛知学院大学 木村 英憲

3. 生協の組織内コミュニケーション ——定期刊行物の内容分析——

三重大学 碓井 崧

【第3室】農村Ⅱ (205教室)

司会：山口素光・泉 琉二

1. 山村社会学の構築へ向けて ——岐阜県下郡上郡山村地域の事例をもとに——

中京短期大学 上久保達夫

2. 越中五箇山における「組」の変遷 ——「組」の伝統維持機能を中心に——

東洋大学 酒井 出

3. 滋賀の教会社会の形成と展開 ——農村キリスト教会の事例——

龍谷大学 西光 義秀

【第4室】宗教 (304教室)

司会：場知賀礼文・對馬路人

1. カルト類型と日本の新宗教

高知女子大学保育短期大学部 三木 英

2. 在日社会における仏教寺院の形態と機能

富山大学 飯田 剛史

3. 家庭内暴力と水子信仰をめぐる諸問題

高野山大学 檜垣 巧

[第5室] 日本人論 (305 教室)

司会：森田三郎・森川真規雄

1. ルース・ベネディクト ——Pattern 概念の形成——

大阪大学 ポーリン・ケント

2. 日本人論の機能 ——日本人論に対する「関与」と「態度」の関係の分析——

関西学院大学 真鍋 一史

[第6室] 秩序と行為 (306 教室)

司会：高島昌二・小関三平

1. 感情の社会学的構造の群論的構造と起承転結

園 直樹

2. 科学的社会学と普遍的秩序定立課題 ——グローバル階級構造の一事例分析より——

西山 俊彦

3. 機能的な方法による「行為」解釈再考

——「受験機会の複数化」をめぐる諸事態に照らして——

京都大学 中 久郎

◆挨拶 12:00 (101 教室) 龍谷大学社会学部 笠原成郎

◆閉会の辞 12:10 (101 教室) 関西社会学会常任委員 上子武次

◆西本願寺見学 14:00~16:00

第41回大会

1990年6月2日(土)、6月3日(日)

開催校 関西学院大学

第1日 6月2日(土)

◆受付開始 12:00

◆開会の辞 12:40 (B号館103室) 関西社会学会委員長 宮城 宏

◆歓迎の辞 12:50 (B号館103室) 関西学院大学社会学部長 遠藤惣一

◆重点部会 13:00~16:45

第1部会 『日本社会とエスニシティ』 (B号館103室)

司会：中野秀一郎・今津孝次郎

1. 日本近代における異文化集団への遭遇と経験

——今世紀前半の新聞の朝鮮人報道にみるエスニシティ観——

放送教育開発センター 山中 速人

2. 民族集団としての在日朝鮮人

ハワイ大学大学院 原尻 英樹

3. 都市下層と在日外国人 ——外国人労働者問題への一接近——

広島修道大学 青木 秀男

4. キャンパスのエスニシティ ——留学生問題について考える——

名古屋大学 馬越 徹

討論者 井上勝則 (アジア福祉教育財団難民事業本部姫路定住促進センター所長)

橋本 満 (大阪大学)

第2部会 『身体と社会』 (B号館104室)

司会：井上 俊・富永茂樹

1. 身体論の諸系譜

大阪大学 伊藤 公雄

2. 錯綜身体・拡張身体・浸透身体

龍谷大学 亀山 佳明

3. 見る・見られる・見せる ——オブジェとしての「女体」の戦略——

吉備国際大学 柳原 佳子

4. 身体とメディア ——身体のパラドックスをめぐって——

広島修道大学 亘 明志

討論者：田間泰子（熊本大学） 上田 裕（佛教大学）

◆総会 17:00～17:30（B号館103室）

◆懇親会 18:30～20:30（新神戸オリエンタルホテル）

第2日 6月3日（日）

◆研究報告 午前の部 10:00～12:30

[第1室] 理論I（C号館103室）

司会：厚東洋輔・鈴木正仁

1. ウェーバー近代化論の再検討

京都大学 大川 清丈

2. 合理的法治国家と国民的権力国家 ——M.ウェーバーの近代国家論再考——

神戸大学 中村 健吾

3. マックス・ウェーバーの実践的職業観

大阪産業大学 北野 雄士

4. ウェーバー社会学の諸範疇とグラムシ

鈴木 富久

[第2室] 方法（C号館202室）

司会：平松 闊・高坂健次

1. デュルケム統計学の検討

——付録 prolog KABA 上の集団力学と政治倫理都市西宮宣言——

藤原 英男

2. 社会的施策の効果分析の価値視点

龍谷大学 高津 等

3. 盛り場の社会学 ——客数を左右する要因について——

地域と社会研究所 西川 美紀

【第3室】 家族Ⅰ (C号館203室)

司会：石川 実・山中美由紀

1. 現代における「核家族化」について ——核家族主義の検討——

大阪大学 山西 裕美

2. (共同報告)

1. 現代家族と私事化状況

国立精神・神経センター精神保健研究所 清水 新二

2. 性別役割分業意識と私事化状況

大手前女子短期大学 藤田 道代

【第4室】 地域社会 (C号館204室)

司会：山本剛郎・岩崎信彦

(共同報告) 停滞型周辺都市における都市再生の主体要件

——大阪府摂津市を事例として——

1. 問題意識と調査の概要

関西大学 神谷 国弘

2. 主体要件の析出とその実態

奈良女子大学 中道 實

3. 生活意識と主体要件

同志社大学 田村 雅夫

4. 社会的ネットワークと主体要件

神戸大学 瀧本 佳史

5. 都市将来像の構造と主体要件

同志社大学 森谷 健

6. 総括

関西大学 神谷 国弘

◆研究報告 午後の部 13:30~16:00

[第1室] 理論Ⅱ (C号館103室)

司会：山口節郎・伊藤公雄

1. J.ハーバマスの生活世界論

福岡教育大学 栗岡 幹英

2. 生活世界の〈合理化〉と〈技術化〉

——J.Habermasの『コミュニケーション的行為の理論』をめぐって——

立命館大学 小林 清治

3. ブルデュー「文化資本」概念の再検討 ——教育制度効果をめぐって——

京都大学 高橋 一郎

4. 「些細なること」の社会学的意味 ——ゴフマンとブルデューを架橋するもの——

立命館大学 紀 葉子

[第2室] 理論Ⅲ (C号館202室)

司会：千石好郎・清野正義

1. 役割象限セクターと情動扇セクターの行為のシステム

——社会システムの扇形理論——

園 直樹

2. 科学的社会(科)学と普遍的秩序定立課題

——グローバル階級構造の事例分析より(2)——

英知大学 西山 俊彦

3. 世界システム論と国家類型

大阪大学 鶴飼 孝造

[第3室] 家族Ⅱ (C号館203室)

司会：井上忠司・善積京子

1. 近代日本における子どものイメージ ——『赤い鳥』を中心に——

大阪大学 河原 和枝

2. 「女中さん」の社会史 ——明治・大正期の婦人雑誌を中心に——

甲南大学 山口美智子

3. 青年の現実主義的志向と現代家族システム

神戸商科大学 八木 秀夫

【第4室】社会問題 (C号館 204室)

司会 : 宝月 誠・桜井 厚

1. 排除のエスノメソドロジー

広島修道大学 好井 裕明

2. 移民の社会学的研究 ——ジョン・レックスの多元的社会論——

立命館大学 野入 直美

3. 肺癌病棟におけるコミュニケーション

熊本大学 田口 宏昭

【第5室】アジア社会 (C号館 205室)

司会 : 口羽益生・武邑尚彦

1. 中国に対するイメージ構造の変容

関西学院大学 真鍋 一史

2. タイ国東北部ルーイ県の事例農村における村落組織とその変化

東洋大学 酒井 出

3. 南タイの村落政治におけるムスリム ——仏教徒パラダイム——

京都大学 西井 涼子

◆閉会の辞 16:10 (B号館 103室)

関西社会学会常任委員 西田春彦

第42回大会

1991年5月25日(土)、5月26日(日)

開催校 神戸大学

第1日 5月25日(土)

◆受付開始 12:00

◆開会の辞 12:40 (農学部ホール) 関西社会学会委員長 宮城 宏

◆歓迎の辞 12:50 (農学部ホール) 神戸大学文学部長 長谷川善計

◆重点部会 13:00~17:00

第1部会 日本社会とエスニシティ ——ボーダーレス時代の中で問われる日本——

(農学部ホール)

司会 青木秀男・中野秀一郎

1. 日本における外国人労働者問題の“死角”

愛知県立大学 田中 宏

2. 日本におけるエスニック・コミュニティの生態研究

広島女子大学 谷 富夫

3. 日本における言語とエスニシティ

国際基督教大学 John C.Maher

討論者 濱口 恵俊 (国際日本文化研究センター)

正村 俊之 (関西学院大学)

第2部会 現代社会と青少年問題 (文学部 351 室)

司会 間庭充幸・徳岡秀雄

1. 少年の保護と人権

大阪大学 土井 隆義

2. 学校化と脱生徒化

関西大学 岩見 和彦

3. 社会学者のジレンマ

大阪市立大学 森田 洋司

討論者 渡辺 潤 (大手門学院大学)

井上真理子 (大阪女子大学)

◆総会 17:00~17:30 (農学部ホール)

◆懇親会 17:40~19:30 (生協ランスボックス食堂)

第2日 5月26日(日)

◆研究報告 午前の部 10:00~12:30

第1室 理論Ⅰ (153室) 司会 佐藤嘉一・矢谷慈国

1. シュッツの間主観性論の再構成

京都大学 塚本 利幸

2. 「実践的社会学的推論」をめぐるいくつかの考察 -H. ガーフィンケルの記号論-

大阪大学 清水 学

3. エスノメソドロジーにおける権力概念の検討

-<今、ここ>での権力作用の解説に向けて-

好井 裕明

第2室 理論Ⅱ (156室) 司会 久慈利武・沢田善太郎

1. 社会美学序説-正規分布族の諸性質

藤原 英男

2. ブラウの交換理論再考-功利主義的理論はどのように不確実性を考慮するか-

京都大学 金子 雅彦

3. 集合財の非競合性と「集団規模のジレンマ」

-オルソン・モデルへの批判と再定式化-

金沢大学 岩本 健良

第3室 村落・宗教生活 (251室)

司会 加藤信孝・飯田剛史

1. (共同報告)五個荘町金堂の宗教生活

(1) 葬送墓制の変容と村落生活

龍谷大学 西光 義秀

(2) 神社祭礼と村落生活

龍谷大学 古賀 和則

2. イタリアの祖先崇拜—墓地・墓参事情を中心に—

高野山大学 檜垣 巧

3. タイ国東北部事例農村における村落意識と其の変化

東洋大学 酒井 出

第4室 民族・国家 (163室)

司会 野口道彦・森川真規雄

1. パークの人種・民族関係論の研究

京都大学 寺岡 伸悟

2. 広告による外国イメージの形成 —ステレオタイプの増幅作用を中心に—

関西学院大学 真鍋 一史

3. 在日華僑の婚姻と日本社会 —アイデンティティの変化を通じて—

神戸大学 過 放

4. 少数民族への回帰—福建省晋江县衙口村粘氏の満族成分回復—

甲南大学 中田 睦子

第5室 家族 (252室)

司会 清水由文・服部範子

(共同報告) 家族のライフスタイルに関する実証研究 —中間報告—

(1) 調査の概要

甲南大学 野々山久也

(2) 現代家族における「情報化への志向性」

兵庫県家庭問題研究所 山根 真理

(3) 夫および妻の夫婦関係満足度を規定するもの

愛知県立大学 神原 文子

◆研究報告 午後の部 13:30~16:00

第1室 理論Ⅲ (153室)

司会 新 睦人・三上剛史

1. 行為者－情動集合の展示

－生成的存在の社会システムの形式理論とセクター理論－

園 直樹

2. N.ルーマンにおける行為と人間

大阪大学

遠藤 竜馬

3. 労働・相互行為・合理性 ー科学技術問題と近年の J. Habermas-

立命館大学

小林 清治

4. ポスト・モダンとしてのモダン

千葉大学

長谷 正人

第2室 生活・コミュニケーション (156室) 司会 三沢謙一・吉川登

1. ライフコース・アプローチによる高齢者研究の視点について

龍谷大学

玉里恵美子

2. まちづくり問題の構図 ー社会問題構築主義からのアプローチー

京都大学

野田 浩資

3. 伝言ダイヤルをめぐるコミュニケーション

大阪大学

岡田 朋之

第3室 計量分析 (251室)

司会 西田春彦・直井 優

1. 社会階層と権威主義的態度

大阪大学

吉川 徹

2. 「中絶」数の計量的分析 ー暗数を求めてー

京都大学

高澤 淳夫

3. (共同報告) 民衆意識の分析 ーその課題と方法ー

関西学院大学

高坂 健次

奈良大学

元濱涼一郎

第4室 エスニシティ (163室) 司会 小林孝行・亘 明志

1. (共同報告) 在日韓国・朝鮮人の民族教育

(1) 民族学級における民族教育

立命館大学 野入 直美

(2) 民族学校等における民族教育

立命館大学 紀 葉子

2. (共同報告) 映像による地域社会の記述の試み

－防振ステディカムを利用した生野「朝鮮市場」の映像記録の手法と課題－

放送教育開発センター 山中 速人

大阪大学 橋本 満

第5室 宗教 (252室) 司会 小笠原真・對馬路人

1. (共同報告) 講集団の研究－宝山寺の事例より－

(1) 宝山寺と講集団の概要

関西学院大学 文屋 敬

(2) 講集団の実態

四天王寺文化研究所 清水 夏樹

(3) 講集団概括

英知大学 三木 英

2. (共同報告) 真如苑における変化と発展 －「霊能者」を中心に－

(1) 時代と「霊能者」の属性の変化

光華女子大学 川端 亮

(2) ライフ・ヒストリーと「霊能」

大阪大学 秋庭 裕

第6室 地域政治 (255室) 司会 高島 昌二・中田 実

1. (共同報告) 地域社会の政治意識と政治構造

(1) 調査研究の概要

奈良女子大学 間場 寿一

(2) 農村部の政治的保守主義について

島根大学 小林 久高

(3) 地区組織の政治的性格

摂南大学 春日 雅司

(4) 地方政治家の後継者指名

佛教大学 大橋 松行

(5) 地方政治家をめぐる社会的ネットワーク

北海道大学 鵜飼 孝造

(6) ライフコースから見た女性議員の社会的背景

大阪大学 大和 礼子

(7) 市民にとっての恥の意識－調査データにもとづいて－

国際日本文化研究センター ポーリン・ケント

◆閉会の辞 16:10 (163室)

関西社会学会常任委員 高島 昌二

第43回大会

1992年5月30日(土)、5月31日(日)

開催校 奈良大学

第1日 5月30日(土)

◆受付開始 9:20

◆役員選挙投票 9:30～14:30

◆開会の辞 9:40 (c-204)

関西社会学会委員長 宮城 宏

◆歓迎の辞 9:50 (c-204)

奈良大学社会学部長 前田 穰

◆研究報告Ⅰ 10:00～12:00

[第1室] 理論 I (c-303) 司会 磯部 卓三・富永 茂樹

1. G.H.ミードの行動主義と自我の他者性

大阪大学 岡本 祐介

2. アルチュセールのイデオロギー論の理論的前提と構成について

京都大学 宇城 輝人

3. アーバニズムと社会的ネットワーク -下位文化理論の検証-

名古屋大学 松本 康

4. 社会学的時間論の方法 -付録政治統計学序説-

藤原 英男

[第2室] 家族・性 (c-304) 司会 野々山 久也・上野 千鶴子

1. エディプス・コンプレックスとアイデンティティ

-フロイト「科学的心理学草稿」を手掛かりに-

大阪大学 竹中 均

2. 成人前期の母娘関係 -ベングツソンの家族連帯モデルの検討-

甲南女子大学 春日井典子

3. 近代日本における同性愛の社会史

京都大学 古川 誠

[第3室] 宗教 (c-305) 司会 場知賀礼文・村田 充八

1. ネットワークのうねりとイケニエの問題 -ヤマタのオロチと社会のカオス-

関西大学 木村 洋二

2. 沖縄の「門中化」に関する一考察

関西学院大学 安和 守茂

3. カトリックにおける唯一神崇拜と聖母崇拜

高野山大学 檜垣 巧

[第4室] 生活問題 (c-401) 司会 辻 勝次・嘉田 由紀子

1. 過労死を生む労働生活についての検討

－大阪「過労死110番相談事例」を手がかりにし－

大阪経済法科大学 荒岡 作之

2. 越中五箇山における地区組織の再編成について

東洋大学 酒井 出

3. (共同報告) 琵琶湖・淀川水系における水問題と生活者

－生協組合員の意識調査を中心に－

(1) 水問題への関心と環境意識

立命館大学 小林 清治

(2) 水問題への対応 －洗剤・生活排水の点検－

立命館大学 藤田 実

[第5室] 親族・宗教 (c-402) 司会 長谷川 善計・山中 美由紀

(共同報告) 在日韓国・朝鮮人の親族組織と祖先祭祀

－在日光山金氏親族会調査より－

(1) 親族会の形成と専用霊園

富山大学 飯田 剛史

(2) 親族会メンバーの社会的属性分析

京都大学 小川 伸彦

(3) 親族会と儒教的祖先祭祀

京都大学 寺岡 伸悟

(4) 親族会構成員の宗教行動とエスニシティ

東洋大学 紀 葉子

(5) 本国における親族組織と在日親族会

関西学院大学 對馬 路人

◆重点部会 13:00~17:00

第1部会 日本とエスニシティ

－日本のエスニシティ社会学に向けて－ (c-205)

司会 谷 富夫・今津孝次郎

1. 人権と市民権の問題領域 －レイシズム・セクシズム・ナショナリズム－
立命館大学 清野 正義
2. 定住マイノリティの複合的アイデンティティと二重の権利をめぐる
－ヨーロッパからの視点－
お茶の水女子大学 宮島 喬
3. 国家・言語・宗教・慣習 －東南アジアからの視点－
京都大学 前田 成文
4. 日本における「エスニシティの社会学」に向けて
関西学院大学 中野秀一郎

第2部会 時間の社会学 (c-204)

司会 井上 俊・矢谷慈園

1. 近代社会における時間意識
千葉大学 長谷 正人
2. 歴史と物語 －伝統の発明－
大阪大学 橋本 満
3. 生きられる時間／語られる時間
関西学院大学 門中正一郎
4. 不夜城幻想の検証
大阪教育大学 永井 良和

討論者 内田隆三(神戸女学院大学)・落合恵美子(同志社女子大学)

◆総会 17:00~17:30 (c-204)

◆舞楽鑑賞「蘭陵王」 17:40~18:00 (講堂)

◆懇親会 18:10~19:50 (食堂)

第2日 5月31日(日)

◆受付開始 9:40

◆研究報告Ⅱ 10:00~12:30

【第1室】 理論Ⅱ (c-303) 司会 厚東洋輔・大野道邦

1. ウェーバーの宗教社会学における「方法」

京都大学 沼尻 正之

2. 「連帯」の理論の創出—デュルケムを中心として—

京都大学 北垣 徹

3. 「革命の理論」としてのデュルケム社会学

—ズィヤ・ギョカルプにおけるデュルケム社会変動論の受容をめぐる—

富山国際大学 横井 敏秀

4. 社会学的認識とその対象 —P. ブルデュールからE. デュルケムへ—

大阪大学 西山 哲朗

5. 新・社会システム

—情動集合の社会関係における役割セクターを単位とした諸個人の行為のシステム—

園 直樹

【第2室】 コミュニケーション (c-304) 司会 渡辺 潤・正村俊之

1. 社会関係におけるノンバーバルコミュニケーション —沈黙の意味と価値—

神戸女子大学 山本 桂子

2. 癌告知とコミュニケーション

熊本大学 田口 宏昭

3. 日米におけるマルチメディアの展望比較

甲南大学 奥野 卓司

4. 社会学教育における映像活用の試み —ロールプレイング・モデルの事例—

放送教育開発センター 山中 速人

[第3室] 地域 (c-305) 司会 松本通晴・古川 彰

(共同報告) 五個荘町伊野部の地域特性

(1) 自然・社会環境

京都女子大学 舟橋 和夫

(2) 人口と世帯

龍谷大学 松下敬一郎

(3) 家族周期とあとつぎ

龍谷大学 玉里恵美子

(4) 社会参加と制御

龍谷大学 磯部 裕

(5) 宗教組織

龍谷大学 西光 義秀

(6) 社会的諸関係

龍谷大学 古賀 和則

[第4室] エスニシティ (c-401) 司会 山本剛郎・野口道彦

1. 女真族から満族へ -歴史とエスニシティ-

愛知学泉女子短期大学 中田 睦子

2. 大阪における「沖縄人(ウチナンチュー)」社会の変容に関する一考察

-大正区における聞き取りを通して-

関西大学 金城 宗和

3. 大阪における在日韓国・朝鮮人社会の変容に関する一考察

-就労過程の聞き取りを通して-

関西大学 足助 安章

4. 「不安定就業階層」をめぐって-寄せ場労働者を中心として-

広島修道大学(裁判係争中) 青木 秀男

◆閉会の辞 12:40 (c-204)

関西社会学会常任委員 間場 寿一

第44回大会

1993年5月29日(土)、5月30日(日)

開催校 梶山女学園大学 星が丘キャンパス

第1日 5月29日(土)

◆受付開始 12:20

◆開会の辞 13:00 (206教室)

関西社会学会委員長 塩原 勉

◆歓迎の辞 13:10 (206教室)

梶山女学園大学人間関係学部長 村上英治

◆重点部会 13:20~17:20

第1部会 日本近代の歴史社会学・歴史の中の近代I (135教室)

司会 筒井清忠・高橋一郎

1. 日本近代化と階層 - 武士身分の解体: 歴史社会学的研究 -

国際日本文化研究センター 園田 英弘

2. 学歴社会の構造と心性

京都大学 竹内 洋

3. 「家族」から見る日本近代 - 近代の秩序と「家庭」 -

甲南女子大学 牟田 和恵

討論 杉山光信(東京大学)・内田隆三(神戸女学院大学)

第2部会 生と死の社会学 (136教室)

司会 石川 実・徳岡秀雄

1. 日本における死の医療化

神戸女学院大学 黒田浩一郎

2. 家族変動から見た生と死 - 福祉国家スウェーデンの場合 -

追手門学院大学 善積 京子

3. 生殖テクノロジーと家族解体

大阪女子大学 井上真理子

4. 日本仏教の死生観と家族

大阪大学

大村 英昭

討論 井上忠司（甲南大学）・桜井 厚（中京大学）

◆総会 17:30～18:00（206教室）

◆懇親会 18:00～20:00（大学会館3F会議室）

第2日 5月30日（日）

◆受付開始 9:40

◆研究報告Ⅰ 10:00～12:30

【第1室】 理論Ⅰ（201教室） 司会 佐藤嘉一・宮本孝二

1. 社会システムの複雑性と統一性

長崎大学

馬場 靖雄

2. フーコー〈権力論〉再考

大阪大学

相沢 哲

3. 社会システムのセクター理論

－経験現象に関する命題群－集合のセクター転換を単位とした行為星座

－主系列星のシステム－

園 直樹

【第2室】 地域と歴史（202教室） 司会 鳥越皓之・加藤信孝

1. 親族の存在形態と機能 －滋賀県五箇荘町伊野部の事例－

龍谷大学

玉里恵美子

2. 芦生における森林環境保全と内発的発展

関西学院大学

坂本 礼子

3. 戦後の「先祖観」の変遷とその背景

高野山大学

檜垣 巧

[第3室] 国際理解 (203教室) 司会 森田洋司・北原 淳

(共同報告) 国際理解と海外日本人学校

－シンガポール、台湾、タイの日本人学校教育調査を中心として－

(1) 調査のねらいと海外日本人学校の性格

大阪府立大学 越井 郁朗

(2) 三つの地域での日本人学校の性格

大阪教育大学 澤田軍次郎

(3) 現地社会の教育制度と日本人学校

中京短期大学 上久保達夫

(4) 地域社会と日本人学校

高野山大学 豊福 陽一

(5) 異文化体験と子どもの社会化

大阪教育大学 土肥 豊

(6) 保護者の海外生活と家族

樟蔭女子短期大学 鈴木 洋昭

[第4室] 家族と教育 (204教室) 司会 亀山佳明・柳原佳子

1. 青少年の家庭内でのパーソナリティ形成 －L I S R E Lを用いた相関分析－

大阪大学 吉川 徹

2. 「児童虐待」をめぐる言説

聖カタリナ女子大学 上野加代子

3. 電子メディアによる家庭生活の変容調査

甲南大学 奥野 卓司

[第5室] エスニシティ (205教室) 司会 飯田剛史・山根真理

1. 日本にみられるフィリピン人女性の移動と適応パターンの考察

－出稼ぎと国際結婚によるエスニック・グループ形成の観点から－

京都大学 小瀬木えりの

2. 日常における「民族」の結像へのダイナミズム

－「在日朝鮮人」女性の生活史から－

大阪市立大学 伊地知紀子

3. 在日朝鮮人学生の民族的アイデンティティ形成

－L I S R E Lを用いた因果構造分析－

大阪大学 金 明秀

◆研究報告Ⅱ 13:30～16:00

[第1室] 理論Ⅱ (201教室) 司会 高坂健次・君塚大学

1. 所有権の成立過程

大阪大学 太郎丸 博

2. 社会システムにおける集権化と分権化 ー対抗関係と相補関係をめぐってー

金沢大学 碓井 崧

3. オーソリティの過剰と貧困 ー「大学組織」の意志決定モデルー

大阪府立大学 沢田善太郎

4. 民主主義と資本主義 ー集団本質論序説ー

藤原 英男

[第2室] 地域社会 (202教室) 司会 中田 実・橋本和幸

(共同報告) 混住化と地域社会 ー兵庫県姫路市天満地区の事例ー

(1) 報告の目的と概要

神戸大学 藤井 勝

神戸大学 平井 晶子

(2) 住民構成の諸特徴

神戸大学 中野 伸一

(3) 伝統的社会集団の構造

神戸大学 小林 和美

(4) 混住化の進行と自治会運営

福岡教育大学 野崎 敏郎

※午後は第3室を使用しません

【第4室】 社会問題 (204教室) 司会 鮎川 潤・中河伸俊

1. 学校への過同調を問う - 「社会勉強」論序説-
四天王寺国際仏教大学 本部 隆一
2. 「施設」というカテゴリー化をめぐる
- 知的障害者「施設」長の言説分析から -
広島修道大学 (裁判係争中) 好井 裕明
3. 社会運動における「経験」の意味
- 社会運動論と社会問題論の架橋をめざして -
関西学院大学 足立 重和
4. 資源分配の妥当性の究明と科学としての社会学の課題
- 私的所有権の論証可能性の吟味を通して -
西山 俊彦

【第5室】 国際社会 (205教室) 司会 飯田哲也・中田睦子

1. 中国における対日イメージの諸相とその変化の方向
- サーベイ・データの通時間的分析をとおして -
関西学院大学 真鍋 一史
2. 中国社会学の停滞 - 1950～1978年 -
佛教大学 星 明
3. インドネシア素形材産業における産地形成過程の分析
関西大学 大西 正曹
4. 旧ソ連における権力構造と民族問題
関西外国語大学 村井 研治

◆閉会の辞 16:10 (206教室) 関西社会学会常任委員 四方壽雄

第45回大会

1994年5月28日(土)、5月29日(日)

開催校 大阪大学 人間科学部

第1日 5月28日(土)

◆研究報告 I 10:00~12:00

[第1室] 情報・コミュニケーション (プレゼンテーションルーム)

司会 津金沢聡広・小川博司

1. 人間の脳と人工知能研究

龍谷大学 朝倉 恵俊

2. 電子メディアによる家庭生活の変容調査(Ⅱ)

甲南大学 奥野 卓司

3. 市民団体と企業の共生関係について

—ミニコミを発行している市民団体の意識調査を通じて—

地域と社会研究所 西川 美紀

[第2室] 社会変動 (21講義室) 司会 間場寿一・片桐新自

1. 社会構造の変化とライフスタイル選択可能性との関連

奈良女子大学 山下 美紀

2. 東大阪の小さな町工場 —その社会的ネットワーク—

関西大学 大西 正曹

3. 社会変動論のなかの「病理」

龍谷大学 中 久郎

[第3室] 家族 (31講義室) 司会 坪内玲子・西下彰俊

1. 事実婚にみる結婚の今日的状況

奈良女子大学 大石 美佳

2. 日本社会における婚姻制度を中心とした「異質者」産出の構造

総合研究大学院大学 武田 玲子

3. 沖縄における〈長寿文化〉の社会学的研究

甲南大学 猫田 千里

4. 国定修身書における二つの家族像

－「小さく不完全な大人」と「子ども」の併存－

京都大学 中里 英樹

【第4室】 現代文化 (41講義室) 司会 中嶋昌彌・三上剛史

1. 複製技術時代における「経験」の変容

－ベンヤミンの「衝撃の体験」の概念をめぐる－

名古屋大学 早野 禎二

2. ポスト近代社会における欲望について －フロイト理論を手掛かりとして－

関西学院大学 門中正一郎

3. 映像体験の社会史

千葉大学 長谷 正人

【第5室】 理論Ⅰ (44講義室) 司会 平松 闊・栗岡幹英

1. ロールズの公正規準の成立可能性 －方法的個人主義の立場から－

大阪大学 轟 亮

2. 〈公共性〉の今日的位相

名古屋大学 山崎 仁朗

3. ケインズ主義的福祉国家のアポリアについて

大阪大学 辰巳 伸知

4. 「理念型」の成立基盤とその展開 －整合的社会学の成立を意図して－

西山 俊彦

◆重点部会 13:00～16:50

【第1部会】 近代のふしめ・歴史の中の近代Ⅱ (51講義室)

司会 高橋三郎・金屋平三

1. 「農村モダニズム」とは何か －村にとどまるということ－

神戸外国語大学 富山 一郎

2. 政治の変質 -近代日本のナショナリズム-

京都大学 筒井 清忠

3. 犯罪現象の変化 -近代の浸透に即して-

静岡大学 間庭 充幸

4. 科学意識の変貌 -近代日本の社会学を中心に-

立命館大学 清野 正義

[第2部会] 予言の自己成就・社会学の《命題》をめぐって (31講義室)

司会 高坂健次・木村洋二

1. 宗教 -誰でも霊能者になれる-

光華女子大学 川端 亮

2. 教育 -学校間格差の発生-

金沢大学 岩本 健良

3. ジェンダー -平等化と差異化-

吉備国際大学 柳原 佳子

4. 広告 -あるテレビCMの事例から-

金城学院大学 巽 健一

第2日 5月29日(日)

◆研究報告 II 10:00~12:30

[第1室] 社会問題 (プレゼンテーションルーム) 司会 八木 正・進藤雄三

1. 螺旋運動としてのエスノメソドロジー

-エスノメソドロジストは調査実践において何をしているのか-

広島修道大学(裁判係争中) 好井 裕明

2. 主体的個人と「患者」の生命観 -バイオエシックスにみる医療社会学の課題-

金沢大学 藤田礎史郎

3. (共同報告) 観光現象の多様性

(1) 近代観光の展開

高知女子大学保育短期大学部 前田 武彦

(2) 観光のシンボリズム

お茶の水女子大学 永原 恵三

(3) 観光とコミュニケーション

聖徳学園女子短期大学 安福恵美子

4. 民主社会における価値の構造

－価値の認知創造交換等について、

理念型を用いた形式社会学（構造主義）による社会経済的研究－

藤原歴史コレクション 藤原 英男

[第2室] 組織と地域 (21講義室) 司会 横飛信昭・沢田善太郎

1. 群衆行動における「合理性」－釜ヶ崎第一次暴動を事例として－

京都大学 吉田 竜司

2. 行政機関の政策決定と執行についての組織論的再検討

大阪大学 竹本 達也

3. 教員の理念と現実

－「教職員の生活と勤務に関する調査結果」への社会学的アプローチ－

龍谷大学 山上 賢一

4. 構造分化モデルから動員モデルへ－歴史社会学における転換－

北海道大学 鵜飼 孝造

[第3室] 宗教 (31講義室) 司会 高橋憲昭・對馬路人

1. 現代日本の「まれびと」信仰と「カーゴ・カルト」

－「村おこし」の心性をめぐって－

熊本大学 芦田 徹郎

2. カリスマ論の可能性－教祖と共同体－

京都大学 水垣源太郎

3. 民族と宗教－在日朝鮮人真如苑女性信者の事例－

大阪女子大学 秋庭 裕

4. 在日韓国・朝鮮人社会の宗教的構成

大阪市立大学 谷 富夫

5. 下部組織からみた同族的結合 - 載寧李氏ソウル宗神会の事例を通じて -

名古屋大学 魯 富子

[第4室] 国際社会 (41講義室) 司会 梶谷素久・吉原和男

1. 『菊と刀』はどのように書かれたか

- 合衆国戦争情報局におけるベネディクトの研究 -

国際日本文化研究センター ポーリン・ケント

2. 博物学的インド研究の試み - 実践的な異文化とのかかわり方について -

四天王寺国際仏教大学 本部 隆一

3. 他民族・高移動社会における人口高齢化 - 現代アメリカの事例 -

富山大学 柳川 洋一

4. 体制移行への行動論的視点によるアプローチの試み

- ポーランドにおける'90~'91 stabilization program 後のケース

中部大学 加藤 昭二

[第5室] 理論II (44講義室) 司会 六車進子・片桐雅隆

1. ジンメルの「個性的法則」

神戸大学 川本 格子

2. E.サイードの理論における authority 概念

大阪大学 有田 亘

3. ガーフィンケルの行為論・リアリティー論

大阪大学 柏原 全孝

4. 祝祭と共同性

京都大学 岡崎 宏樹

5. 社会システムの一般化理論

- 恐怖に関する命題群を欲望連関のセクターに変換する活動 -

園 直樹

第46回大会

1995年5月27日(土)

開催校 大阪府立大学 総合科学部

◆研究報告 10:00~12:00

[第1室] 理論 (126講義室) 司会 高橋由典・鶴飼孝造

1. ノブレスオブリジェの生成に関する理論的研究

—P. ブルデューの理論をてがかりに—

立命館大学

長谷川秀樹

2. 情報発展様式と象徴的挑戦

大阪大学

関 嘉寛

3. 世俗化論の再検討 —近代化と宗教との関係をめぐる—考察—

京都大学

沼尻 正之

4. 法的问题の構造 —常識法学から近代法学へ—

自然石器大型手おの調査室

藤原 英男

[第2室] 知の社会学 (125講義室) 司会 原田 達・伊奈正人

1. イデオロギーの自己言及性 —主体化の仕組みとその残余—

京都大学

川田 耕

2. 社会構築主義と感情の社会学

富山大学

中河 伸俊

3. ポピュラーヒンドゥーイズムにおける不幸の説明

山口女子大学

安野 早己

4. 人間コンピューター —社会システムにおける生活和音の制御と通信—

園 直樹

[第3室] 社会体制 (124講義室) 司会 中野秀一郎・松田 昇

1. ドイツ第三帝国における「労働者」 —身体の政治力学—

京都大学

田野 大輔

2. リスク社会における「自然」

大阪大学 川野 英二

3. ナショナリズムと近代

京都大学 筒井 清輝

4. 体制移行への行動論的視点によるアプローチの試み（Ⅱ）

－ポーランドへの適用のスキーム－

中部大学 加藤 昭二

【第4室】 情報・メディア（LL講義室） 司会 荒木 功・永井良和

1. 「ジャーナリズムの科学」に関する理論的探求

－「真実」と「虚構」の位相をめぐって－

成城大学 前田 益尚

2. オラリティーからリテラシーへ －ハヴロックとオングの余白に－

大阪大学 門部 昌志

3. ポスト消費社会論のための一視点

－Michel de Certeauの「使用」概念とメディア研究－

同志社大学 高広 伯彦

4. デジタル映像とハイパーテキストによる社会学的言説の記述の方法

追手門学院大学 矢谷 慈國

関西学院大学 領家 穰

【第5室】 地域（123講義室） 司会 橋本和幸・蘭 信三

1. アルゼンティンにおける日本人移民・歴史的背景 1886～1941

－アルゼンティン・日本・ヨーロッパ－

総合研究大学院大学 小那覇セシリア

2. 在日コリアン女性のエスニック・アイデンティティ

－生野区在住者へのアンケート調査を中心に－

東洋大学 紀 葉子

3. 中山間地の現状と提言 －和歌山県のそれを起点として－

高野山大学 檜垣 巧

【第6室】 組織とライフコース (122講義室) 司会 三沢謙一・松戸庸子

1. 職業と女性のライフコース

大阪大学 田中 重人

2. 近代企業の「日本的」経営と近世商人の家業経営

－三井を中心にして－

神戸大学 多田 哲久

3. 近代日本における「老年期」

大阪大学 水嶋 陽子

4. 生協職員の組織について

－コープこうべ職員調査(1992年)の結果を中心にして－

金沢大学 碓井 崧

佛教大学 長谷川計二

【第7室】 社会問題 (129講義室) 司会 山口 透・竹川郁雄

1. 覚せい剤の社会史 －覚せい剤問題の発見と使用者イメージの変遷－

京都大学 佐藤 哲彦

2. 社会的マッチング理論から見た国公立大学入試制度

金沢大学 岩本 健良

3. 再び「学校(教室)への過同調」を問う

－だから「いじめ」はなくなるらない－

四天王寺国際仏教大学 本部 隆一

4. 認知科学的(人工知能連動)情報機器による公害と犯罪

龍谷大学 朝倉 恵俊

◆重点部会 13:00～17:00

【第1部会】 比較社会の観点からみた近代・歴史の中の近代 III (129講義室)

司会 口羽益生・金屋平三

1. ヨーロッパ社会からみた近代 －フランスにおける農村の変化－

近畿大学 山下 雅之

2. 中国からみる「近代化」 -モラルとしての社会主義-

大阪大学 橋本 満

3. 東南アジアからみた近代 -タイの小農国家理念と半植民地的近代化との間-

神戸大学 北原 淳

4. アフリカ社会と近代化 -漂泊の民から望郷の民への変貌の意味するもの-

京都大学 松田 素二

【第2部会】 情報化と人間関係 (121講義室)

司会 新 睦人・細辻恵子

1. 地域社会と情報システム -「防災」の問題を中心に-

奈良女子大学 野田 隆

2. 情報メディアによる家庭の変容 -家族の解体と再編-

ニッセイ基礎研究所 岸田 宏司

3. メディア感覚の変容 -電話回線のなかの女と男-

佛教大学 富田 英典

4. 情報メディアとしてのカラオケ -新しい文化の可能性-

桃山学院大学 小川 博司

第47回大会

1996年5月25日(土)、5月26日(日)

開催校 吉備国際大学(於 倉敷芸術科学大学)

第1日 5月25日(土)

◆シンポジウム 13:20~17:20 (1号館)

阪神・淡路大震災 -社会学者の見た実像- 司会 岩崎信彦・鶴飼孝造

1. 避難行動の諸類型 -神戸市長田区の事例-

立命館大学 中川 勝雄

2. 避難の社会地図 - 芦屋市の場合 -

関西学院大学 宮原浩二郎

3. 避難所の多義性 - ボランティア体験から -

甲南女子大学 原田 隆司

4. 家族にとっての被災 - 家族資源とストレス -

兵庫県家庭問題研究所 大矢 裕美

5. 都市ライフラインの復旧作業 - もうひとつの支援活動 -

大阪市立大学 八木 正

第2日 5月26日

研究報告 午前の部 10:00~12:30

[第1室] 理論Ⅰ (2206教室) 司会 丸木恵祐・好井裕明

1. 主意主義的行為理論の成立をめぐって

佛教大学 大東 貢生

2. 儀礼的相互行為における恥の機能

金城学院大学 早川 雅子

3. ラディカル・リフレクシビティとは何か?

- エスノメソドロジー的実践の可能性について -

大阪市立大学 兼子 一

4. 社会科学基礎論と近代社会 - 再帰性は我々をどこに導くか -

京都大学 中西真知子

[第2室] 理論Ⅱ (2203教室) 司会 中嶋明勲・大野道邦

1. 近代化過程における宗教の変容 - R. スタークの宗教社会学を中心に -

京都大学 沼尻 正之

2. モース「贈与論」における「動因」をめぐって - 原制度論のために -

神戸大学 林 大造

3. <人間>の観念と構造改革の対象 -アンリ・ド・マンをめぐる-

京都大学 宇城 輝人

[第3室] 教育 (2204教室) 司会 森田洋司・神原文子

1. 「いじめ」未成熟・目標喪失社会の病 -観衆・傍観者の問題-

四天王寺国際仏教大学 本部 隆一

2. いじめ現象について -価値面からの考察-

龍谷大学 山上 賢一

3. 大学生運動部員のモラルを規定する要因の検討

岡山大学 野上 真

4. 高学歴化と性別分業 -女性のフルタイム継続就業に対する学校教育の効果-

大阪大学・日本学術振興会 田中 重人

[第4室] 宗教 (2304教室) 司会 芦田徹郎・安野早己

<共同報告> 生駒の宗教と社会

(1) 10年後の生駒の神々

英知大学 三木 英

(2) 「石切神社」参道における「運命鑑定業者」の実態

-1985年と現在(1996年)との比較より-

関西学院大学 種田 博之

(3) 聖天信仰者の入信過程

龍谷大学 中西 尋子

(4) 南陽院の水子供養についての社会学的一考察

谷岡学園(大阪女子短期大学) 星野 智子

[第5室] 阪神・淡路大震災I (2205教室) 司会 辻 勝次・藤井 勝

1. <共同報告>移動・移転からみる震災体験

(1) 人々は阪神・淡路大震災後どのように動いたのか

関西学院大学 河村 裕之

関西学院大学 神野 賢治

(2) 「住むこと」の意味

関西学院大学 田並 尚恵

2. 共生社会に向けて -大震災下の神戸華僑社会-

神戸大学 過 放

3. 学生ボランティアの意識 -阪神大震災の事例を中心に-

甲南大学 辻野 梨花

[第6室] 政治・国際関係 (2306教室) 司会 坪内良博・森川真規雄

1. 体制移行と 'entrepreneurship'

-ポーランドにおける事例への行動論的視点の適用-

中部大学 加藤 昭二

2. ロシア連邦チェチェンにおける民族主義台頭の背景

関西外国語大学 村井 研治

3. 現代日韓関係の理解

吉備国際大学 李 分一

研究報告 午後の部 13:30~16:00

[第1室] 理論III (2206教室) 司会 山口節郎・三上剛史

1. N. ルーマンにおける「理論の実践」

大阪大学 遠藤 竜馬

2. システムとしての貨幣と言語 -形式論理からの実存的飛躍-

京都大学 中野 昌宏

3. 正義の門前 -法のオートポイエーシスと脱構築-

長崎大学 馬場 靖雄

4. 分権化の説明論理 -集権化と分権化の代替関係をめぐって-

金沢大学 碓井 崧

[第2室] 阪神・淡路大震災Ⅱ (2203教室) 司会 森田三郎・小松秀雄

1. 神戸市の避難所対策と避難者の生活 -災害援助法打ち切りと避難者-
兵庫医科大学 日野 謙一
2. <共同報告>街区の特徴と住民の避難類型 -神戸市長田区A街区の事例から-
 - (1) 調査概要と街区の特徴
立命館大学 河原 晶子
 - (2) A街区の老人ホーム入所者の実態と問題
立命館大学 近藤 理恵
 - (3) 住民の縁故避難の諸特徴 -親族世帯への避難を中心に-
立命館大学 樋口 博美
 - (4) 公営避難所の運営と避難者の生活 -神戸市長田区A小学校を事例として-
立命館大学 棚山 研

[第3室] 医療・福祉 (2204室) 司会 服部範子・進藤雄三

1. 当事者による医療へのアクセスと参加
金沢大学 藤田礎史郎
2. 摂食障害者の自助グループ
大阪大学 仲田 裕子
3. 老親扶養意識と福祉国家
大阪大学・日本学術振興会 大岡 頼光
4. 老後の生活費についての不安感の関連要因
大阪大学・日本学術振興会 轟 亮

[第4室] 文化 (2304教室) 司会 亀山佳明・奥野卓司

1. 雑誌記事における恋愛のディスカール
大阪大学 谷本 奈穂
2. 出版および活字メディアに対する読み手像の変容とその地平
-文学の受容理論を手掛かりに-
成城大学 前田 益尚

3. オウム真理教への視点

関西大学 木村 洋二

4. 政党組織の変化

同志社大学 青木 康容

[第5室] 社会学研究法 (2205教室) 司会 古川 彰・斎藤友里子

1. フィールドワークの方法に関する一考察

甲南女子大学 狩谷あゆみ

2. 参与観察調査におけるラポールをめぐる一考察

広島修道大学 中根 光敏

3. Well-Being の構造の国際比較

—R.Inglehart『世界価値観調査データ』による検証—

関西学院大学 真鍋 一史

4. 説明と推定における対立と統合

藤原 英男

[第6室] 地域と労働 (2306教室) 司会 松本 康・富山一郎

1. 都市下層と労働 —広島県A地区を事例として—

広島修道大学(裁判係争中) 青木 秀男

2. 辺地農山村の過疎対策 —長期展望下の一試案—

高野山大学 檜垣 巧

3. 大蔵永常と近世農業思想 —永常評価の相違を巡って—

大阪産業大学 北野 雄士

第48回大会

1997年5月24日(土)、5月25日(日)

開催校 金城学院大学

会場 第1日 金城学院大学 第2日 名古屋ガーデンパレス

第1日 5月24日(土)

◆受付開始 9:00

◆研究報告Ⅰ 10:00~12:30

[第1室] 震災Ⅰ (E3-305)

司会 中川勝雄(立命館大学)、小松秀雄(神戸女学院大学)

1. 「震災転出者」に関する分析 - 「西宮市からの転出者調査」から -
関西学院大学 豊島慎一郎
2. 阪神淡路・島原・奥尻 災害復興過程の地域比較研究
 - (1) 被災地の住環境整備手法とまちづくり活動
神戸学院大学 三輪 嘉男
 - (2) コミュニティ再建と地域住民組織
大手前女子大学 佐藤 彰男
 - (3) 家族生活の再建へ向けて - 家族危機への対応の視点から -
富山福祉短期大学 平松 道夫

[第2室] 理論・学説Ⅰ (E3-301)

司会 六車進子(神戸女学院大学)、宮原浩二郎(関西学院大学)

1. モーリス・パレス『デラシネ』にみるナショナリズム
京都大学 北垣 徹
2. 啓蒙の困難 - 主体、社会化、コミュニケーション -
京都大学 富永 茂樹
3. 「文明化の過程」と人間像の変貌 - ノルベルト・エリアスの業績の理論的可能性 -
大阪大学 内海 博文

4. ジンメル近代文化論のパースペクティブ
—『貨幣の哲学』における個人の地位—

神戸大学 徳田 剛

[第3室] 理論・学説Ⅱ (E3-303)

司会 伊藤公雄(大阪大学)、中島道男(奈良女子大学)

1. コミュニケーションと「意味作用の政治学」

同志社大学 粟谷 佳司

2. 社会—環境システムの構想と限界

長崎大学 馬場 靖雄

3. デュルケム、およびパーソンズ理論における「社会」

金城学院大学 嶋守さやか

[第4室] 社会史 (E3-205)

司会 金屋 平三(奈良大学)、牟田 和恵(甲南女子大学)

1. 消費者信用産業の成立とその変遷 —「債務」の社会学的考察—

京都大学 大山 小夜

2. 競輪の社会史 —競輪の変容過程に見るギャンブルとスポーツの関連性—

大阪大学 古川 岳志

3. 「日本の近代」と「児童の身体」 —座る姿勢の明治大正史—

京都大学 西村 大志

4. 健康の社会史 —健康関連語彙の変遷を中心に—

中京大学 丹羽さゆり

[第5室] 家族・ジェンダー (E3-405)

司会 野々山久也(甲南大学)、山中美由紀(龍谷大学)

1. 「セクシュアル・ハラスメント」と状況適合性のルール

金城学院大学 乙部 由子

2. 出生力が抑制されるメカニズムに対する見解とその誤謬

龍谷大学 平松紀代子

3. 夫の家事参加の規定要因に関する計量的分析

大阪大学 桜間 真

4. 女性出稼ぎはジェンダー役割を変えるか？

－フィリピン女性の国際移動による家族・ジェンダーへの影響について－

学術振興会（京都大学） 小瀬木えりの

[第6室] 地域 (E3-201)

司会 西山八重子（金城学院大学）、鯉坂 学（同志社大学）

1. 都市変動と Urban Poor : Manila を事例として

都市社会学研究所 青木 秀男

2. 住民自治組織の比較研究

(1) 中国の居民委員会を事例として

| | |
|--------|-------|
| ○名古屋大学 | 黒田 由彦 |
| 愛知学泉大学 | 中田 實 |
| 東海学園大学 | 宮本 益治 |
| 岐阜大学 | 山崎 仁朗 |
| 名古屋大学 | 林 鮮明 |
| 名古屋大学 | 徐 春陽 |

(2) スウェーデンの場合

| | |
|----------|-------|
| ○東海学園大学 | 宮本 益治 |
| 市邨学園短期大学 | 吉田 啓子 |

3. 地域社会の女性リーダー －都市近郊農業地域と沿岸漁業地域の事例から－

| | |
|-------------|-------|
| ○奈良女子大学 | 藤井 和佐 |
| 奈良佐保女学院短期大学 | 木村 都 |

[第7室] 寄せ場・野宿生活者 (E3-401)

司会 八木 正（大阪市立大学）、中河 伸俊（富山大学）

1. 都市下層と寄せ場 －構築される〈釜ヶ崎〉から構築する〈釜ヶ崎〉へ－

広島修道大学 中根 光敏

2. 野宿者問題の構築 －神戸市の生活保護行政を中心として－

甲南女子大学 狩谷あゆみ

3. 大阪市中南部における野宿生活者の状態

－ 1995年度「野宿生活者聞き取り調査」より－

- 大阪市立大学 森田 洋司
- 大阪市立大学 島 和博
- 大阪市立大学 谷口 重徳
- 鹿児島女子大学 近藤 諭

[第8室] 階層 (E3-202)

司会 奥川櫻豊彦(立命館大学)、尾嶋史章(大阪経済大学)

1. 多次元尺度構成法による職業威信評定パターンの検討

光華女子大学 太郎丸 博

2. 社会階層と交際

大阪大学 菅野 剛

3. 社会階層と自己認識

大阪大学 木村 好美

4. 生活価値と職業階級

大阪大学 高田 洋

[第9室] 宗教 (E3-203)

司会 小笠原真(龍谷大学)、沼田健哉(桃山学院大学)

1. 滋賀県における葬祭業の発展と死の商品化

－職業別電話帳(タウンページ)の葬祭業広告の分析から－

京都大学 呉 知恩

2. 知識の科学的様式化

－EM[Effective Micro-organisms]をめぐる世界救世教系教団の動向－

関西学院大学 種田 博之

3. 墓参のなかの想起と贈与 －ある村落両墓制の解説－

京都大学 高村 竜平

4. 大阪における韓国系キリスト教会の諸相

龍谷大学 中西 尋子

第49回大会

1998年5月23日(土)、5月24日(日)

開催校 甲南大学

第1日 5月23日(土)

◆受付開始 9:30

◆研究報告Ⅰ 10:00~12:30

[第1室] 理論・学説Ⅰ (331号)

司会 三上剛史(神戸大学)、柳原佳子(吉備国際大学)

1. 会話と議論 -啓蒙の困難・2-

京都大学 富永 茂樹

2. 暴力の社会学序説 -ノルベルト・エリアスを手がかりにして-

大阪大学・日本学術振興会 内海 博文

3. 衝撃と反復 -フロイトとバタイユの理論から-

京都大学 岡崎 宏樹

4. ジンメル形式社会学における他者性と距離

名古屋大学 山口 宏

[第2室] 理論・学説Ⅱ (332号)

司会 細辻恵子(光華女子大学)、森田 洋司(大阪市立大学)

1. 社会化の概念を越えて

龍谷大学 亀山 佳明

2. いじめに関する社会学的考察 -過程モデル構築の試み-

奈良女子大学 三浦 恭子

3. 紛争理論における分析枠組の再考

関西大学 岩橋 建治

4. モーツァルトの「固有音」をめぐる

大阪大学 有田 亘

【第3室】 社会史 I (333号)

司会 進藤雄三 (奈良女子大学)、森下伸也 (金城学院大学)

1. 「失業」の成立まで —社会問題のエピステモロジー—
京都大学・日本学術振興会 宇城 輝人
2. ヒステリーと催眠 —1880年代フランスの精神医学的言説—
京都大学 北垣 徹
3. ジャック・アンド・ベティ —戦後日本におけるアメリカニゼーション—
関西学院大学 岩本 茂樹
4. 中国における「青年」の成立をめぐって
大阪市立大学 陳 映芳

【第4室】 社会意識 (334号)

司会 高橋由典 (京都大学)、ポーリン・ケント (龍谷大学)

1. 近代日本における「不潔」意識 —水をめぐって—
大阪大学 柏原 全孝
2. 感情社会学における「感情の社会性」という主題
—死別経験者の悲哀感情を題材として—
大阪大学 樋口 昌彦
3. 「見ない」行為の作用と「集まり」の秩序
—市役所に於ける参与観察の報告—
熊本大学 坂本 理恵
4. 大学生の生活満足度 II
—A大学新設B学部の一学期生を対象とした追跡調査から—
○龍谷大学 柴田 和子
龍谷大学 古川 秀夫

【第5室】 地域 (335号)

司会 中田 実 (愛知学泉大学)、古川 彰 (中京大学)

1. コミュニティー測定のための理論的考察
奈良女子大学 眞鍋 知子

2. 韓国における住民自治組織の実態と社会的機能

名古屋大学 魯 富子

3. 都市同郷団体の生成と変容の要因について

同志社大学 湯浅 俊郎

4. 林業の後継者問題と提言

高野山大学 檜垣 巧

【第6室】 社会参加（336号）

司会 米田 頼司（和歌山大学）、井上 眞理子（大阪女子大学）

1. 男女共同参画社会構想とジェンダー

吉備国際大学 関根 聡

2. 現代主婦の社会参加とライフスタイル

奈良女子大学 稲垣恵つ子

3. 社会参加にみる階層分化 —社会階層と社会的活動—

関西学院大学 豊島慎一郎

【第7室】 国家・エスニシティ（343号）

司会 山口 節郎（大阪大学）、黒柳 晴夫（椋山女学園大学）

1. カルチュラル・スタディーズと国民国家

—グローバル・(ポスト)コロニアル・トランスナショナル—

神戸大学 松田いりあ

2. マイノリティ・ナショナリズムから暴力の問題へ

日本学術振興会 長谷川秀樹

3. オクシタン運動を考える

—ヨーロッパ少数言語文化生き残りへの模索と多言語主義—

甲南大学 乾 清可

4. 「在日」である・「在日」になる・「在日」をする

—在日韓国朝鮮人の若者を事例にして—

甲南女子大学 狩谷あゆみ

[第8室] 産業・労働・組織 (344号)

司会 藤田栄史 (名古屋市立大学)、松戸武彦 (奈良大学)

1. 感情共同体とバーナード理論

四国学院大学 竹本 達也

2. 産業精神衛生の導入と展開

大阪大学 中川 輝彦

3. 東大阪の貸工場 —15年の変遷—

関西大学 大西 正曹

4. 韓国における終身雇用制の変容 —ヒュンデ (現代) グループの事例を中心に—

大阪市立大学 尹 淑鉉

[第9室] 高齢者 (345号)

司会 牧里每治 (大阪府立大学)、岡元行雄 (兵庫県立看護大学)

1. 高齢者の自立と人権 —強制される健康—

金城学院大学 嶋守さやか

2. 家族のライフスタイル化と高齢者介護

○甲南女子大学 春日井典子

甲南大学 野々山久也

甲南女子大学 呂 楠

甲南大学 片岡 佳美

甲南大学 栗山 直子

3. 介護についての社会システム論的考察

奈良女子大学 中西 亜弥

4. 老人福祉におけるスウェーデンモデル普遍化への批判

—福祉国家比較のジェンダー化論の批判とオランダの事例から—

大阪大学・日本学術振興会 大岡 頼光

【第10室】 性・ジェンダー (346号)

司会 黒田浩一郎(神戸女学院大学)、田間 泰子(大阪産業大学)

1. 生殖医療の過去と現在

京都大学 真野 京子

2. 認可されていない経口避妊薬(ピル)をめぐる日本女性のマスメディアディスコース

大阪大学 ビタレ・アナリア

3. 大衆雑誌における「性欲」に関する言説からみた

女性のセクシュアリティに対する意味付けに関する研究

奈良女子大学 羽瀬 一代

4. 身体とジェンダー規範

金城学院大学 乙部 由子

◆重点部会 13:30~17:00

第1部会 『阪神・淡路大震災Ⅲ 3年余の現実から見えてくるもの』(141号)

司会 森田三郎(甲南大学)、野田 隆(奈良女子大学)

はじめに —大学の震災体験—

甲南大学 森田 三郎

1. 被災者の心・その変遷 —精神科医療の窓口から—

神戸・精療クリニック小林 小林 和

2. 被災者の生活実態と課題

—仮設住宅でのアルコール依存症者への取り組みを中心として—

関西学院大学 立木 茂雄

3. 被災密集市街地の再生と被災者の「主体的共同化」の条件について

立命館大学 吉川 忠寛

討論者：浜岡政好(佛教大学)、三輪嘉男(神戸学院大学)

第2部会 『社会学理論の争点Ⅱ ―組織、制度を再考する―』 (133号)

司会 佐藤嘉一(立命館大学)、片桐雅隆(中京大学)

1. 相互行為と制度 ―エスノメソドロジ－的制度研究の現在―

徳島大学

樫田 美雄

2. 構成主義的な役割観と制度・組織の理解

静岡大学

栗岡 幹英

3. 制度と社会学 ―デュルケム＝ベラーの系譜から―

奈良女子大学

中島 道男

討論者：中河伸俊(富山大学)、大澤真幸(京都大学)

◆総会 17:10～17:50 (141号)

◆懇親会 18:00～20:30 (学友会館)

第2日 5月24日(日)

◆受付開始 9:30

◆研究報告Ⅱ 10:00～12:30

[第1室] 理論・学説Ⅲ (331号)

司会 新 睦人(奈良女子大学)、宮本孝二(桃山学院大学)

1. 物象化・システム・場 ―観察者の眼と実践者の眼に関する方法論的再検討―

京都大学

福永 英雄

2. 社会の機能分化と統一性

長崎大学

馬場 靖雄

3. リスクのグローバル化とグローバル化のリスク

―ネオリベラリズムに抗する社会学―

大阪大学

川野 英二

4. 現代ナルシズム社会の根本問題 ―C. ラッシュの所論を媒介にして―

神戸山手女子短大

金田 福男

[第2室] 知識・コミュニケーション (332号)

司会 木村洋二 (関西大学)、長谷正人 (千葉大学)

1. 「教室言語」研究における境界越えという視点
—M.バフチンの発話論とフィールドワーク経験との往還から—
日本学術振興会 倉石 一郎
2. コンテキストの解説者としてのプロフェッショナル
同志社大学 藤本 昌代
3. 古い言説の変容 —正当化の方法としての先祖供養=宗教—
関西学院大学 種田 博之
4. 「言語の共同体」概念をめぐる
—レイモンド・ウィリアムズ『田舎と都会』を批評する—
大阪大学 吉沢 弥生

[第3室] 社会史Ⅱ (333号)

司会 蘭 信三 (京都大学)、藤井 勝 (神戸大学)

1. 日本の伝統家族と養子
龍谷大学 坪内 玲子
2. 満州映画協会
大阪大学 クレイガン・ワッツ
3. 植民地の記憶の社会学 —日本人にとっての満州経験—
京都大学 坂部 晶子
4. 京都岩倉の精神医療史と行政 —精神病患者監護法と岩倉コロニーの発展—
京都大学 丸木 泰史

[第4室] 文化・伝統 (334号)

司会 金屋平三 (奈良大学)、高井康弘 (大谷大学)

1. 長刀と獅子舞 —ふたつの「伝統」にみるアイデンティティの比較考察—
神戸大学 今井 信雄
2. 現代の家庭におけるあいさつ行動の日韓比較 —ホームドラマの分析から—
奈良女子大学 金 香来

3. 在日韓国人社会と母国社会との交流の特性 — 葬送儀礼の変化を中心に—
京都大学 呉 知恩

4. カーストの存在理由について
四天王寺国際佛敎大学 本部 隆一

[第5室] 運動・ネットワーク (335号)

司会 田中 滋 (龍谷大学)、碓井 崧 (金沢大学)

1. 草の根の「言説」と民衆の「コトバ」 — バングラデシュNGO調査を下に—
神戸学院大学 坂本 真司

2. 社会運動論 — 全共闘世代のトラウマを通して—
愛知学泉女子短期大学 野々垣友枝

3. 地域社会研究における〈交流〉の理論化へ向けて
— 基礎的諸理論の検討を中心に—
愛知大学 塚本 善弘

4. 高齢社会と地域ネットワーク — 在宅福祉におけるNPOと女性—
○名古屋福祉法経専門学校 石田 路子
三重大学 高橋ますみ

[第6室] 震災 (336号)

司会 荻野昌弘 (関西学院大学)、谷口浩司 (佛敎大学)

1. 阪神大震災4年目の地域状況
(1) 神戸市長田区鷹取東におけるまちと住宅の復興
神戸大学 岩崎 信彦
神戸大学 徳田 剛

(2) 神戸市長田区鷹取東における被災生活の苦闘
神戸大学 伊藤亜都子
神戸大学 大原 径子

2. 震災の被害と再建に見る都市と農村の比較 — 神戸市長田区と北淡町富島地区—
立命館大学 辻 勝次

3. 阪神・淡路大震災に関わる知識社会学的問題

—専門家と民衆の知識の自明性について—

関西学院大学

高坂 健次

[第7室] 宗教 (343号)

司会 谷 富夫 (大阪市立大学)、飯田剛史 (富山大学)

1. 天理教の発生過程

大阪大学

岡尾 将秀

2. 戦後日本社会の宗教現象

大谷大学

寺林 脩

3. イメージとしての「オウム真理教」

(1) 雑誌報道のなかの「オウム真理教」

神戸大学

池田 太臣

(2) オウム真理教というアリーナ

京都大学

野中 亮

[第8室] 階層 (344号)

司会 中道 實 (奈良女子大学)、吉川 徹 (静岡大学)

1. 政治意識と社会階層

島根大学

小林 久高

2. 高齢者における社会階層と役割の意味

—役割喪失と社会階層が価値意識・自己評価に及ぼす影響—

大阪大学

木村 好美

3. 世代間移動における境界浸透性とライフスタイル

大阪大学

高田 洋

4. 社会的ネットワークの諸特性に対する社会階層の効果

大阪大学

菅野 剛

〔第9室〕 家族・結婚 (345号)

司会 八木秀夫 (神戸商科大学)、宮坂靖子 (奈良女子大学)

1. 国際結婚の歴史に関する社会学的考察 —明治時代を中心に—
金城学院大学 竹下 修子
2. 国際結婚家庭における夫婦間のコミュニケーション
大阪大学 施 利平
3. 現代日本の家族規範について
大阪大学 中尾 香
4. 家族と社会階層 —クロス・クラスファミリーの特性—
大阪大学 桜間 真

〔第10室〕 地方行政 (346号)

司会 嘉田由紀子 (滋賀県立琵琶湖博物館)、奥野卓司 (関西学院大学)

1. 地方自治体の広報とインターネット
関西大学 山本 素世
2. 女性「漁業士」認定制度の意義 —CPS (地域権力構造) 論の観点から—
摂南大学 藤井 和佐
3. 地方行政にみる〈男女共同参画社会〉 —大阪府の施策を事例として—
佛光大学 大東 貢生

第50回大会

1999年6月5日(土)、6月6日(日)

開催校 関西大学

第1日 6月5日(土)

◆受付開始 9:30

◆研究報告 | 10:00~12:30

[第1室] 理論・学説Ⅰ (118教室) 司会：新 睦人 (広島国際学院大学)

1. 感情のキューブモデルと社会システムの状相運動

——自由と平等、希望と恐怖を次元とする位相空間のソシオン理論による記述——

関西大学 木村 洋二

2. ハビトゥス概念の批判的検討 ——身体技法論の展開に向けて——

京都大学 倉島 哲

3. 私的所有権の不条理性 ——社会学の成立根拠を共有するために——

西山 俊彦

4. 社会集団誌における基本問題の体系

——附録 母比率の区間推定を用いた2項検定法——

藤原 英男

[第2室] 社会移動 (303教室) 司会：佐々木衛 (神戸大学)

1. 現代中国社会における社会移動と婚姻の動向

名古屋大学 林 明鮮

2. 現代中国の流動人口の社会変容

——四川省合川県の一農村からの出稼ぎ者を事例として——

京都大学 楊 聡

3. 国際移動 (トランスナショナル・モビリティ) とシティズンシップ概念の変遷

——アフリカにおける「教育」のフィールドワーク研究に向けて——

京都大学 小林かおり

[第3室] 家族 (304教室) 司会：神原文子 (相愛大学)

1. 「空の巣 (empty-nest)」期に関する一調査研究

奈良女子大学 石川 実

ノートルダム清心女子大学 山下 美紀

鎌倉女子大学 大石 美佳

○奈良女子大学 本村めぐみ

奈良女子大学 山口 貴子

2. 女子学生と水商売 ——水商売でアルバイトする女子学生から家族を観る——

帝塚山短期大学 岡本 晴行

3. 韓国における「しつけ」の伝統

——安東の李家と柳家におけるしつけの事例から——

大阪市立大学 趙 美景

[第4室] 都市・地域Ⅰ (206教室) 司会：山本剛郎 (関西学院大学)

1. 阪神大震災被災者の生活・意識とボランティア

——ベルボックス・ケアセンター調査からみた現況と展望——

○神戸大学 浅野 慎一

神戸大学 新垣 正美

2. 公営住宅入居後における被災者の意識と生活

——尼崎市・公営住宅団地の比較調査をもとに——

大手前女子大学 佐藤 彰男

3. 地域の活性化と文化の再編成 ——串原の組の太鼓と中山太鼓——

京都大学 芝村 龍太

4. タクシードライバーの職業特性に対する社会学的考察

——大阪市および京都市における定性的調査をもとに——

○関西大学 岩橋 建治

関西大学 南田 勝也

関西大学 岡本 朝也

関西大学 南 裕一郎

[第5室] 文化 (220教室) 司会：奥野卓司 (関西学院大学)

1. 遊園地の文化社会学

愛知学泉大学 上田 裕

2. 「それいけ！アンパンマン」の社会学

大阪大学 マルチェッラ M. マリオッティ

3. 広告と観光の「風景産業」としてのモデル化
——アジア諸国のクルマ図像を事例として——

武庫川女子大学 藤本 憲一

4. 韓国テレビ広告の内容分析

同志社大学 森津 千尋

[第6室] 医療 (204教室) 司会：進藤雄三 (奈良女子大学)

1. 江戸時代の産科書にみる医療の近代化とその受容

京都大学 眞野 京子

2. 大正期における「神経衰弱」の流行

京都大学 近森 高明

3. “アダルト・チルドレン”というアイデンティティ

——AC概念自体が孕む葛藤とACムーブメントの課題——

京都大学 鎌原 利成

4. 患者・障害者の精神保健——医療・福祉研究に残された課題——

小松短期大学 藤田礎史郎

[第7室] 宗教 (305教室) 司会：谷 富夫 (大阪市立大学)

1. 新カント派の宗教哲学とジンメル

名古屋大学 山口 宏

2. マックス・ウェーバーによる『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』
改訂について

龍谷大学 朝倉 惠俊

3. 近代化における近世宗教の特質

佛教大学 新矢 昌昭

4. カルトからの脱会 ——統一教会信者救出活動の事例——

大阪大学 渡邊 太

◆総合シンポジウム 13:30～17:00 (101教室)

『社会学の応用可能性 ——社会学に何ができるのか——』

司会：塩原勉（甲南女子大学） 中野正大（京都工芸繊維大学）

1. 社会学とジェンダー・ポリティクス

大阪大学 伊藤 公雄

2. 環境からみた社会学の応用可能性

筑波大学 鳥越 皓之

3. 青少年対策と青少年（問題）の変質

京都大学 徳岡 秀雄

討論者：田間泰子（大阪産業大学） 松田素二（京都大学） 森田洋司（大阪市立大学）

◆総会 17:10～17:50 (101教室)

◆懇親会 18:00～20:00 (百周年記念会館)

第2日 6月6日（日）

◆受付開始 9:30

◆研究報告Ⅱ 10:00～12:30

[第1室] 理論・学説Ⅱ (303教室)

司会：佐藤嘉一（立命館大学）

1. アドルノの「経験」概念について

大阪市立大学 木村 吉孝

2. リオタール／ハーバーマス論争再考

松山大学 千石 好郎

3. シュッツによる多元的現実論における日常生活世界の位置づけ

京都大学 小関 彩子

4. 聖－俗－遊論再考 ——カイヨワからバタイユへ——

龍谷大学 亀山 佳明

[第2室] 都市・地域Ⅱ (118教室) 司会：藤井 勝 (神戸大学)

(共同報告) まちづくりと地域共生 ——学研都市を事例に——

(1) 学研都市調査の概要

同志社大学 三沢 謙一

(2) 地域社会の変化と新旧住民の共生関係

聖隷クリストファー看護大学 南 育広

(3) 主婦とソーシャル・ネットワーク

同志社大学 天木志保美

(4) 高齢者介護と地域医療

武庫川看護専門学校 山脇 敬子

(5) 学研都市の生活環境

同志社大学 杉本久未子

(6) 地域概念の形成過程における公園の機能

同志社大学 栗本 修滋

[第3室] 組織 (206教室) 司会：沢田善太郎 (大阪府立大学)

1. 組織の理論的考察

神戸大学 竹中 克久

2. 組織における文化の役割 ——「文化の戦略」論の存立可能性——

名古屋大学 高木 裕宜

3. 共同体とアイデンティティ

四国学院大学 竹本 達也

4. 集団意思決定における信頼の対称性と推移性の影響

カリフォルニア大学アーバイン校 辻 竜平

[第4室] 社会意識・コミュニケーション (304教室)

司会：丸木恵祐 (金城学院大学)

1. 社会の心理学化の分析に向けて

大阪大学 中川 輝彦

2. 現代的自我におけるリアリティ感覚

神戸大学 池田 径

3. 高度情報化とコミュニケーション

京都大学 福永 英雄

4. 消費社会の移行 ——名前の変化から——

同志社大学 小林 大祐

[第5室] エスニシティ・国際関係 (220教室) 司会：中野秀一郎 (奈良女子大学)

1. ネーション-ステイトの近代と前近代 ——その並存の機制に関する社会理論——

京都大学 野村 明宏

2. フランスにおける移民の社会運動 ——暴力を巡って——

京都大学 福浦 一男

3. ナショナル・アイデンティティの構造 ——ISSP 国際比較調査のデータ解析——

関西学院大学 真鍋 一史

[第6室] ジェンダー (305教室) 司会：柳原佳子 (吉備国際大学)

1. ゴフマン理論の射程 ——ジェンダー・スタディーズの豊富化へ向けて——

立命館大学 高橋 裕子

2. 男性保育従事者のキャリア形成

奈良女子大学 中田 奈月

3. 女性労働に関する社会学的一考察

——小売業におけるパートタイマーを中心として——

金城学院大学 乙部 由子

4. 週刊誌「アサヒ芸能」にみる戦後日本の性風俗とその変遷

——1957年から1959年の記事を中心に——

大阪大学 景山佳代子

[第7室] 歴史 (306教室) 司会：竹内 洋 (京都大学)

1. 日本型「世論」の形成過程

京都大学 宮武実知子

2. 『主婦之友』にみる女性の稽古事の歴史社会学的考察

京都大学 鈴木 幹子

3. 「言語過程説」のなかのナショナリズム

同志社大学 福間 良明

4. 地域への介入と地域の再編をめぐる

——沖縄占領における軍事と知の社会学的考察——

京都大学 石原 俊

◆ミニシンポジウム 13:30~17:00

第1部会『社会学は「役に立つ」か？

——犯罪・社会問題の経験的研究を通して考える——』（202教室）

コーディネーター：鮎川 潤（金城学院大学）

1. <社会問題の社会的アプローチ>は役に立ったか

——児童虐待問題研究から考える——

武庫川女子大学 上野加代子

2. 「世直しモード」はなぜ流行らないのか？

——「社会」イメージの変容をめぐる——

筑波大学 土井 隆義

3. 組織体犯罪研究から見えてくること ——熊本水俣病事件の研究から——

奈良大学 平岡 義和

4. 社会調査の実践的コンテクスト ——「野宿生活者調査」の経験から——

大阪市立大学 島 和博

討論者：松下武志（京都教育大学） 平 英美（滋賀医科大学）

第2部会『ディシプリンとしての社会学

——そのアイデンティティとキャパシティ——』（220教室）

コーディネーター：大野道邦（神戸大学）

1. 社会学と国民国家・グローバリゼーション

神戸大学 油井 清光

2. ポストモダニティの社会学とシステム理論

神戸大学 三上 剛史

3. 社会学における文化の位置

関西学院大学 荻野 昌弘

4. 社会学とreflexivity

桃山学院大学 宮本 孝二

討論者：厚東洋輔（大阪大学） 馬場靖雄（大東文化大学）

第3部会『臨床のことばと学(術)のことば』（215教室）

コーディネーター：大村英昭（大阪大学） 宮原浩二郎（関西学院大学）

1. 臨床社会学の可能性 ——臨床のことばを通して——

京都芸術短期大学 藤澤 三佳

2. セルフヘルプグループと「当事者のことば」

千葉大学 長谷 正人

3. 隠蔽のことば ——不治の病の告知をめぐるコミュニケーション——

南山大学 阪本 俊生

4. 口述の語りと学のことば

日本女子大学 小林多鶴子

5. 信仰の中のことば

大阪大学 川端 亮

6. 計量の「ことば」と社会現象

同志社大学 尾嶋 史章

7. 「警報伝達システム」から

奈良女子大学 野田 隆

8. 学校秩序と解釈コード

京都大学 稲垣 恭子

9. 行ったり来たり ——現場のことばと現場の関心——

富山大学 中川 伸俊

10. 臨床社会学の可能性をめぐる

関西大学 架場 久和

第4部会『知の考現学としての可能性』（406教室）

コーディネーター：高坂健次（関西学院大学）

1. 「啓発する知」と「知の啓発」

広島国際学院大学 好井 裕明

2. 生きていく原点に立ちかえって考え直すこと

追手門学院大学 矢谷 慈國

3. 「関西」言説の現在

関西大学 黒田 勇

討論者：橋本 満（大阪大学） 石田佐恵子（大阪市立大学）

編集あとがき

関西社会学会が1950（昭和25）年に第1回の大会を開催してから、ちょうど50年の節目を迎えました。京都大学で開かれたはじめての大会の参加者は76名、発表者はわずか2名でした。ところが昨年、関西大学で行われた50周年記念大会は、じつに参加者450名、報告は83本という盛況ぶりでした。会員は東海北陸から四国九州まで広がり、その数も年々増加の一途をたどり、2000年4月の時点では835名にのぼっています。このたび、昨年の記念大会で行われたシンポジウムの成果をまとめて、『関西社会学会のあゆみ——創立50周年を記念して』を発刊しました。また25周年の記念誌（1975年刊）に掲載された第1回大会から25回大会までのプログラムに引き続き、第26回から50回大会までのプログラムを掲載しました。これらによって、関西社会学会の半世紀にわたる学問的発展がよくわかると思います。

新たなミレニアム、新たな世紀に向かって、本学会がさらに着実に歩みを重ねることができそうです。皆さまのご指導ご協力をお願いいたします。

（関西社会学会事務局 松田素二）

関西社会学会のあゆみ 第26回大会（1975年）～第50回大会（1999年） ——創立50周年を記念して——

2000年5月25日

発行

関西社会学会

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部社会学研究室内

TEL 075-753-2758 / FAX 075-753-2836

郵便振替口座 01020-9-6395

印刷

（株）北斗プリント社

〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町38の2

TEL 075-791-6125

